360
378

年報

1

1934

千代田生命體育會山岳部

始

特239
321

年報

I

1934

目次　第一號

（昭和八年十一月　昭和九年六月）

隨想

山への想念と山岳部の指導精神　草野嘉一（一）
「登山」一考察　伊澤桂三郎（一〇）
山可樂　川野清一郎（一三）
山の牽く力　芦田金之助（一四）
低山讃歌に和して　堀貞一（一七）
初めてスキーをはく　若栞三雄（二一）
心のオアシス　青木茂（二五）
山の誘惑を感するまで　村塚志朗（三一）

詩篇

旦　射水俊雄（四一）
岳友におくる　山本清一（四三）

山旅拾集錄　宮氏保（四四）
谿　朝賀義男（四六）
　　淺田信次郎（四九）

紀行

燕岳・大天井・槍　渡邊安三（五一）
奥白根紀行　山本清一（六四）
思ひ出の尾瀬　村松新八郎（七三）
武尊山の想ひ出　朝賀義男（七八）
谷川岳　清水敦（八三）
一ノ倉澤の印象　高橋重吉（八九）
愛鷹の殘雪ふんで　宮氏保（九三）
陣馬行　堀貞一（九九）
三國・生藤より陣馬へ　和田正三郎（一〇七）
大岳澤——五日市　若林嘉子（一一〇）
棒之嶺走破記　柴山金三郎（一一三）

川苔山　早川謹司（一二五）
扇山より權現へ　石川勝正（一二九）
顔振峠の失敗　肥沼月江（一三四）
乾德山登行記　大仲啓子（一三六）
早春の藏王　高橋重吉（一三九）
奥日光スキーツアー　今田敏男（一三六）
尾瀬の秋　芦田金之助（一四三）
積雪期の白馬岳　淺田信次郎（一四七）

年報

大會報告（一五五）
高水三山ハイキング（一五七）
霧ケ峯スキー行（一五九）
大岳集中登山（一六九）
飯盒祭
例會報告

赤城山スキー行（一七〇）
陣馬山スキー行（一七〇）
愛鷹火山群縱走（一七一）
谷川岳（一七二）
マチガ澤登攀（一七三）
寫眞說明（一七六）
圖書目錄（一七八）
器具目錄（一七九）
會計報告（一七九）
編輯後記（一八〇）

目次終

隨想

山への想念と山岳部の指導精神

草野嘉一

何故山へ登るのか？

此の問に對して木暮理太郎氏は

『私達が山へ登るのはつまり山が好きだから登るのである。登らないでは居られないから登るのである。何故山へ登るか、好きだから登る。答へは甚だ簡單である。然し夫れで充分ではあるまいか。登山は志を大にすると言ふ、さうであらう。其他の曰く何、曰く何、皆さうであらう。然し私は好きだから山に登ると言ふ丈けで滿足する者である。』

と答へて居る。

味へば味ふ程味ひ深い言葉ではないか。「好きだから登る」と言ふ簡單な言葉の中に、千萬言を費すとも表し得ない妙味を含むで餘す處がない。

然らば私達は何故此樣に迄山が好きなのか？

『それは山々の形態の美しさにあるのであらうか。或は時には危險を伴ふ登攀の困苦に依つて得る純な肉體的の歡喜に基くのであらうか。或は又山々の聖なる頂上への關門を護る氷と岩との墻壁を打越えて安全な道を見出さんが爲には如何しても必要な機智、其の機智を生まんが爲の精神的な歡喜に依るのであらうか。又其れは黎明の神祕な指先に依つてなされる雪・岩・空の色彩と調子との壯麗な交響樂が、私達に訴へる其の視覺の

特異な快感によるものであらうか。

それとも又群巒を壓して聳え立つ高峯の頂に立つて眺めた時の、私達の周圍に新しく擴がつた廣い地平線の形相が、不思議な刺激的な爲であらうか。或は又同じ一條の繩に相互を永い間結ぶ事に依つて、私と友達とを固く結ぶ同情と信頼と友情との人と人との連鎖にあるのであらうか。

總て是等の他に尙數多くある色々な理由に對して、山は單なる言葉に依つて言ひ表はされるには、餘りに微妙に登山者の心に親しいものなのである。』

とレーバンは言つて居る。

青空が伸々と晴れ渡つた日、岩に腰を下ろして谷間を吹く風に耳を傾ける時の快さ、雪溪を渡る微風を輕く身に受けて御花畑に寢轉んだ時の俗念のない輕やかな心、大空に瞬く星を眺めながら焚火を圍んで山の一日を語り合ふ樂しさ、冴えた月の光に濡れて立つ聖者の樣な頂上を仰いだ時の迫力、谷の瀨の音、それを想ひ是を思ふ時何で山が好きにならずに居られよう。切り立つた樣に尖立する岩峯の次に何の屈托も無さ相にのんびりと聳え立つ圓頂があり、杉の密林に蔽はれた黑の山膚の傍に黃金色の萱戸に包まれた山を見る時、誰しも其處を訪れてみたくなるに違ひない。それを何も今更事荒だてゝ「何故山へ登るのか」「何故山が好きなのか」と論理的科學的に詮議するの要もあるまい。要は無は無であつて無より有を生ずる事のない樣に、唯一言「好きだから好き」なのであり「好きだから登る」のである。好きなればこそ寸暇を得ては山へ登り、好きなればこそ山への思慕を深めて行くのである。

けれ共、漫然と好きと言ふ言葉の中には色々の意味がある。或者は自然の神の創造に成る藝術美に對して憧憬を持ち、或者は峻峯を極むると言ふ優越感・征服感の滿足に言ひ知れぬ愛着を覺え、或者は自然の懷に入る事其

れ自身に悅びを感ずる。第一、第三は即ち內面的靜觀的なものであり第二は積極的な所謂ピークハンターの心である。

今ピークハンターの主張する所を要約すれば

『まことの登山者とは、未だ人間の足跡の到らぬ高い淸淨な雪を愛し求め、人間の足の觸感を知らない岩の一片を掴む其の知覺に言ひ知れぬ喜悅を感じ、或は又此の大地が混沌として居る中から絕えず深い雪と霧とに閉ざされて居る樣な狹谷の氷を、一歩〳〵と刻むで登る事に絕大な喜びを感ずる樣な人を意味する。即ち眞の登山者とは絕えず未知未踏の山々の初登攀を求めつゝあるものであつて、其の成功すると否とは第二次的で、先づ其の山々との激しい鬪爭に限りない悅びを感得する人なのである。而して初登攀を好む理由は、それによつて一つの征服を成し遂げ、自己の支配圈內に新らしい領域を獲得する事が出來ると言ふ事に依存する。そして其れは全く人間の本性に深く根差した本能によるものであつて、決して自分が是を他に誇る爲になすのではなく、全く自己を滿足させる爲にのみ爲すのである。征服とは自分の心中に聳ゆる山の未知の危險に對する恐怖や其れを登る困難に對する征服であり、勝利とは自己に對しての勝利であつて山に對する勝利でもなければ他の登山者に對する勝利でもない。登山者は抗し難い本能に依つて絕えず自分を引上げ登つて行く事を愛して居るのであるから、山が高ければ高い程、急峻なれば急峻なる程、其の山は理想に近附いて來るのであつて、是が登山者が常に急峻な山、風雪に削磨した鋭い山稜、狹谷の外面へとび出して居る程に思はれる蒼黑い氷の面を求めつゝある理由である。』

と言ふのである。

けれ共果して是が可能であり永續するものであらうか。

是等の言の中には、吾々の様な幼き歩みを辿つて居る者にとつては、多くの啓發されるものがあるとは言へ、人間の精力が斷續的であり、積極の背後には消極があり、躍進の後に靜止あるを思へば、是のみを以て山岳精神に合致し、是以外の登山者を以て退嬰的な似而非登山者と蔑視し去るには甚だ首肯し難い諸點がある。事實、現在に到つては、初登攀を行ひ得る様な山が果して幾つあるだらうか。年齢により、境遇に依り、健康狀態に依つて人の心の諸相が積極的にもなり消極的にもなる事を除外して考へて見た處で、熾烈なピークハンターの心を有する登山家も何時かは登る可き新しい山の無い時が來るに違ひない。其時こそ、一度登つた山頂も再び登らねばならない時であり、過去のピークハンテングの心では登れない時である。まして前述の諸條件が心の諸相を形作る上に大なる役割を演ずるに於ておやである。

最早や私は內面的な靜觀的な登山に對して歩みを移して行かなければならない。

人は云ふ

『北アルプスは俗化した。銀座通りを見よ。嘗て吾々が訪れた親しい場所も以前の様では無い。唯過ぎ去つた以前の大天井岳・西岳と此の墮落した銀座通りとが吾々を結ぶのみだ』と。

然し見るがよい。依然として山々は存在する。而も五十年百年以前と殆んど變らず、谷の流れに、峯の雪に、同じ様な美しさを認めるではないか。太陽は相變らず燦として其の光を峯々に投げ興へ、月は山の襞をクッキリと浮き立たせて輝いて居るではないか。風は朝な夕な永遠の孤獨のオーケストラを奏でゝ居るではないか。それを俗惡化せりとは何ぞや！　皮相な山の外面觀と言はざるを得ない。斯うした山々が語る其の言の葉を學び且つ聽く事を得る者のみにとつて、初めて山は永遠に私達を呼び寄せて居るものであり、私達は山に引寄せられて居るものであつて、此の態度こそ內面的靜觀的登高觀なのである。

即ち大なる忍苦の後に山へ登るよりは、登高の困苦敢えて辭せずと雖も、出來得る限り容易に頂を極めて、山と鬪ふよりは寧ろ山と親む氣持、理智的な心の覺によつて山を望まんとする氣持、換言すれば、肉體的な視野に映ずる山よりは心の山々に登らうとする態度が即ち是なのである。老若男女を一律に包含する吾山岳部の指導精神こそ、斯うした登高觀に立脚し依存したものでなければならない。微温的だと言ふかも知れない。退嬰的だと蔑るかも知れない。遮莫、田部重治氏が

『私は北國の或る片田舍の農家に生れたのであります。私の家は村の東北に位する山を見るに最も好都合な地位にあるのであつて、毎朝顏を洗つて東の方を仰向く途端に殘雪を頂いた日本アルプスの連嶺を見る事が出來るのであります。

……

ある春の一日私は母の鄕里から約二里半計り離れた處にある、麓から約一里程登りのある山に登りました。其處は昔城のあつた處と言はれて高さの割合に有名になつて居るのでありますが、是に登つて私は早月川の奥には山又山が殘雪を頂いて行方知れずになつて居るのを見て、あの向ふ、そして更にその向ふには何があるのであらうかと、驚異の眼をもつて見たのであります。

……

立山へ登つて私は藥師岳の美に打たれたのであります。それから約二週間程後れて藥師岳に登りました。其時私は立山に登つた時よりも遙かに深いと言ふ感じに打たれました。私は有峯へ入る途中に旣に深いものを見出しました。又有峯から藥師へ登る眞川迄の間、眞川から太郎兵衞平に到る間の深林、太郎兵衞平から見た槍ケ岳の姿、其處から見た奥の平・鷲羽ケ岳又藥師岳の偉大、又遠く信州飛驒の方を見た感じ、是等は

立山で見たよりも遙かに深いと言ふ感じを與へました。

私は何となく永遠と言ふものゝ一角に足を踏入れた樣な感じがしたのであります。

然し斯う言ふ風に山の偉觀に打たれ乍らも、私は單に普通の意味に於ての自然の讃美者であるに止まつたのであります。私は自然の偉大を讃美はしたものゝ、私と山との間に多大の距離があるのを感じたのであります。私は山を恐れました。山に寢る事もいやでした。出來得べくんば其日歸りに山を見たいと言ふのが私の希望でありました。

日本アルプスと前後して秩父に入り初めたと言ふ事は私に取つて非常に幸福であつたのであります。

私は秩父に於ては日本アルプスで見る事の出來ない美を味ひました。秩父の美は深林と溪谷との美であります。日本北アルプスの超越的な高邁な姿と共に、秩父の深林の幽暗と溪流の迂曲とが私を惹きつけたのであります。私は秩父に於て一種神秘的な又一方傳說的なものを感ずると共に、又宇宙存在以來其間にこもつて離れない山の精と言ふ風なものに觸れた樣な感じが致しました。其間に私は秩父は一種の魅力をもつて、又一種の溫味をもつて吾々を其處へ引入れなければ止まないものが漂つて居る事を感じたのであります。日本アルプスでは壯嚴な超越的な天に憧憬する樣な心持を味はへたと共に、秩父では半ば人間と交渉を持つて居る樣な、一種朧な、そこから味へばあらゆるものが融けて出さうな渾沌たるものゝ美を感じたのであります。

斯う言ふ風にして居る事數年で、私は非常な親しみを山に見出す樣になりました。私は斯う思ひました。山に登ると言ふ事は絕對に山に寢る事でなければならない。山から出たばかりの水を飲まなければならない。成る可く山の物を食はなければならない。其の山の嵐をきゝながら、其間に焚火をしながら、其處に一夜を經

なければならない。そして山その物と自分と言ふものゝ存在が根底に於てしつくり融け合はなければならない、と。さうなつた來ると山と言ふものゝ威壓は段々親しいものと變つて來て、山に對して今迄抱いた自己の弱小又は恐怖が山が自分の一部であり自分が又山の一部であると言ふ風な心持になり代つたのであります。

是と前後して私には人生及び學問と言ふものゝ考へが大分變つて參りました。私は山が好きであるから、人生を逃れて其れに沒頭しやうと言ふ考へが起つたのではなしに、私の根本から生活及び自分の學問と言ふものを統一して行きたい。それには現在私のやつて居る學問は、自分の內部から出て居るのではなく、只、昔の人が斯う言ふ風な道を辿つて居るから自分も是に準ずると言ふ樣な模擬的なものである。もつと自分の眞の要求を奧深い處に見出さなければならないと考へました。又生活の上では、も少し自分と言ふものを考へなければならない。一言にして言へば常識と言ふものでは滿足が出來ない。もつと人間性と言ふものゝ奧から力强く動かなければならないと考へました。それから私は或程度迄因襲を重んじない人間になりました。是は山の影響ばかりではありませんが、山が最も强く是を擁護し是認して呉れたのであります。つまり私は山に依つて最も多く自然に還る事を敎へられたのであります。そして私は今更ながら今迄氣が附かなかつた自然と言ふものゝ內容に於て、豊富なものを認める事が出來る樣になつたのであります。

段々山に對する恐怖が無くなると共に、私は山が自己であると考へたくなつて參りました。そして又、私は此の感じを大いに是認しなければならない樣に考へたのであります。私は自然崇拜から生じた宗敎の發生地では、自然の偉大さが只自己の弱小をのみ感じさせて居るから往々にして人間は振はないのである。今日斯くの如き宗敎發生地の人心が萎て居るのは皆此故である。自然の偉大は即ち自己の偉大でなくてはならない。そこに眞に吾々が山を崇拜する意義があるのである。そして初めて機械的な運命觀を遁れて、自己を確立す

る事が出來るのであると考へたのであります。

さう思つた時分は私の山登りが最も亂暴であつた時であります。私は登山の眞意議は非常に劇しい動的な多少冒險的な運動を以て行はなければならない。登山は頂上に登る事に意義がある。風が吹いても雨が降つても頂上迄行かなければならない。從つて途中は頂上の附屬物である。頂上があつて初めて意義があるのだと思ひました。ですから人生も多少獨斷であつても、只、自己にのみ意義を見出さなければならない。そして飽くまで强くならなければならない。强いと言ふ事の爲には或點まで他人の考慮などは認めなくてもよいと思ひました。

然し私には近年山に對する趣味が變化しつゝある事が意識されて來たのであります。即ち登山に經驗する種々の內容を、もつと靜かに味はひたいと言ふ要求が非常に勝つて來たのであります。今迄は谷を行き深林を過るのは只頂上あるが故に止むを得ずでありましたが、今日は溪谷は溪谷として、深林は深林として價値の對象となつて表はれて來ました。それと共に私は自分が唯一の存在であると言ふ考へをも少し考へ、自分と言ふものゝ內容が果してどんなものであるかを考へる樣になりました。そして私は今迄考へて自分と思つて居た自分は、私にとつてのみ直接な自分ではなく、あらゆる人にとつて直接な人間性である。即ち唯一の實在を考へて來た自分は實はあらゆる人に亦普遍的な自己である事が考へられました。そして其れを考へる事は、總ゆる人の存在の意義を認め、總ゆる人の人格の尊重を意味しなければならないと感ぜられたのであります。從つて山が自分であると言ふ事は、山が普遍的な人間性の理想の表現でなければならない、と言ふ結論に到達したのであります。吾々は依然として弱少な人間である。然し此の弱少な人間を刻々に此の理想的な人間性に高め、其れに接觸せしむる處に我々の生活の意義が存するのであると思つたのであります。

斯う言ふ風に考へ初めてから私は今迄、バイロンが歌つた樣な自然に對する態度でなければならないと思つた考へが、一時無鑑賞的態度で讀んで屆たウオーズウオースの詩に表はれた樣な靜かに奧まつて行く態度を喜ぶ樣になりました。此の態度のみが、最もよく山と言ふものゝ心持を、なだらかに胸にしみ込ませて呉れる樣に覺えて來たのであります。……」

と心理的見地から山が自己に與へた影響を或講演會の席上で語られた此の言葉こそ、私達山岳部の今後の指針でなければならない。部分は部分として山を靜かに鑑賞してこそ山全体に對して神秘的な力を感じ、一歩退いて客觀してこそ「心の山々」の姿が現はれて來るに違ひない。立山、劍、槍、明石の持つ鋭い切實な情操もよく峠と高原の持つ悠々迫らざる夢幻的な牧歌的な雰圍氣に包まれるのもよからう。けれ共廣く自然を愛する心から山に分け入らうとする氣持は誰しもが持つて居るとは確言出來まい。

今正に明け離れ樣とする黎明の一線上にある吾が山岳部は、此の自然を愛するが故に山に入る氣持を、出來得る限り助成しなければならない。そしてそれが故に山岳部の指導精神は、何處迄も自然を愛し自然に還る心の發揚であり、自己と山との一致點を見出す事でなければならない。

以上

「登山」一考察

伊澤桂三郎

猛烈に吹き募る風雪の裡に白馬嶽の絶巓に立つた自分は、永劫の天地の姿にどんなに感激したゞらう。若しも自分一人であつたなら抑止し得ざる感激に自分自身を喪失せしめたかも知れなかつた。

我々は何故にかくも強く山に心を牽かれるのであらうか、山に對してそれ程にも激しい熱意と憧憬とを馳けさせるのは何であらうか、殊に山登りに於て大きな困難と苦痛とが附隨してゐるものであれば何を苦しんで山へ行くのか、これらは山へ對して理解の無い人達ばかりでなく我々の一度は持つところの疑問である。

山登りの動機それに關聯して態度形式等內容の複雜な登山の本質に對する正しい理解を持つと云ふ上から於いてこれらの事を考察することはあながち無駄な事では無いと信ずる。

一言斷つて置くがこゝに云ふ登山とは、他の目的——例へば科學的研究や狩獵等——に對する手段として選ばれるそれではなくして純然たる遊技として登山を第一義的目的とするものを意味する。

山登りは精神を爽快にするとか、志操を雄健にするとか、意志を堅固にするとか、或はまた身體の健康をもたらすとか、そういふやうな極めて常識的に考へられる謂はば登山の功利的な立場はしばらくおいて、純粹の山登りに於ける動機となるものには、更により內面的な精神的な多くの要素が在ることは容易に考へ得られる。

山登りの動機、方法及びそれに依つて導かれる傾向は各人に依つて決して一樣ではないが大體に於いて、その動機及び方法に消極的な立場を採る者と積極的に動くことを本旨とするものとに分つことが出來る。前者の代表

は自然美の觀賞を主動機とする人々で所謂靜觀的な「見る」又は「感じる」登山に導かれ漂泊的山旅、峠越え、低山主義等はこれに含まる。後者の代表は所謂スポーツ的登山「戰ひ」「意志する」登山を指す、岩登り、スノークラフト、高山主義等を包括する。勿論山それ自身は一つの無機的な存在として見ることが出來るが、此の場合意志し、戰ひ、感じ、見るところのものはかゝる無機的意味に於ける山に對してゞはなく我々の心の中の主觀的に把握された「登山の本質」に對してゞあると云ひ得る。

而して山は積極、消極の何れに屬するかを問はず崇高な感銘を直接我々の心に與へ山とその人の生活との間に絶ち難い絆を作る。此の崇高な感銘は眞に純粹な山生活に依つて獲らるゝものであり、山の持つ自然美だけでなく又單なる戰鬪氣魄のみに依るものでなく、より全般的により深く山より發せらるゝ形を以て我々の主觀に創造されるものである。

「眞正に崇高を解する者、換言すれば眞正なる崇高の創造者は、自己の全存在を大自然と親和抱合し、共に動き共に樂しむ者でなければならない」こゝに山岳憧憬の最も高き精神が在る。我々はこの崇高なる山岳性を最も深き擴りに於いて享受せんとするを欲する。それはまた自己の人格を山岳の持つ崇高にまで高めんとする心、それ故にそれはまた一つの戀愛（プラトニックラブ）とも言ひ得る。

とまれ山岳こそ我々の精神の故郷である。

山可樂

川野清一郎

大きな圖體をしてゐて、運動神經の鈍い私は、術の要る運動は何一つ出來ない。室内遊戯も亦駄目である。歩く事より外には、能のない人間である。何んといふことなしに當もなく、山へ行き、野を歩き、街を逍遙することが好きである。就中、人里離れた山や、高原をぶらぶら歩くのが好きである。連れがあれば尚いゝが、たつた一人でも面白い。四日も五日も、たつた一人で、山を越へ、野を通り、默々として歩く時、しみ〴〵と旅愁が身に滲みて、路傍の一木一草にすら、心をひかれる想がする。こうした山旅の中で、一番嬉しいことは朴訥そのものゝ樣な里人の親切心である。常に自然とその生活を共にしてゐる山里の人々の心は、水の如くに清く、赤子の如くに無邪氣である。これらの人々との、爐邊語りの樂しさは、全く浮世離れをした別世界に在る氣持にさせられる。當があつて、當のない旅は、氣の向くまゝに、足の進むまゝに、懐に金のある間は日を忘れて、飽くなき山野の放浪が續けられる。そしていよ〳〵歸りの汽車賃にさへ不足して、驛長に借金をして歸つたこともある。それは學生だけに許された大きな特權でもあつた。時間に自由さのない生活に入つてからも、時に無謀な放浪の旅に出た。出て歩いてゐる間は、相變らず呑氣である。仕事のことも家のことも、生活のことも少しも考へに浮ばない。來る日來る日を、心滿ちた朝に迎え夕に送ることが出來る。それでも、歸らなければならない日限を思ひ出すだけ淋しいと思ふ。然しこの不自由の中に、二日でも三日でも兎に角、全ての俗事を忘れた自然との生活の出來るところは、山より外にはないと思ふ。歩く事しか能のない男の、人知れぬ樂しみはこゝにある。これを

不自然といふべきか、自然といふべきか。

山は樂しい私の故郷である。山へ行く事は自分の故郷へ歸ることである。有名な山ばかりが山ではない。名もない小さな山も、山である。ぞろ〳〵と人を搔き分けなければ登れない樣な、所謂流行の山登りは、山を樂しむのではない。始終時計ばかり見て歩く、所謂レコードメーカーの登山も亦、山を樂しむのではない。山は樂しむべきもので、騒ぐべきところでもなく、稼ぐところでもない。疲れたら休んで、そのまゝ歸つて來てもよい。心足りたらそれでよいのである。徒らにあせつて、頂へ登ることはない。頂上を極めることは登山の目的ではなくて山を樂しむ心を充足させることが、その目的である。やつと頂上へ辿りついて、ホツとした時の氣持は尊い。登りが苦しければ苦しい程、後の樂しみは大きい。樂しむ餘悠もなしに、只頂へ頂へと、目的地へ目的地へと急ぐことは、山を騒がし、山を稼ぐものだと思ふのである。この意味で、世に忘れられた、名もない山や、高原を歩くことは、何らの煩なしに、樂しみに耽り得ることを嬉しく思ふ。誰でも、自分の家を、他人に荒らされたり占領されるのを好むものはあるまい。

自然が、自然そのまゝの姿で我々に接するのは、山、森林と原野、河と湖沼、海を措いて他にはないであらう。動物や植物の生活を觀ることは、一番近く自然を觀ることであらう。天體の觀測も亦、居ながらにして自然に接する方便であらう。歩くことより外に能の無い私は、山へ行き、野を歩く。當があつて、當のない旅。氣の向くまゝに、足の進むまゝに、ふらつと出て、ふらつと歸る旅こそ、私の最も樂しむところである。

山の牽く力

芦田金之助

私の幼年時代、少年時代は山から全く縁が無かつた。東京しかも瓦屋根の低く並んだ下町に生れ育つたから坂にも縁がなかつた。野原にも―そして空地にさへも縁がなかつた。私が見る山は大川端に立つて天氣の良い日などお臺場の緑を盛つた臺地を越へて遙か彼方の水平線上に灰色に薄く起伏する房總の山々であつた。小學校の古ぼけた二階の窓越しに見る富士は私の憧憬であり騎士でもあつた。一脈の低い山々―丹澤山塊と後で判つた事だが―を從へて毅然として立つ富士は正義と威嚴しかも慈愛をもこめた父の姿に見えた。だから私の心はこの富士を項上する憧憬に少年時代を過した。そして是は昭和の始十八の年に達せられた。始めての山登り、古洋服に足袋はだし、風呂敷に二食分のにぎりめし、水筒、と凡そ原始的な姿で出掛けた。生れて始めての獨り旅であつた。午後十一時半の飯田町發の甲府行の列車の一隅で縮こまつてゐた私はすぐ前の若い畫家らしい令孃が、見送りに來た男としきりに別れを惜んでゐるのを見ながらふと深い〳〵旅愁を感じた事を覺えてゐる。併しこの旅愁は同じ學校の古い卒業生と大月で知合になつてから喜びに變つた。山登りは苦しかつたが愉快だつた。八合目で一夜を明し翌朝御來迎に感激した。頂上の展望はすばらしかつた。その驚きは盡せない。槍ケ嶽が彼方に見えた。下山は砂走りを一氣にかけ下つた。この旅での印象は私の山に對する憧憬を滿足せしめたといつてよい。そして又山が私を強く牽き始めた原因だと思つてゐる。『德川家康は人生は重き荷を擔つて坂を登るが如しと云つたが全く富士を登ると人生こそ山登りの途の長さと等しいね』頂上眞近くなつて鳥居の見える時、私より二十も年上の連の先輩は私を顧みて笑つたのだつたが、その人は世界を旅して來た人だつた。この先輩の言葉は奇妙にも私の心に

深く刻まれてゐるのである。

それから山が私を牽ゐた。殘念乍ら登山といふより山歩き、低山歩きの範圍より出なかつたが機會さへあれば歩いた。野原でも丘でもよかつた。山道を歩く事そのものが私の心に何かしら貴い體驗を與へてくれた。谷みち山腹みち、そして峠みち、疲れれば路傍にどかつと腰を下して休んだ。流るゝ水をむさぼる樣にしてのんだ。やはらかい草地に仰けに横はれば地球の上に生きている事がたとへも無い程嬉しかつた。

春はうらゝ
明朗調
明るい空　青い色
大地の擴がり
はてしないみどり
甘い空氣の
限りない充滿
この肉體は
誕生と共に清純だ
四肢を延ばして
眼をつむり
天地にとけこむ

私にとつて山は父又は母に等しい。だから山を征服しやうといふ心持は少しも無い。むしろ甘える心持が強い

様だ。雨に降られたり悪場に惱むとき父の試練の愛の鞭に打たれてゐるのだと思ふ。明るい茅戸の尾根歩きは母のうたふ子守唄だ。そして山みちといふものが私には祖先の歩いて來た道を示してゐる様に思はれる。大道を歩いてこそ感じ方も少ないが鬱蒼として森林の中、或は澤傳ひにうすくふまれてあるみちを歩き乍ら私はそのみちの由來を考へるのが常だ。先人のふんだ後に行く自分は何と易しく目的に進んで行ける事か、先人はもつと苦勞してみちを歩んだ事だらう。澤傳ひのみちの澤に消えている處にきつとある積石―ケルン―も全く之と同じ感概を胸に湧き起すそしてこの感情を誰にもきつと起させるであらう山の力こそ多くの若人達を山に牽きつけ、且彼等に單なる山登り以上のものを敎へるでのある。

（終）　（一九三四・五・一四）

田舍後大觀

水　河

低山讃歌に和して

堀　貞一

◇東京から見える位のひくい山々を、リュツクを負うてさまよふ人達はずゐ分多いものであるが、かくまでに多き人々が低山へ行くといふのは登山期が夏に限られてゐないためもあるし經濟上の負擔が輕くてすむこともあるであらうが、それにもましてこうした山々には所謂登行以上の歡びが我々を待つてゐてくれるからであらうと思ふ。

◇峠について語られてある言葉に

「私は時々地圖をひらいて机上旅行を試みるが、そんな時でも山よりも峠に多く魅力を感ずる。こゝを越えてこゝへ出たならどんな生活がそこに營まれてゐるか、どんな氣持でどんな人達が今頃こゝを越えつゝあるか、そんなことにも興味がそゝられる。地上の至る所に人間が住んでをりそこにさま〴〵の生活が營まれて居る。そうしてその人間と人間、生活と生活とを隨所に結び付けてゐるものは路であり峠である」（加能作次郎氏）

「山頂ばかり攀ぢのぼつてゐる登山者がいつも山ばかりでは滿足が得られず、人間に、自然の中にすむ人間に興味を感じ初めるとき峠が好きになつてくる。血氣盛りの青年時代には山頂が好きで冒險的な登山に興味があつた人でも、歴史や人文に嗜好を感じ初めると、人間と人間とを結ぶ峠に趣味を見出すに至るのは當然なことであらう」（田部重治氏）

これ等は峠について語られてゐるのではあつても、低山あるきの味ひは畢竟するにこうした境地につきるので

はないかと思ふ。

◇我々が地圖をひらいて山行きを計畫するとき特定の山をとり上げて之を問題にするが、それはその山頂を極めるといふことが目的のすべてゞはなく、より多くそれをとり卷くところの峠なり、街道なり、部落なりのもつよさを思ふ場合が多いであらう。そして私一個の氣持を言つてみれば前記二氏に追隨するに似てゐても、山よりも街道なり部落なりに惹かれる氣持のこの頃特に强まつてゆくのを感ぜずには居られない。

勿論それは人によつても違うだらうし年齢によつても異ることであるだらうが、今の自分の氣持としてみれば溪流に沿ひ山峽を縫つてつゞく街道を歩きながら見るあの自由の山野で野生のまゝ遊び戯れる村童の姿や、黄昏時部落からもれる灯、あるひは蒼然たる暮色につゝまれた山あひを流れる炭燒の煙などといつた情景にみられる——その中にほのかな人間の生活の香りのたゞよふ——自然の景趣をより高く評價したいのである。

◇このことを更にはつきりさせるために言ふのであるが、溫泉の湧く町へ旅したときなど、町をとりまく自然の景觀もいゝであらうし湯氣を立てつゝ流れゆく河水を橋上に倚つて眺めるのもいゝであらうが、さらに街のそこゝを流れる絃歌、湯女の白粉の香りといつたやうな人的要素が入り混つてこそ初めて旅人を惹きつける情調が生れてくるのではないだらうか。もち論、山を往くときには溫泉町でみるやうな頽唐的な氣持は微塵も生ずることはない。そこに在るものはたゞ素朴な自然とつゝましやかな人生とだけではあるが、人間にとつて最も關心されるのは畢竟するに後者なのであつてこの人間的なものゝ中に詩を感じ繪を見出さうとする我々日頃の、ものゝ觀方なり感じ方は山へ來たときでも決して失はれることはないのである。

◇山で見る農人の生活が如何に我々のそれと異つて居るものであるだらうか。都塵を遠く離れて山へ入つたとき私達は、日頃その中に住んで居りながらも考えてみることのなかつた都會生活といふものをしみ〴〵考えさせ

られるのである。それがいゝとかわるいとかは云へないにしても兎に角この華やかな或は相當にわづらわしい我々の都會生活に比するとき農人達のそれのなんと單純且つ素朴なものであるだらうか。山に入つたときにこそ、日頃コンクリートの建物に住み强い刺戟を逐うてたゞ瞬間にのみ生きてゐた私達もふと回顧的な氣持になつて、いまさらに我々の祖先が嘗てはおくつてゐたところのあくまでも靜謐な飽くまでも平和なりしそのかみの牧歌的生活を思ひ泛べるのである。

◇現在にあつて私達の營んでゐるのは、複雜極まるこの都會生活である。生活を樂しむよろこびのためにこそ生きるのであるのを忘れてしまつて追はれてゐる者のやうにたゞ刺戟のまゝに明日へ〳〵とせちからく暮してゐる我々なので、かうした時代にあつては原始に於てそうであつた如く、人と人とが共同の目標のために直接に結ばれ互に相助け合ふといつた平和な生活を營んでゐることは許されない。人は自己を中心にのみ活動するのであつて、節操だとか德義だとかをまでも冷めたい利害の秤りにかけて生きることを餘儀なくされ、いつしかそれに慣れてしまつてゐる私達はこゝに冷やかな倫理觀なり對人生態度といふものを築きあげるのである。利己中心に生きるほどでないまでも、我々の生活を律する諸々の規範をつねに念頭にをくことなしには生活することの出來ぬ現代人は、常に見えざる文明の壓力の下にうちひしがれ、禮讓だとか敎養だとかの重苦しい衣裳の中に身をせばめてゐるのであるが、かうした我々にも嘗ては裸で山野を驅けめぐつてゐられた生活を歷史の上に惠まれてゐるのだし、小さな地域に集團しながらも大自然の懷に牧歌と共に生活を樂しんでゐられた歷史も持つて居るのである。山へ來てそのかみの風習のなごりをもつてゐる村落や煤けた土間の片隅にその昔の生活樣式の餘韻を存してゐる農家をみるときなど、いつか我々は咏嘆の世界に身をひたらせてしまつて、人類の何萬年にも亘る永い生活の歷史をおもひ、太古のはじめから現在を通じて永劫の未來へと一貫して流れてゆく無久の生命といつたやう

なものを考えさせられていつか頭を伏してしまつてゐる我身に氣づくのである。

◇石器と暮してゐた原始人、簡單な道具で自らの需品をのみ作つて暮らしてゐた中世紀の人達の生活を追懐するのあまり原始へ歸れとか自然へ還れなど叫ぶのは少年の感傷でしかないのであつて、現代の都會生活にしても幾世代を經てこうして生れて來たものである以上それが生れるだけの理があつたのであり、その中にはたゆむことない人類の建設的な意志さえみられるのであるが、それにしてもこうした抒情詩的なそのかみのなごやかな生活を想ふことに今の我々に失はれてしまつた繪を見出し詩を感じるのは人間として當然もつ本性の一つであらうと思ふ。

◇部落から山へそして森林からまた町へと坦々として續く一すぢの街道。それは平凡な一すぢの道のやうではあつてもよくみればそこにも榮枯盛衰の人の世の姿がきざまれてをり、我々の父や祖父達が草鞋脚絆で歩いて行つたその面影さえもが偲ばれるではないだらうか。山あひを縫つて頂から麓へと流れて行く一すぢの溪流にも、その昔、街道に沿つて往來した馬子の鼻唄や鳥追ひ姿の女の足どりが聞かれるやうには思はれないだらうか。今は荒廢に歸してしまつた高原の宿場の町の人達のあるかなきかのひそけき生活にも、物移り人こそ渝れ、人間の生命は脈々として今に至るまでつゞいて居るのであつて、そうした人達の閑寂な生活の中にもわびしい一片の生活詩がたゞよつて居るではないだらうか。

◇人界を遠く去つて、たゞ白雲と岩石との中を行くのも大きなよろこびであるには違ひない。峻嶮を攀ぢて前人未踏の地を征服するのも大きな喜びではあるだらう。だが身近くに在る低山をさまよつて、峠に佇み、夕暮の街道を往きつゝ人文發達の歴史の跡を偲ぶといふことも——ときに低徊趣味よと嗤はれることあらうとも——またそれ等にもました大きなよろこびでなければならない。（昭和九年五月）

スキーを初めて穿くの記

若　栞　三　雄

一九三三年十二月卅一日もうあと五分で除夜の鐘がなつて來年にならうといふ十一時五十五分發で雜沓の上野驛を後に一路多年待望のスキーをやる可く穿く可く赤城の山を目指して出發した。同勢全て五拾餘名Y・M・C・Aのスキー講習會である。多年待望とはいふものゝスキーをやらうかなと思つたのは二年前頃からでそれ迄はラヂオで「各地の積雪量をお知らせ致します」と言つても我關せず焉であつたものがいざ今年こそはと思つて行くことになるとラヂオのニュースが待遠しくなつたり新聞の積雪量のところへ一番初めに飛び付いたりデパートへ行けば一番先きへ行く處は運動具部といふ樣な行かない先きから病既に膏肓に入つて了つてゐた。ともかく仕度が大變である。なにしろ全部そろへなくてはならぬといふのでT氏にスキーを見てもらつて買つた時に此れを穿いて愈々滑るのかと思つたらなんだか無性に嬉しくなつて了つた。ともかくその夜はストックだけもつて歸へつたが電車の中で視線を集めて嬉しいやら恥しいやらであつた。さてスキーも出來た萬事O・Kといふ譯になつたので會社から借りた「解り易いスキー術」やら「銀盤に描く」やらを持ち出して一切合財身につけてスキーの本を片手に先づキツクターンの練習である。「ヘツキツク・ターンなんてやさしいもんさ」と言ふ樣になる迄は何邊障子を破きそこなつたかしれやしなかつた。

汽車は走る凡そ三等の夜汽車位ねむれぬものは無いねむれる奴はえらいもんだ。第一スチームで暑くてしやうが無い。でもあちらこちら通路で、座席の下で、長々とねてゐる勇敢なる人々がゐる。こゝに一大發見を

したのは例のスキー置場の裏である。あすこに座席の布團?を敷いてねると實に長々とねられるのである。絶對安全無料寢臺である。試みられよ一度、但し早く獲得せんことには無くなる恐れがある。

午前三時半頃上越線新前橋驛で下車（普通は前橋であるが此の列車は行かないのである）降りると急に寒さが身にしみる。驛頭に立つてみると線路の右方に赤城の山が長く〳〵裾を引いてゐる。その頂上は多分地藏であらう、白皚々と見へてゐる。線路の左西方には十五夜の月が晃々として照り輝き、その下に靜かに眠る山は棒名である。暫し此の月光の下に輝く景色にみとれてゐる間に自動車會社厚意に依る自動車で箕輪迄四十哩最初は坦々たる路が次第に登りになり左右に積雪が見へ初めた。初めて見る積雪、なんだかしらぬがやたらに感激が身體を馳けめぐる目前に眞白く輝く地藏がぐんぐんとせまつてくる。箕輪で自動車を棄て愈々徒歩で登り初めた。寒さは仲々きびしい腹が空つぽなのでスキーの重みがこたへる。地藏橋をすぎると次第に道も狹ばまり急となる。併し月が滿月なので素晴しく道は明るく皆の顏もはつきりと認め得るが山陰へ入ると月光がさへぎられて眞黑となりアヤメもわかぬサツキ暗となる。ウンウン言ひ乍ら登るヂグザグの急カーブを切つてふと東の方山の尾根を眺めるとはやほんのりと薄桃色に染まつてゐる。勇氣百倍してやつと新坂峠の新坂平へ着く、木の門をくゞると左方に二つの峰を持つ鈴ケ岳がそびへその上空に一月一日十五夜の月が粲然として輝いてゐる。頭を回せば東の方空紅ならんとす。左に月を眺め右に太陽をあぼがんとする一九三四年の一月元旦なんとも言へぬ感激に打たれた山は全て白皚々たりである。

新坂平からは直ぐであるスキーを穿けるものは穿きわれら初心者はナントスキーをかついで進んだ。穿いた者はいと愉快氣に滑べつてゆくので口惜くてしやうがなかつた。新坂平から少し下つて林の中を通り左に切れると前がひらけてゲレンデへ出た。下は大沼である。もう二三人痛快相に滑べつてゐる。見てゐると案外

にやさし相である。が滑つてゐる人がドタンと滑ぶと自分もあの様にころぶのかと思ふとゲツソリしたけど三千回ころばぬとうまくならぬとの事である。スロープを徒歩で下つて見上げると相當なもんである。此のスロープどうして降りるのかと思つて見上げるのみ、スロープの際の湖畔の青木屋と言ふイトミスボラシゲな宿屋は丁度東京のバラツク建と同樣であるともかくリュツクを降ろして靴を脫ぎコタツへ入つてさて「めしだ！」まづい朝飯（ミソ汁、ぜんまい、いもがら少々、香の物少々飯丼一杯）を夢中で押し込みほつとする。愈々スキー講習第一課である。先づ本で讀んだ通り見樣見眞似でスキーを穿いて帽子をかぶりストツクをついてこう澄ましたところスタイル滿點である。ちよつとしたスロープを試しに降りてみたがとたんにころんぢまつた。さあ大變「集れ」である。集まりたくつてもスキーが言ふ事をきかぬ「心はヤタケにはやれども……やつとこさで登つて集まると第一課平地行進、キツク・ターンである。キツクターンは既に疊上のスキーで經驗濟うまいもんである。それから登行法、あの物凄きスロープを上までのぼるのである。リーダーが示す樣に

ソソソソ の方法で又は〳〵で或は＝＝で苦心慘憺ころんではおき七轉八倒ヤツトコさでスロープの上へ立つて見降せば歸へりが案じられる。そこからもう一つのゲレンデ見晴山のゲレンデへもう一苦勞する見晴山といふのは躑躅が一ぱいに繁つた山で未だ積雪が少いので躑躅が相當顏を出してゐる。ヤツトコさでたどりついて頂上から見渡すと遙かに上越の山々が見へる大沼は目の下である。地藏も目の前である。山は一帶に白樺の木が密生してゐる時々多分上越の空からのこぼれだねであらう。粉雪がひら〳〵と舞ふ、さてこれから生れて初めての直滑降ホツケ姿勢をとつてヅルヅルと滑る。たはツ案ずるより生むは易しうめえもんさと思つたらドスーンところんぢやつた。ナニクソと思つて立つヅル〳〵ドスーン不思議に立つとトタンにころぶ終ひに根がつきてドサンと大の字にねて青天井ならざる白天井を眺めて長大嘆息……「精神一統何

事か成らざらん」と言ふ言葉を實現させる可く猛練習のかひありてか五六間はころばなくなつた。

スロープの眞中長いスロープで二年兵が盛に滑つてゐる。相當なスロープなので大低はゴロン顏面制動の洗禮をうけぬ者は無い。やがて午前十時半晝飯の爲歸へるのであるが、歸へりは旅館迄普通なら十分位の處を一時間半見積つてこんどは別の途を林間スキーである。南側の斜面をぐるりと下つて左青木屋へといふ立札の道をゆく、道は三尺、しかもデコボコであるのでとてもたまらぬ。カーブ毎に林の中へつゝこんで了ふ。ところがその林の中から出るのがまた大變で仲々もつてでられぬ。手をつきやもぐるし木にかぢり付いてあの長い奴をヤツトコサで出す、後からも仲々來ない。後續部隊も同樣の狀態だとみへる。さて林道を拔けて旅館前のゲレンデへ出る。今度は勇氣が出て度胸も付いたので上から直滑降しめ〳〵うまくゆくぞとたんに一番下の少し凹んでゐる處でドサンとなげだされ、腰の骨をうんとうつた。晝飯もそこ〳〵に濟ませてまたもや直滑降猛練習、おかげで轉ぶ率も少くなつた。やがて宵闇せまつて赤城の山もトツプリと暮れ、あーなんと長き一日なりしか、朝の6時頃から晩の5時頃迄スキーであけてスキーでくれる。あーなんと腹の空くことよ、うんとつめこんで明日にそなへてグツスリとねる。

一つの布團へ三人位つめこまれたねぐるしさにボツカリと目を覺ますと午前六時である。皆未だねてゐる顏を洗ひに出かけると足がとても冷い痛い位である。顏を洗つてふと前の白樺の林を見るとおーなんと奇麗であらう。素晴しい哉、東の空の太陽の薄桃色の光線をうけて白樺の林がなんと金色に梢から上を染めて輝いてゐるではないですか。その美しさはとても〳〵實際自然の美しさには驚嘆する。

第二日目やつと直滑降の要領がわかつてきた「こうスキーを引き付けてそろへてソラ〳〵手がわるい、手はこうやつて……」と我と我が心に言ひきかせてすべるのであるが、ころぶ既に千回ころんだかしら、午後から全制動を敎はる「あー全制動は全ての廻轉の

元になるのでありますから、皆さん正確に覺へて下さい……」と言ふ御訓示の下にやつたですが、言ふは易く行ふは難しです。男子立志鄕關出スキー若不成死不歸骨埋豈墳墓地ノミナランヤ……大變な事になつちやつたデス。いや物事は全て此の意氣でやる可しです。かくて二日も暮れました。お湯に浸り乍らさてしみじみと考へたです。

「成程、スキー、スキーと猫も杓子もスキーへ行くがもつとも俺も杓子の柄位だが、行く筈だ實際面白いし第一轉んだつて痛くない。それにあの直滑降の豪快味（實はこの味を知る迄にはゆかない途中で大低ころんぢまふです）あたり前だよ、猫よ杓子よ斷然みとめるよ。さて明日は愈々ボーゲンといくかな……」みゝずのたわごとに夜はふけて風呂の湯を浴びる音が一きはきこへるのみ外は吹雪らしい。明日は何寸積もるやら……」かくて一月二日の赤城の山の夜は吹雪の音と共に更けてゆく。（九・五・二夜）

「心のオアシス」

青木茂

「迎ひに來る待つてゐろ。K」とあつた。これで一先づ安堵した、五時迄に來れば迎ひに來て上げるといふことを念頭において來たのだから、若しも遲くなつたり、行違ひになつたりしたら折角の期待も希望も失はれてしまふのだ。然し豫定の五時にはK氏は迎へに來てはくれそうもないといふことは驛の告知板で想像がついた。大概立川で五日市鐵道に乘り返へるのに、電車で長く待たされたのだらう。告知板には四時半とかい

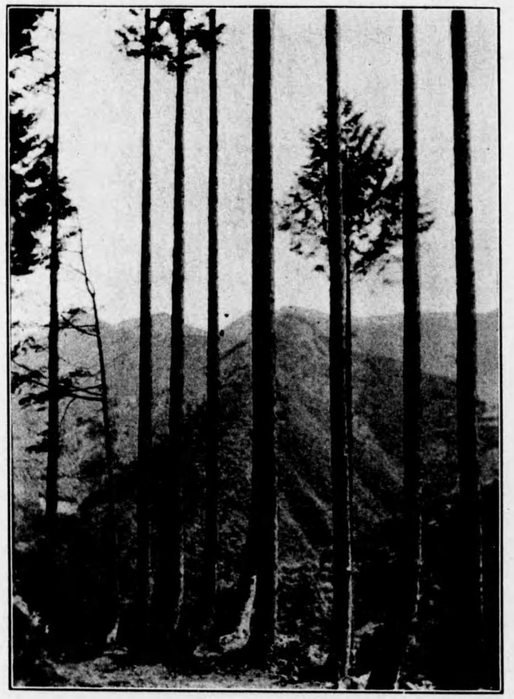
てあつた。僕はその間驛前の地圖で今日泊る小屋の在處を調べて見た。然し見づ知らずの土地ですから見當がつかない。迎ひに來てくれるのだとは思ひ乍らも二十分、三十分と時がたつにつれて、寂しくなつて來た矢張り最初の旅行であるし、馴れない土地の故であらう。驛の前方は何山ならん五日市の町をかぶせる如く起伏してゐる。あゝK氏らしい。黑の頭の眞中にボッチの付いてゐるスキー用の帽子をかぶつて、几帳面に足を運んで兩手をリズム的に振つて來る。どうもそうらしい。待ち切れなくなつて飛んで行つた。矢張りそうだつた山小屋から驛まで何歩とかあると言つてゐたけれど忘れてしまつたが後から考へて見ると、一丁半位はある。それは兎に角だら〳〵坂、歩いて行く內に、もう明日の登山の憧憬と、山小屋の未だ味はざる快味に氣をとられてK氏との會話もとき〴〵ちぐはぐなことになる。途中明日來る山岳部の一行の人の爲めにK氏は自動車の交渉をなしに寄つた。大體僕達はその役目のために先發して來たわけなのだつた。交渉がすんで歩くことわずかにして右方に曲る、そこからは道が山小屋に行く樣に出來てある、途中にてK氏「ヤッホー」と怒鳴つた。確か先へ來てゐる人への合圖だ。返す聲あり「オー」と。山小屋の在る處すこぶる山氣あり。やうやく山小屋に辿り着くことが出來た。一行はM君A君、S君、それにK氏と僕の五人。小屋は二つあつて、何れも登山家有志によつて建てられたもの。その管理は三光坊さんといふ人に委ねられてある公設小屋である。僕達は下の方に泊るのだつた。行くとすぐに寢具の運般をやる。それから水を汲みに三人で出掛ける。僕は最初で知らなかつたが、明朝の支度の爲に充分汲んで置くのだそうだ。水をくむ所は少し遠かつたが、途中村の人にきく所によると、此の邊では水の質は檢査官に何時も賞められてゐるさうだ。そういはれて見ると遠いのもなんでもなくなる。矢張り田舍の人は親切だ。單純で素朴で良い。もうこの丘を覆ふ山氣と異樣に感じられる四邊の物に、東京の都會のことから遠ざかつて行く樣な氣持だ。水は井戸水である歸

りにはバケツに一杯水を入れたまゝ、競走をやりながら來た。重いには重いが、なんとなく愉快だ、遂に僕がラストになつて仕舞つた。邊りはやうやく、暮色靄然となつて來た。はるかにそびえ連る連山も黑くなつて來た。裏方に當る欝々たる樹々も靜まりかへつて來た始めて山小屋に泊るのだ。何んとなく興奮を感ぜずには居られない。K氏は夕餉の支度に餘念がない。殘る人達はハンゴウで飯をたく。茶腕を洗ふ等皆分業だ。

一しきりは忙しい。然し忙しい內にも、笑ひが混じるきつと皆も、この山小屋によつて、ある刺戟を受けたのだらう皆陽氣だ。皆和氣靄々としてゐる。一家の樣だ。至らぬ所はK氏の采配を受ける。皆兄弟の樣だ。全くなんとも言ひ樣のない感じがする。これも山小屋でなくてはの一情景ではないかと思はれる。夕餉の支度も出來た樣だ。此の山小屋は三間の五間で爐のある土間を挾んで一方は疊敷の寢床兼遊び場。一方は床板の上にぶつきら棒な食卓が出來てゐて、木片の腰掛けがある。そこで夕食をとる。ライスカレー。それもじやがいもなし。然し諸君それではといふのはよし給ゑこの味は又格別。一通り用が終つてからの故か美味い少しカレーがきかない。鹽を交ぜる。ハンゴウの飯は格別良い。五人お變りの連發。夕食もすむと、洗ひ物に忙殺される洗ひには裏方の林の方へ洗ひに行くのだあたりはねずみ色も黑色になつて、懷中電燈を持つて行かねばならない。水は筧から流れてゐる。こんな所で一人では到底洗つてはゐられない。同勢三人で唄に合せて洗ふ。これで一仕事濟み、皆爐邊に集まり四方山の話に花を咲かせる。薪はうぢや〳〵ある。こんなに使つてもいゝのかと思はれる程薪のサービスがいゝピーナツトを嚙りながら薪の盛んに燃えてゐるのに顏を近づける。と總身がほてつて來て、だん〳〵に眠たくなる。自在鈎に藥罐を掛けてお茶を入れる湯を沸かす。ぽか〳〵するので喉が乾く。五人思ひ〳〵の事を云つては笑つてばかりゐる。そうしたうちに、こゝの管理人の三光坊といふ人がまた〳〵薪を背負つて、によつこり顏を現した、始めはどきんとした。人里とは

餘り離れぬとは云ひながら、見知らぬ人がやつて來たのだから。三光坊さんの話しによると、此の山小屋へ一回來た人は必ず二回、三回と後からも忘れずに泊りに來るそうだ。そうに違ひない。こんな好感のもてる山小屋はない。と皆が云つてゐた。僕が思つた範圍でもこんな紳士的に、登山家に對して開放して呉れる小屋はあるだらうか。手紙一本、宿泊の通知を管理人へ出しておいて、行つて思う存分備え付けの皿、茶腕、臺所等を使つて歸りには備え付けの竹の筒の中へ薪代を置いてくればよいだけだ、それについても管理人は一向お構ひなしで實に放任主義なのである。三光坊さんはお茶を呑みながら、ぽつり〳〵と話しをする。五日市は東京ではあるが、未だ言語の方は進化してゐないらしい。この人の話しがとき〴〵面白い節になるので心中甚だ笑ひを禁じ得なかつた。釣りランプの下、話しに間が出來ると、思ひ合した樣に薪を入れては手をかざして、手先をじつと見る。その内に三光坊さんは持つて來た薪を並べて「お休みなさい」と云つてい

そ〳〵と小屋を出てゐつて仕舞つた。何時位だらう、腕時計を見たら、九時を少し廻つてゐた。その間皆お茶をよく呑んだ。K氏始め皆がW・Cへ行つたらしいが、眞暗な所を無理して行つて、間違ひでもあると不可ないと思つてちうちよしてゐたらK氏が行け〳〵と盛んにすゝめる、旅に出たらK氏いさゝか强くなつたらしい。こんな時虫でもあつたら付けてやりたい位だ何回も〳〵すゝめる所を見ると、僕を赤坊の樣に思つてゐるのかわからない。もう爐邊漫談も薄らぎ、やゝしんみりして來て燃えさかれる火にやれる手を言ひ合した樣に見詰めること數度。貧弱なるランプの光りの下爐を圍んで種々話しがはずむ。塵埃雜念の俗界を離れての皆は眞の自己の姿を見るといふ、餘裕を與へられる。皮相の言ならば聞くにも足りぬが、眞の心からの言は貴重である。吾人の精神思想は眞理に依つて偉大になることを得眞理に依るに非ざれば正しい大きな進歩は望み得ない。偉大なるかな山の神祕、大自然の前に來ることに依つて吾人は、人間としての弱點を除



一　箱　木　山

列　　樹

去されるのだ。こんなことを考へてゐると、トランプをやらうといふことになつた、名差しである。皆は自分の名を二度宛言ひ合つたが僕のが一番簡單に覺えられて仕舞つた。何でも其の名は小屋中の物の名前ならなんでもいゝといふ條件であつたが道具の名前をよく知らなかつたものでありふれた名前をつけた。中には宿泊帳、ピーナツツといつたのがあつた。しゆくはくちやうは最初は、この邊においてある飾物の鳥の名前でゞもあるのかと思つてゐたら違つてゐた。カード一枚メクル毎に悲喜交々、名前を忘れて「えゝと」とかいつてゐる間に言はれて仕舞ふのや。メクつてポカンとしてゐる間に先手を打たれてしまふ。もう一行も疲れたらう。床を敷いた方がいゝと言ひ出した、もとより異存はないが。たつた一つ願ひがあつた。それはカーテンは張つてあるが風が隙間越しに窓から入つて來るので、僕は窓際にだけは厭だなと思つた。少し窓際が恐しかつたのかも知れないが、そこで皆もそれは考へてゐたらしかつた。が結局部屋の半分づつを明日の班別で寢ることにした。僕達の班はK氏にM君に僕じやんけんして定めたら、僕が頂度五人の眞中その次がK氏お次ぎが窓際になつたのがM君、名代の手長足長の人だつた。僕は悪いけれど思はず笑つて仕舞つた。長いひざを布團でおほひ切れない。で未だ初春とはいへともすると、身に滲む山の風を、如何に凌ぐならんとM君のミツド、ナイトの當惑を想像して、可笑しくなつたK氏は憶病なのでは僕と同じ位だから、窓際へやらされなかつたのは思はぬ時の神救けといふところ。寢る時になつて、宿泊帳へ一行の名を留めた。これでこの山小屋に爪跡を殘したことになる。矢立てと墨が備えてあるので、K氏に繪でも描いたらと云つたら描かなかつた。

皆はこの山小屋に爪跡を殘すものとしては、名前だけでは物足りなかつたK氏名の下へそれ〴〵仇名をつけくわえたK氏等はトンカチの繪をかゝれて、猫オヤジと書かれた。M君は足を長く伸ばされてかゝれて、足長、A君は名前をもじられたのではないかと思はれ

るウズラ、S君のはその筋の禁止に依つて、發表出來ません。僕は麻布狸穴に住む人と俳人。僕の俳人はきつと、あれ以來だらう、爐邊漫談の際客觀的といふことが出て來て一茶の句に「我と來て、遊べや、親のない雀」とあつたのを「我と來て、遊べや、親のない子供」と試しにやつて見たら、それは前代未聞の客觀的俳句だなぞと言はれたあれらしい。皆は同じ俳人でも他の意味にも通じるのだと言ふ。然しそんなはい人はないです。M君が宿泊帳の一頁を二分して二人で書かうと云つて、M君は感想文を書き出した。何か感傷的なものらしい。詩囊豊かなM君だからこの山小屋に依つて何物かを得たのではないか、一筆毎に想を練つてゐる。平常もなら僕は今頃何を爲てゐるのだらうか。きつと晝の疲れでぐつすりと白河夜舟を漕いでゐるだらう。それとも、好きな本でも讀んでゐるのか。然し今日は、白河夜舟でもなく、又生憎書物の持ち合せもない故讀書どころでもない。M君の書き終つた後で、僕も感想を書くことにした。どんなことを書いたか忘れて仕舞つたが、大概山の家讃美の文ではなかつたかと思ふ。それに自分の旅への感想を付け加へてあつたかも知れない。後日談になるがこの感想文を僕達の推奬によつて同じく大嶽へ向ふ途に、山の家へ寄つた山田吉二氏、金子氏、畑山氏等に讀まれて仕舞つたのである。實際うつかりと書けないと思つた。

扨て、皆はよく眠り出したS君A君はもはや聲も立てないがK氏M君は時々話し出すそしてまた笑ふのである。そんなに面白いものなのであるので寢た筈のA君S君も思はず釣り込まれて笑ふ。氣持ちが悪い、狸寢してゐるのだ。ランプは消されてある。幼い時は、一寸離れた親類の家で泊る時にも直ぐにホーム・シックに罹つて、一日で歸つて來て仕舞ふ位だつたのに、此の頃はとんと平氣でゐられるのはどういふ譯だらうそんなことを皆が靜まる間に考へなどした。K氏の枕を僕のところへ持つて來たのだが、結局見付かつて取り上げられた、實に横暴だ。この方が我が班の係りであるのだと思ふと情けなくなる、然し誤解しないで下

さい、このことばかりで彼氏の全般を考へられると、間違ひですから、枕がないと、彼氏はよく眠れない、そうするとやせるといふ譯になる。それだから別に彼氏を知つてゐる者はとがめない。

人の眠むる頃には矢張り眠くなる。人間の本能が手傳つて、今晩はねむられそうもないと思つてゐたのも皆、自然にまどらかなる夢を結んで行つた。あゝ思ひ出多き五日市丘上「山の家」の夜は更けて行く、外は大自然の狀態に歸つて靜寂としてゐる。腕時計の音を子守唄の如くうつゝに聞き眠りに着いた。

山の誘惑を感ずる迄

村塚志朗

郊外のA中學校に通つてゐる永澤君と松下君は同級で親友であるが趣味を異にしてゐた。永澤君は非常に登山がすきで松下君は海が好きであつた。そして常に二人で山や海について議論するのであつた。

或る金曜日の午後、學校のかへりに二人は又山の事について議論した。

「今日も君は數學の時間に山の本を机の下で廣げて讀んでゐたね」

「あゝ讀んでゐたよ、よく知つてゐるね」

「よく知つてゐるねつて僕はいつも君の行動については細心の注意を拂つてゐるんだからね」

「いやな所まで注意をするなよ、それよりも君自身の事を注意し給ひ」

「しかしね君の行動がもしもあの恐く嚴格な數學の教

師にでも見つかつたら大變だと思ふからだよ」
「それは大丈夫だよ、安心してゐてくれ僕の巧妙なる手段を見ぬく先生は偉いよ」
「變な自慢はよせよ、そこらで君はそんなに山の本が讀みたいのかね、いつでも一週に一度は授業を眞面目に聞いた事がないではないか」
「あゝ僕はね、土曜日から日曜日にかけては必ず山へ行かないと氣がすまないんだ、それについていつでも金曜日には山に關する本を讀んでコースなどをきめるんだ」
「山、山つてどこがいゝんだらうね、僕にはわからないね、骨を折つて登つて疲れて歸つて來たつて何がいいんだらう、それよりも日曜日位は公園へでも行つてのんびりと遊んだり映畫でも見てゐた方がどれ程いゝかわからないよ」
「いやそれは君がまだ山に對する憧憬がないんだ、實際僕等の樣な若者は山に登つて山の神秘を味ひ雄大なる氣象を大いに養ふべきだよ、都會の不潔な空氣の中で弱り切つた肺臟を又回復させる絶好の方法なのだ」
「然し僕には山がそんなにいゝとはどうしても考へられないんだ、よく新聞に何々遭難したなどゝ出てゐるね、僕は實際山はきらひだ」
「それは君がまだ登山と云ふことをしたことがないからなんだよ、山の魅力を知らんのだよ、そして又僕等が登る樣な山位で遭難なんかしやうないよ、一度登り給ひ、斷崖絶壁あり、千尋の谷あり、或時は眺望遙なる平野を一方に眺め一方には遠く連山の白雪を望み、或る時は林の中を山鳥の聲を聞きつゝ、或る時は道のない樣な岩石の上を命がけでよぢのぼり、そして頂上に達した時の心地、重いリックサックをおろして汗ばんだシャツに冷い風をうける時の氣持、遠く眺望は連山に平野に限りなく雄大なる氣持がして英雄にでもなりすました樣な、又神にでもなつた樣にあらゆる世の煩惱から解脱した自分が感ぜられるのは實に登山家にあらざれば味ふことの出來ない所なのだ、又遠く山の姿を眺めただけでも雄大な神秘的な感がするからね、

その他冬は白雪を踏んで足跡をのこし春は若葉に高山植物に別天地を思ひ、夏はキャンプに野趣滿々たるを味ひ、秋は紅葉に、實に人生に樂園をもたらすのは山だよ」
「僕だつて人間だから景色がいゝな位は思ふよ、けれどもどうしても山に登る氣はしないね、海ならもう泳ぎたくなつて仕方がないんだがね、何しろそんな千尋の谷の上や、斷崖をどうしても登る氣は毛頭起らないね」
「やつぱり君には山の話はわからんのだな、漢文にあつたね「魚は水を好む、魚にあらざればその心を知らず」と君は勉强でもしてゐればいゝんだよ」
こうして二人は親友でありながら山に對する趣味を全然異にしてゐた。
然しそれから何度となく永澤君の說明やすゝめによつて松下君も始めて五月の上旬に赤城山に登ることにした。
天氣快晴なる新綠の五月上旬の朝早く永澤君は上野驛に松下君を待つてゐた、まもなく松下君は前日永澤君からいろ〳〵服裝や持物について注意された通り輕い身支度にリックを背負つてやつて來た。
それから二人はまもなく車上の人となつた、列車は關東平野をまつしぐらに上毛へと向つて走る。キャラメルを出して食べながら車窓の景色に見とれてゐる中にいつしか車窓に山々を望むことの出來る所を走りつけてゐた。
「松下君、どうだい山はいゝな、雄大だなあ、あの姿は靑に、紫にかすんでゐる山、僕はもうあの姿を見ると胸がどき〳〵して致し方がないんだ、そして乘つてゐる汽車が遲くて氣がいら〳〵するんだ、そらあの高いのが僕等の目ざす赤城山なんだ、それからこちらに見えるのが妙義山だ上毛の三山と云はれた赤城、これから登るんだ愉快だな」
「もう僕は疲れてしまつた樣な氣がするよ、あの山に登るには隨分急な坂道なんだらうね」
「大丈夫だ、心配するな男ぢやないか赤城位なんだい

君が最初の登山だからあまり峻しくない赤城を選んだのだ、君が赤城に登つて成程山と云ふものはいゝなと山の魅力を感じ山の誘惑を感じる樣になつたらこん度は二人でもつと高いけはしい山に登るんだ、日本アルプスへでもね」

「よせよまだ僕には山なんて本當に好きになれないんだからね、僕は赤城に登つて君が云ふ程の感が出なかつたら君を恨むよ、承知してゐてくれ」

「恨まれてもいゝよ、必ず君に滿足を與へる樣に山は待つてゐるよ」

こうして二人が話し合つてゐる中に汽車は高崎のプラツトホームにすべり込んだ、二人は驛を出て赤城の麓まで自動車にゆられた、車内には同じ山に登るらしく喜々しく語り合ふ人々が乘り合はせてゐた。

「おい、いよ〳〵赤城山に登るんだぞ、君が最初に山を踏む記念すべき時だぞ、よくおぼえて置けよ、どうだい遠くから見るとあんなに青く又紫に見える山もそばへくるとこんなに木々が綠なんだからね」

「しかしあんまり急な坂道ではないらしいね」

「この位の道で山とは云へないよ、それでも赤城神社から先は少し山らしい道になるよ、どうだい新綠薫る五月の山は若葉の香が良いだらう。向の方の谷で鶯が鳴いてゐるだらう。いつきてもいゝなあの聲は！　實際都會ではこんな所はないからね」

二人は若葉の道を何年か散積つた落葉を踏んで段々と登つて行く、太陽は若葉をすき通して薄綠に二人を照してゐる。二人の外にどこかの中學生らしい四五人の者が後の方から元氣よく登つてくる。

もうよほど登つて來た時一方が開けて木立の梢から遙に關東平野が展開された。

「おいこゝで一寸休まう」

「あゝ隨分汗が出るな、初の山登は相當つらいね」

「こんな平坦な道でそう疲れてはこれから先が思はれるね」

「男の意地だ、たいがひの所は君におともをするよ」

「偉い、やつぱり君だ、ところでどうだねこの眺めは

低い山がかすんでゐる、その遙か彼方に廣大なる關東の平野が展開してゐる。一幅の繪の樣だね」

「本當に良い眺望だ、廣いあの平野を目前に見たのは始めてだ、あゝいゝ景色だな」

「おい松下君、感心するだらう」

「あゝ感心したよ、今までの疲がどこかへ行つてしまつたよ、こんな時に一句出ないもんかね」

「だめだよ僕らぢやたゞ「あゝいゝな、壯大だなと感心するだけでまとまつた文句にならないからね」

「まあうたはぬ詩人と云ふもんだね」

「それで結構だよ、何も立派な詩人にならうてもんぢやないんだからね」

「ところで昔、國定村の有名な忠治がこの山にかくれたと云ふがどの邊だらうな、その時もこんなにいゝ景色を眺めて何と思つたらうな」

「きつとその時は今までの自分を忘れ、追手の役人を忘れたかもしれないね」

「實際いゝ眺めだな」

「いやこれから先にはもつと〳〵よい眺めの所があるんだ、もう出發しよう」

二人はまたリツクサツクを背負つて登り始めた。

道はまだあまり坂ではなく、太陽は暑い程に照つてゐる、風は若葉の香をたゞよはせて本當に良い登山日であつた、しかし初めて登山する松下君は相當に疲れたらしくいつも永澤君の後について汗を流してゐた。

「永澤君まだ隨分あるのかい」

「まだあるよ、今からが大變なんだよ」

「本當かいもう足が出さうもないんだよ」

「元氣を出せ、男だぞ」

「男だつて女だつて疲れる事は同じだよ」

「異ふよ、男は強んだ、少し位は意地で通すんだ」

「そんな事は知つてゐるよ、何か疲勞回復の方法はないかな」

「うまい事を云ふな、遠まわしに云はなくともキヤラメルが食べたかつたらはつきり云ひよ」

「實は食べたいんだ我慢してゐたんだ」

「それぢや二人で歩きながら食べよう」
キヤラメルを出して二人で分けて食べながら登つて來た、汗が流れて目の中に入る、口の中までも入つて甘い味の所に鹽ばい變な味を添える。
「隨分暑いなシヤツがたまらないよ」
「しかしこの新鮮な空氣を吸ひながら、又日光浴をしながら新綠の山道を登るのは實に都會なんかで不潔な映畫館などに入つてゐるやつらの氣が知れないよ」
「そう云ふなよこゝにもその一人が居るんだからね」
「あゝ悪かつたな、君も銀幕のファンだつたのか」
「しらばくれるなよ、ところで又この邊で休もうよ」
「なんだいまだいくらも登らないぢやないか、第一こんな所でやすんでゐたんでは山の氣分は出ないよ、また後から來た人にこんな所で休んでゐると新米だらうつて笑はれるよ」
「だつて僕は新米ぢやないか」
「しかし僕は新米ぢやないんだよ」
「そうするとどつちが勝つのだい」
「何でもいゝから新米は默つて僕の後について來ればいゝんだよ」
「そういばるなよ、もう山はよすよ」
「なさけないことを云ふなよ、もう少し行つて見晴の良い場所へ行つたら休ませるよ、そして何か食べようパインアップルでも」
「よしそれぢや元氣を出すかな」
「こいつ食べる事になると元氣が出るからね」
「だつて今體内に水分の不足を生じ傳令が喉まで援兵を求めに來てゐるんだもの」
「變なしやれを云ふなよ」
二人は語りながら相當に疲れたらしい松下君をはげましつゝやうやく又見晴の良い場所に出て來た。
「松下君此處で一寸休まふ」
「隨分我慢して歩いて來たんだからね、足に豆が出來たかもしれないよ」
「しかし我慢して來て休むと云ふ事が眞の休んだ時の氣持が出るものだ、度々僕は經驗したよ、急な坂道が

續く途中で休もふと思つても適當な場所がない、しかたなしに我慢に我慢をして坂道をよぢ登つて始めて休む場所を見つけて腰をおろした時、本當に何とも云ふことの出來ない快感を感ずるものだ」
「説明はいゝからパイアップルを食べよう」
「おい食べるのもいゝが向ふを見給へあの山の雄姿をあゝ何と良い眺望だらう、あれが日光の諸山だ、山に來ない人々には絶對に接し得ない所だ」
「あゝ實にいゝ景色だ絶景だ」
「おい君も思はず感心したね」
「あゝ感心したよこんな景色は何しろ始めてなんだからね、又大自然の絶景を眼前に展開させて食べるパインアップルは又格別な味がするね、家にゐて食べるうまさの何十倍かわからないね」
「山に來ての樂しみの一つは景色を眺めながら食べる事にあるんだよ、東京にゐる時の味と、山に來てからの味とは非常に相違するからね」
「本當にこうゆふ所が君のよく山々と云ふ原因をなすんだね」
「そうだよ君にも山がそろ〳〵わかつて來たらう、もつと〳〵良い景色の本當に君が山に來ないでゐられない樣にする所がこれから先にあるんだ」
「そうか、もうパイアップルですつかり水分が補充された、元氣も回復した出發しよう」
「ばかに元氣が出たね、シヤツも冷めたくなつた出かけよう」
二人はまたリツクを背負つて歩き出した。
もうほとんど頂上に近くまで登つており白樺の林が美しく續いてゐた。
「松下君、もうすぐ赤城神社や大沼、猪谷旅館等があるんだ」
「そこへ行つたら又休むことにしようね」
「よく休みたがるね君は」
「先ず最初だからそういぢめるなよ」
「うん休むよ、そして中食を食べよう、もうずい分腹が減つたらう」

白樺の林を通り汗を流して出た所が牛馬の放牧場、青草中に默々として草をはむ牛馬ののどかさ、心地よい風が吹き渡つてゐる、遙かの山腹にはつゝぢが眞赤に咲き亂れてその中に常盤木の青々としてゐるも一層目立つて見える、遠くの山はかすんでゐる。

「永澤君この邊に牛馬を放しておいても大丈夫かい」

「大丈夫さ、おとなしいもんだよ、どうだい悠々として草をはむ樣子、のんびりとした浮世の苦勞を知らぬ顏の樣に感じられるね」

「おい松下君こちらに見える池はなんだい」

「あれが大沼だ、青々とした水に岸の木々が影をうつして何とも云はれないね、東京近郊の洗足の池などゝちよつと感じがちがうよ」

「山の中にこんな沼があるなんて珍しいな」

「珍しくないよ、山に關して君はもう少し知識をもてよ、昔火山であつた山にはたいがひ湖や沼があるんだ即ち火口のあとに水がたまつたんだ、箱根の蘆ノ湖日光の中禪寺湖、富士五湖等有名なものだその他たくさんその例はあるよ」

「そうか、おそれ入つたな」

「もうすぐ赤城神社だ、元氣を出して登らう」

山道をすこし曲つた時木立の間から赤城神社の鳥居が見えた。永澤君は松下君を勵ます樣に元氣よくさけんだ。

「もうすぐだ、そこに見えるだらう」

「ずい分小さな鳥居だな、東京にはないよ」

「失禮な事を云ふな、有名な神社なんだから」

「この神社の前に標柱が立つてゐるよ、海拔四千六百尺だつて隨分登つたもんだね」

「休みながら食事をしよう」

二人は旅館の前の小さなバラックの樣な店に入つた五六人の人々が食事をしたり、自分達の持物を出して食つたりしてゐる。店先にはリンゴ、ミカン、サイダー、ラムネ、或は羊羹等がならべてあり、繪葉書なども賣つてゐて一寸休むにはよい所である。

二人はライスカレーを食べた、非常においしく一皿

では足りない樣であつた、けれども東京から持つて來た菓子を出して腹一ぱい食つた。

二人はこゝで記念のため繪葉書を買つた。それから三十分程休んで大沼のほとりに出た。

「きれいな水だな、石でも投げつこしようか」

「しよう、投手の腕前を見せてやるかね」

「投手か、第三投手ぢやたいしたことはないね、それに疲れてゐるからだめだらう。今日は僕の方が勝利だよ」

二人は夢中になつて石を湖面の方に向つて投げ始めた。松下君中々の强肩であつてやつぱり永澤君かなはない。上衣をぬいで始めたがだめなので、永澤君あんまりやらぬ方がいゝと思つて

「おいもう肩がいたくなるからよそう、そしてスケッチでもしよう」

「よしスケッチしよう僕のうまい所を見せてやらう」

二人は靜かな水面にうつる黑檜をスケッチにおさめた。先程の四五人の中學生がボートを愉快そうに漕いでゐる。風はなく湖面は鏡の如く、空の白雲をうつしてゐる。しばらくして二人は黑檜を目ざして登り始めた。

「永澤君、大沼の邊で遊んでゐた方がいゝぜ」

「何、黑檜へのぼらなくては感が出ない」

「君はよく感じ感じと云ふがもう十分に山の感が出たよ、これからは度々登る事にするよ」

「まゝいゝからついて來たまへ、道が少し急だけれどもたいした事はないから」

「やあゝ隨分急だな、僕はもう疲れてしまつたよ、汗が流れてだめだ」

「もうすこしだがんばれ」

「もう閉口だよ」

「なんだい、これから後に山に登ると云つた君がこれ位の所を登れなかつたら駄目だ、他の山は皆こんな所ばかりが多いんだ」

「あんまりいぢめるなよ、新米なんぢやないか」

疲れきつた松下君は足を引きずりながら十歩行つては休み、五歩あるいては立どまり、元氣な山には馴れきつた永澤君に導かれてとう〳〵頂上に達した。

「松下君、こゝからの眺めだ、僕が君をこゝまで無理につれて來たのはこの眺めをみせたかつたのだ、雄大だらう。絶景だらう。あちらに見えるのが妙義山だ、それからあの遠くに見えるのが日光の諸山、及び會津の連山だ、この景色に接した時の感はどうだね。學校の事なんか忘れてしまふだらう。

英雄にでもなつた樣な氣がするだらう。

人間はこんな所へ來ないと長生をしないんだ。

「あゝ全くだ君が山を讃美するのも無理はない、何と言つてよいかこの景色は筆や言葉には現はせない、唯だ「あいゝな!」と心中に深く留めて置くだけだ、誰か松島を見物して「あゝ松島や松島や」と詠んだそうだが僕も「あゝこの見晴、この見晴」と言ふだけだ」

「どうだねこゝでサイダーでも飲んで疲を忘れてしまふかね」

二人はリックサックの中からサイダーを取出してふたを開けた。シーツと泡が立つやつをおいしそうに飲みながら、

「永澤君あの遠くの方に見えるのは何だらうね」

「あれか、あれが關八洲を流れる利根川だ「え」の字型に見えるだらうあんな大きな川があんなに小さく見えるからね」

「隨分高い所に僕等は居るんだな、太陽に近づいてゐるんだ深呼吸でもしよう、あゝあゝ、いゝ氣持だ」

「僕はどうして早く君の言ふ事を信じなかつたのだらう。こんなによい所とは思はなかつた。今から僕は君について度々山に登るよ、そして雄大なる大自然に接することにするよ」

「松下君、よい經驗だらう。井戸の蛙大海を知らずと言ふ言葉があるけれども、家にばかりゐてはこんな氣持には到底なり得ないだらう」

「あゝ君に感謝するよ」

それから松下君すつかり山が好きになつてしまつて必ず週末には山に行くと云ふ樣になつてしまつたのである。あゝ偉大なるかな大自然美、吾人はこゝに接することに於て眞に生き甲斐があるのだ。

村松　瑛

三峠の富士

旦

峻嶺
むらさきの靚粧
餐霞にきみを呼ぶ
曉月
しぶきの繡花
哀愁の故園も奏ふ

射水俊雄

岳友におくる

山本清一

夕

ぶだうの汁がやまの方からにほつてきた

蟲

夜を徹してひとひらの紙をきざんでゐた

白樺

すでにわたしはねむり、好ましい名をそれへ
かきつらねた

想ひ

夜のろばたに　あかぬりの蠟燭がともされてゐた

徑

初秋　くさのいろが頂きをとほくしてゐた

雲

燭びを追つてわれらは樹氷のなかへみちびかれる

夜

この葉蘭はみづうみのいろをたくはへてゐる

秋

一滴の血となつて小鳥がおちてきた

洋燈

ほのほの尖きに夜ぎりが凝つてゐた

書

あきの蒼穹がみづうみにかはつていつた

山旅

宮氏保

夕べ

今日も山に日が暮れる
火をたいて夕べを讃へよう
夕映の遠い山脈に
明日の思慕がある

沼

どんよりと山の眼の様な
底なし沼に

びたゞと黒い波よる
マヂツクな鏡の面に
深林の影がぶつたほれたり
大きく肩をゆすつて笑つたりする
風が烈しいのでわたしたちは
雨雲を恐れて居る

（ある山旅より）

拾集録

朝賀義男

A

凍つてゐる雪の丘路
空は明るく澄んで
口笛は
ころ〳〵轉つて行く

B

ふいと見た農夫のひとみは
深い平和を物語つてゐたよ

C

ころがる樣にして
下りきつた所が峠だつた
部落につゞく路を見たとき
淡い淋しさがかすかに
行きすぎた

D

はろばろと晴れきつた紺碧の空の青さよ
流れ行く雲に落日の哀歌をうたふ
あゝ今の一時
悲しい反逆もなく
ただかすかにのこる
のびゆく希望

○春早く

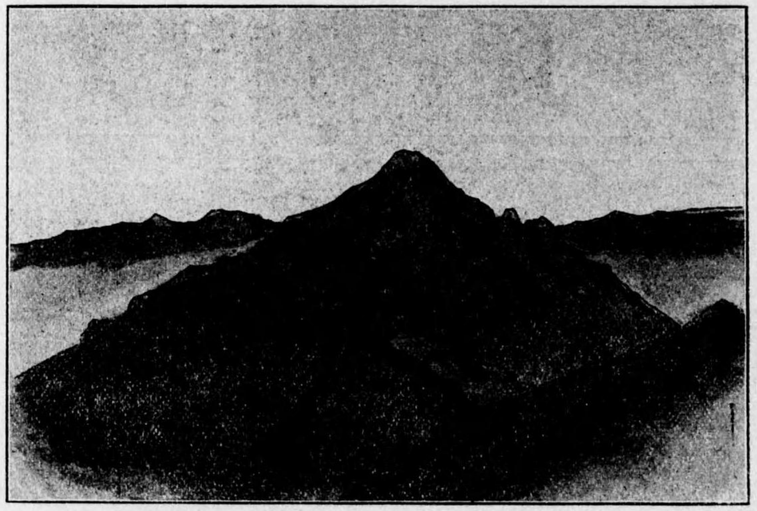
小鳥がさえするには
まだ早い
木の葉のない木々の間から
冬がまだのぞいてゐる山
山の中で口笛をふいたら
淋しい山彦がかえつて來た
山はまだ眠りから覺めない
冷々する肌……
冬は私の體の中にも
まだのこつてゐる

八・四三

谿

淺田信次郎

靜かな谿です
前は斑雪の山ですが
此音をお聞きゝなさい
此の微妙な音さら〳〵流るゝ雪解の
白雲が過ぎると
春陽が蒼い空と私の
眸にしみこんで來ます
菁める谿そして桃色の春が
どこともなく流れ込んでゐます



紀行

別愁

煤けた宿帳に
山男は感傷をもとめる
別愁の夜
ラテルネは一人
簷雨の音を聽いてゐた

廣河原小屋

燕岳・大天井・槍

渡邊安三

行程

昭和八年

七月三十日　松本――燕岳
七月三十一日　燕岳――殺生小屋
八月一日　殺生小屋――上高地
八月二日　上高地滞在
八月三日　同
八月四日　上高地――徳本越歸京

一行、伊澤桂三郎　石川勝正　村松新八郎
淺田信次郎　朝賀義男　高橋重吉
渡邊安三

有明溫泉には早く着いた。靜かな人氣のない溫泉で昔日の面影を留めてゐる。ハイヤーはこゝで返して朝食を攝る。溫泉の前の靑草の上に寢轉んで空を眺め時々雲のきれ間に望まれる遠い峯を鋭い愛着で憧憬れる。

溫泉の人の話しでは天氣が大分續いたから降り始めるのぢやないかと云ふ。食事が濟んでから釣橋を渡つて松林の中をゆつくりゆつくり登る。

すこし行くと立派な自動車道路が山を縫つて一ノ瀨まで續いてゐるのだ。松本の運轉手だからこの道を知らず惡い路に迷ひ込むでしまつたらしい。僕達の背後からフツとばしてくる度毎に癪にさはつてしやうがなかつた。

小學生が一團となつて遠足氣分でくる。平らな道を

たいくつしながらいつのまにか一ノ瀬まできてしまつた。

日は曇つたり晴れたりしてはつきりとしない。

思つたより樂な行程である中房川は濃綠に溪谷を形造つて底は暗い。流れる音のみが心をそゝる樣に響き渡る。だるい、あきた時感じる氣持をあるきながら感じる。刺戟のない此の旅では山の本當の氣分は味はれないので。

中房溫泉に近づく頃、先を行く人の姿もはつきりとし輕いハイキングの樣な氣分がみなぎる。唯重い荷を背負つてゐるだけの相違だ。中房溫泉出張所にはわけなく着いた。

段々と空があやしくなつて、降り出しさうな雲が有明山を包むと紅茶を沸かして食事するばかりにした私達にぽつりぽつりとやつてきた。急いで溫泉出張所の中に飛込む。中食をこゝで濟ました。がやがやした中に自然とまとまつた話が大勢の間にかはされる樣になる。小學生も案內者も皆な雨宿りをしてゐる。午後一時まで待つて小降りになつたら出かけやうと、ともかく決めてゴロリと橫になつた。雨も小降りになつたので、まだのびて居たかつたが、……。

行かうぜ。そう云つて小屋の背後の山路に取付く。雨はまだ降つてゐた。一歩、一歩、階段を登る樣に上へ上へと行く。有明山は雲のため黑い姿をぼんやり目の前に屹立してゐる。尾根に出ると有明溫泉が暖かさうに雨にぬれて見えた。それから少し離れて溫泉出張所が目にうつる。まだ休んで行手を躊躇してゐるであらう人も思ひやられる。

進んではきたものの路はすつかりぬれてつるつる滑り眼鏡は汗に曇るので、更に雨の强くならない內に燕山莊に行かねばならなかつたのでとかく心細くなる。

尾根の左側を、右側をどんどん行くと雨もやんだりして雲が時々きれる。すると黑い山が墨繪の樣に浮ぶ。

合戰澤の小屋に入つた時は雨がひどくなつた時だつた黑パンを出して喰べる。寢る事も出きない小屋だ。小量の食糧と飲物が棚にならべてある。これからは譯

はないと小舍の人も云ふので元氣になつた。雨の中を防水の用意せずに燕山莊までのす。小舍を出てしばらく森林が曲りくねりに續いてゐた　四百米ほどすると草と小さな木に山の姿は變る。或る一ヶ所を登つてゐる時、遇然山と山の間に黑い、遠い槍とそばに少し出てゐる小槍が見えた。

大槍も小槍も長年憧憬れてゐる物だつたがこんなに簡單にみられ樣とは少しも思はなかつた。山の奧の山にかこまれた槍を想像してゐたのでいさゝか張合拔けがしてしまつた。しかしそれを見た時の氣持は何とも云へない、これでいいと思つた。

三角點に出た時、左に燕、眞中に立山。それから後立山と餓鬼が雄大に連なり、思はずすばらしいなあと聲を上げる。

燕はとても美くしい山である。黑い岩と白い砂と綠の偃松と黃色な細かい石が繪の樣にそびへたつてゐる。

その向ふの空は日がさしてゐて、晴空に黃金色に輝いた雲がありその下には黑部の劍、立山、淨土山だと思はれる山がくつきりと鋭くみえる。小舍に入る。一杯で下に寢かされた。ライスカレーだが中々たべられなかつた。

ぬれた着物をかはかして新らしいのをするとすつかり暖かくなつたので早く寢やうと橫になるとそのまゝ翌朝まで動きの取れない程窮屈だつた。

夜中に二度目がさめた。暖かくなつてすつかり元氣を取り戻す。御來光を拜みに向ひの頂上に行く。寒くて手足は感じがない。黑い雲の上には富士、淺間、下の有明山などがぽつんぽつんでてゐた。富士の邊りの雲が眞紅になつたかと思ふと益々强くなつて雲からは鋭い光が飛び出す。山頂に行き着かない內に日は上つてしまつた。燕山莊の前には人が多く出てゐた。

高瀨川は暗くはつきりとは眺められなかつた。白馬唐松岳が重り合つて又判斷し得なかつた。高瀨川の向ひ烏帽子岳、黑岳、水晶岳が双六に續いてそびえ、槍、穗高は黑く影を落してゐる。拔戸と笠はその背後に同

じ様にそびえてゐる。水昌の隣赤岳に新築された小屋が指示されると云つてゐたがはつきりとそれらしいものは見られなかつた。

靜寂な中に太陽の光と共に感激に包まれてせはしく仕度をする。どつしりとした靜かな山の中にさわぎまはるのはそれ自體面白い事だ。

燕山莊は水が少ないので雨水を溜めて使用する。洗面器に一杯の水はとても望めない。外で立ちながら飯を喰べるこの眺望は全く素晴らしい。

小屋の人は夕立があると云ふ午前中は保證するが午後はどうなるか解らぬと云ふが青空も見えるし日も輝いて植物を照らしてゐるので疑ふ程だつた。

槍の方は絶へず雲が湧いてゐる。七時、どうせゆつくりな苦勞のない旅だからと紅茶を水筒につめ燕山莊を出る。その時昨日中房であつた嫌やな案内人が（あんなのもこんな所にも居るのかと思はれる様な）急いで得意になつて登つてきた。

朗らかな氣持になつて銀座通りの尾根を口笛を吹きながら、ぶらぶら赤茶けた岩を踏む、蛙岩（グエロ）はすぐにわかつた。登つて一休息する。

立山の方面は相變らず晴れてゐて白い入道雲が金色に輝いてゐる。

松本平は全く見えない　そしてそれから湧き起る雲が尾根を越して薄く僕を取り卷き、下の方に流れて行く。

ヒヤリと感じる　雨かと思ふと太陽は薄い雲を通して柔らかに散光する、爲右衞門岩もいつの間にか過ぎて、大天井の登りにかゝる。赤茶けて岩と綠の調和がガツチリとして細い路が頂上に續いてゐる。良くみると別な路が一つ右を卷いて向ふ側に消えてゐる。

切通岩を出るとすぐ眼前に大天井がソヽリたつてゐる。卷いてゐる路は新らしく造つたものでよく踏めてなかつた。大天の頂上から眺められる景觀には接する事が出來なかつたけれど横を通つた時の全然變つた眺望には誰も瞳をみはつたに相違ない。赤岩岳それから

牛首山、はつきりと近く見えてきた槍、穗高がいきなり顏を出したのだ常念岳はそのピラミツド型の優美と異つた様で東天井に續いてゐる。

喜作新道はハイキングコースの様に植物と山の背を通る路が東京の近くの山を思はせる。

高瀨川は槍の北鎌尾根に依つて千丈と天上澤に分たれる。

千丈澤は硫黃岳と赤岳のガレの彼方に白ろく光つて縱澤岳の尾根にかくれてゐる。赤いガレと綠の樹ときらきら輝やく澤が下の方に靜に横たはつてゐる。天井澤である。

グリムの童話に出てくる樹木とせゝらぎが、こゝに再現されてゐるのだ。遠くからみると童話の國としか思はれない。鎌尾根には所々雪溪がある。明日グリセードする槍澤の雪溪を想ふ。雪は憧憬れの一つである。

槍にも穗高にも雲はかゝつたり消えたりして東鎌尾根ははつきりわからぬ。

赤岩岳を越せば雷鳥も居やうと思はれる樹木が背に連つてゐる。二ノ俱谷がこま草と名の知らない草に依つて包まれてゐる。遠く視れば大天の續き常念から蝶ケ岳を經て大瀧山の山脈が梓川を穗高とはさんでゐる。梓川は德澤牧場附近が白く輝いて森林にあとは包まれる。

二ノ俱谷と中山をへだてゝの一ノ俱が合した所が一ノ俱小屋の有る場所である。

西岳小屋には大分人が着てゐた槍が時々穗先をかくす。その下の槍澤は雪溪が所々續いてゐる。きらきら日に輝やいた澤ははるかに遠い。槍から少しさがつて中岳、南岳と續き大切戸の所でぐつと落込むでゐる。それから北穗、前穗が並ぶ。

背後を振りかへればピラミツドの常念が君臨してゐる。そのなだらかな尾根は綠につゝまれ、東天に續く

水を補給し少し休息してから出發する。西岳小屋から二百米程下らなければ東鎌尾根に取付く事が出きないのだ。もつたいない氣がするけれど仕方がない。

急な下りをどんどんするとやせ尾根に出た。之れか

らは地圖では急の樣だが、登つたり下つたりして思つたよりも樂であつた。此の頃よりとかく怪しかつた雲行きが益々ひどく槍澤から吹上げてくる雲は天上澤に此のやせ尾根を通して落る、寒く感じられる。天上澤側は全く雲に閉されて北鎌の雄姿も燕も大天も眺められぬ。

石川氏足に豆を作つたのでそう當にへばつた。

雨はとうとう降つてきたが小屋までのす事にして服裝はそのまゝでがんばる、リュックと背中の間に雨水が溜つてひどかつた。岩はつるつる滑べる。煙つた中に小屋を見つけて飛込むだのは丁度四時だつた。早やかつたので三階に皆な寢る事が出きた。

風呂に入り窓より仰げば槍はうすれながらも嚴然と聳えてゐる。中岳も南岳も同樣にはつきり解らぬ。やけどをした。

夜中に起きてみたら星が一杯だつた。槍が黑く聳えてゐて喜しかつた。

八月一日

午前四時に起床、薄暗い中をランターンをたよりに槍の頂上へ行く、日の出前に登りたかつたがとても頂上に立つ事が出きないだろうと思つたので肩の小舍の前にひきかへしてきて、かたはらの岩にのぼりまつ。

槍に登つてゐる一團は大變なさわぎで危ない。

ランターンを灯して續々下からやつてくる。

寫眞機を出してまつてゐると寒くつてやりきれない。手袋をして岩に腰掛けて東方を見ると、富士、甲斐駒南、中央の雄峯のみが雲の上に黑づんで浮び、手前の方には常念岳が大天井に續く尾根をはつて靜かに聳えてゐる。背後には加賀の白山が巨大な山容に美くしき白をのせて唯一つ雲につきでゝゐる。御岳と乘鞍がうすくみえて燒の煙が白くなよなよと幾條も岩の間からでゝゐるのが見える。多分隣りは西穗で奥穗も北穗も北岳にかくされて解らない。前穗のピークがはつきりと數へられるだけである。

富士より離れた空が眞紅になつたかと思ふとみるみる光りを增して、一線が顏にかゝるその柔らかな光り

が赤く顏を照らした時、ワアッといふ聲や槍の穗先の萬歲といふ聲が靜寂を破つた。眞赤な太陽は雲をのりこして上へ上へとぐん〳〵あがる。言葉をもつて云ひ表はせない。こゝろがしばし夢遊病者の樣にぢつと太陽を眺めさせた。

日光が山肌にかゝつてゐる所は尙更美くしい。

上から物をみなれぬ爲か、上高地の方も遠くの樣に思はれる。スケッチや眺望に少し時を過して、肩の小舍に行き、スタムプを取つてから、小槍に出かける。

小槍は肩の小舍からはほんの頭だけしかみる事が出きない。事實肩の尾根よりも低い樣にさへ思はれる。それが一度尾根を越して西鎌側へ出るとあの逆層の偉大な姿が壓してくる。小槍でない樣な氣がする。岩が倒れる樣に感じられるのも斜に入つた層の深い切込みが、下の谷と共に肉迫してくるからだ。

大槍の裏をからんで小槍に行く道を見付けて鞍部まで行つてみた、岩はまだ冷たく水でぬれてゐた、岩をつかむ喜びが身に感じられる、誰もこない、三人だけだ。

雷鳥が岩の上につかまつてゐるのをみつけて喜しかつた。色が茶褐色の濃いのになつて一寸岩と解らないと思はれる樣だつた。鳩より小さい、冬には白くなるので五六月頃には半分白く半分變つてゐるそうだ。

中々逃げなかつたが、側まで行つたら「ガーガー」ともつかない鳴聲をたてゝ、少し飛立つたあまりとべないらしい。鞍部からは笠ケ岳が良く見えた。槍の影が笠の中頃にはつきりと映る。三俱連華の方はまだ靜かだ北鎌尾根はすごく天上澤、高瀨川と思はれるのが下の方にみえる。

小槍はこゝからみると全くすごい頭の上にのしかゝつてくる樣で今にも崩れやしないかとさへ思はれる。一枚の岩の眞中に手のとゞきそうな場所に一本ピトンが打つけてあつた。あそこに手をかけて取付くんだなと思つたが用意がないので出きない。高橋重ちやんは靴をぬいで岩につかまり一米ばかり登つたが駄目だつた。

一本のピトンがさびたまゝ岩の眞中に打たれてあるのは一寸考へさせられる。

又戻つて大槍に登つた時には人はあまり居なかつたどつぢつした頂上で四方を眺めながらすつかりゆつくりしてしまつた。こゝからは穂高のピークがよく見える。

殺生小屋に歸つたのは日が大分高くなつてからだつた。

小舍の主人から穂高縱走位ひ出きないのぢや男ぢやないといつて散々叱られた。午前八時、ゾンメルシーで雪溪に出かけた連中は歸つてきたので下に行く事にした。

今日氣の毒なのは義ちゃんで、腹痛で御來光を拜みに頂上にこなかつたので長い事小舍の中でなほつた腹をかゝへて待つてゐたのだ。桂ちゃんが「頂上で愉快だつたなんて義ちゃんの前で云つちゃいけないよ」と云つたので「いゝやちつともお面白くない」と話しといた。

岩をがらがら降ると高山植物が岩の間から顏を出して名の知らない花が小さな姿で、あつちにもこつちにも咲きみだれてゐた。

槍澤は今年(昭和八年)は雪溪が少なくなつて、グリセードの危險を云はれてゐたが、思つたよりあつた。

歐洲アルプスの樣に氷河やロックガーデンは無いにしても、東尾根と西岳とを包む此の澤の偉大さには一驚せずには居られないであらう。岩と駒草と雪溪が順序良く置れてあり、晴れた日には槍の穂先も見えやうと云ふ。まして初夏の六月の頃、新綠に滴たらんとしてゐる此の澤に入れば、冬の雪溪がそのまゝで雷鳥の姿も手近に見られやう。

槍澤は自由にあるける、グリセードで雪溪から雪溪へとふつとばしてもいいし、岩をトントン馳まはつても構はない。

大槍小舍に着いて一休してから又雪溪に向つた。

急な雪溪も思つたより樂で愉快だつた。澤は下で折れて樹木の間を流れてゆく、路は流に沿つて登つたり

下つたり一の俣まで同じ樣なものだが決して飽きない冬は雪崩のためにつぶされる槍澤小舍に入つて、スキーシーズンの話を少し聞き、冬山の恐ろしさに驚かされる。

一俣の小舍は梓川本流と一ノ俣の合流點より下にあつて、モダーンな二階造りの冬季使用も出きる木の香新らしい建物である。こゝまで來ると大分人里近くなつて、巡査も外に出て登山者を眺めたり、馬の足跡も見つかる。

こゝで晝食して廣くなつた梓川のせゝらぎに上高地を想像しつゝぶら〳〵あるいた。前穂高の北尾根の最端が梓川に覇を唱へる屏風岩で横尾谷に入る路のある所である。垂直に切れた岩はロープを持つて限りなき憧憬と魅惑とに山男の胸を誘はずには置かぬ樣に連なつてゐる。しかしそれはあまりに强く容易に我等を接近させない。

横尾谷に入る路は屏風岩を卷いて途中石標があるからそれに從へば唐澤への入口が見付かる。そこはロックとザイルとアイゼンと靜かにはつてある天幕の場所であつて、上高地の文明は一つもきては居ない。

こゝまでくると梓川も河原が數條に分かれて鯖を釣る人も見かける。川の附近は、岳樺、白樺、ヤマハンノキが密生してゐて日を浴びる綠葉が美くしく輝やくその間には前穂それにつゞく奥穂、明神岳のあらい岩の壁が青空にくつきりと眺められる。

槍見平　といふ所もある。丁度横尾の邊りで山が少し低くなつてゐるので、遠くに小さな、はつきりとした槍が眺められる。上高地よりくるものはこゝで、待望の槍を見、先づ愉快になるだらうと思はれる。僕は今朝まで穂先のお宮に背を合せてゐたのだから、なつかしまれる。

牛が川の向側に少しづゝ見ゑる頃はいつしか牧場の柵を通り越して中に入つてゐるのである。大きな密林の中を行くと大瀧山を背後として廣々とした牛の樂天地が川をゆるやかに通して展開される。詩と文學の素養がなくても足を留めて牛の鼻先をなでゝやりたいと

誰も思ふ。

赤みがゝつた朝鮮牛ではなくつて、白黑のガツチリした純日本牛がゆつたりとして吸呼してゐる。靜かな所で自分の糞跡も芳草によつてきゝとれないし、人が通つた所で廣々とした原には何一つ影響されない。

こゝからは大瀧山に行ける。大瀧山は常念と等しく槍穗高の觀際及び景觀に接するなら上げらるべき山である。しかし上高地より往復一日では少し强行である冬季上高地入りは比較的容易であるとも聞いた。

牛はおとなしい。新綠の頃牛の一團は德本峠を越へて一日がゝりでやつてくるのだそうだ。何百といふ牛がまとまつてくるのは確に偉觀だらうと思ふ。白い雪がちらちらと見ゑはじまる頃、又元の樣に峠を越して下るのだ。

上高地の溫泉氣分に比べて牧場は山男の心と旅の優しさをより以上に高めてくれる。

峠下の所までくれば人も大分會ふし德本越ゑの小學生にも會ふ。林道を一直線に行けば白樺の林や明神岳や西穗、霞澤岳も少しみえる天幕も林の中にちらほらみゑていかにもシーズンを過ぎた事を思はせる。

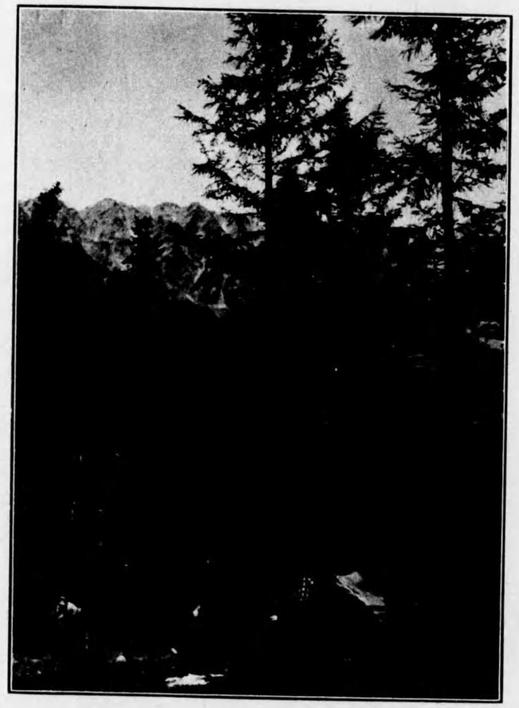
夕立に會つたので少し困つたが天幕もはつたし、ゆつくりできたので淸水屋までお湯に入りに出かけた。

それから林道の中をほつとした氣持で、歌を歌ひながらいい氣持でくると六百と霞澤が行手に暗い中に黑くそゝりたつてゐた。

八月二日

翌朝は曇りだつた今日は重ちやんと信公が德本を越ゑて歸る日だつた。飯盒に紅茶をつめてやつて、里心のついた二人を見送つてやらうと思つてゐたが、それも出きなかつた。二人が居なくなつて妙に淋しくなつた。白樺の林にかくれて仕舞つた二人の路を散步しながら、明神池にあるいていつた。山と闘つた氣持が少しも起らないので輕い遊山氣分がなす事に一杯みなぎつてゐる。

俺はいやだ、こんな所はいやだ。と腹の虫がわめく



一　高野草

キャムプ

梓川を渡つて、明神様におまへりして池に行つた。

池は三つばかりあつて禁斷の鯖がゆう〳〵泳いでゐる。上高地もこゝは靜かで明神岳の岩壁が池に映つてゐる。山男ならざるものが、菓子をたずさへて、着物とフエルトのゾーリとピツケルでないやはなステツキをついて、井ノ頭公園みたいにのさばるには、山男なる者誰もナゲカズにおれんやである。

小梨平の天幕から明神池を通り岳澤の下を河童橋にきて歸る一周コースはたつぷり一里はある。でもその中には人氣ない熊笹や白樺が、或ひは尾瀬を慕はせる瀑源地も少しあるのだ。

雪が多ければ岳澤の雪渓や岩間のがちらちら眺められる。こゝは全く上高地の姿そのものである。

さつき尋ねた嘉門次翁の家と共に上高地を語つてゐる翁の家は、ホテルや五千尺、清水屋とけたがちがつて、山男の良き慰安所である。そこを尋ねておん身等は始めて上高地の姿、それもまだ自動車の來ない冬ゴモリの何十年前のを想像する事だらう。

一周してくれば必らず上高地の不自然な姿が目にあまるのだ、河童橋はまだ良いとして、營林署への屆や御用聞が熊笹を分けてテントからテントへと商賣するは何事だいとどなりたくなる。

穂高や六百の岩をみてゐるとそれが巨大であるだけに愛しもし、たまにや一言上高地のだらしない姿をこき下してやりたいのだ。

上高地は夏くるもんぢやねえ、秋か時季をはずしてこなけりやならないんだと靜かに思ふ。

夕立があつた、五千尺に飛込んで、おしるこを喰べてやむのをまつてゐた。雨足の強いやつで梓川はみるみる勢ひよくなつて流れてゐる。帳場からおりて外をみてゐた番頭が、いきなり手をあめのビンの中に入れて二つ三つ口の中に入れたのを確にみた。

夜は火傷の治療に東京醫專へよつた。

「山へきて湯に入るなんてぜいたくするからだ」と云ひながら水をとつてホータイをしてくれた。槍の直下の殺生小舍でお湯に入た唯一の記念なんだ。一年たつ

てもまだ消えぬ。岩からおつこつて造つたのでなくてお湯の煙突にさわつてこしらへたものだから何と云はれても仕方がない。三期だとか云つてゐた。

眺望がないので燒へも登らなかつた。着いて以來毎日天氣はあやしくつてぶらぶら日を過した。

一ケ月も二ケ月も山に居る樣な氣分が身體中に感じられた。新聞が戀ひしくなり、ネオンの灯が戀ひしくなつた。うら悲しい日が上高地にやつてきてゐるのである。一人へり二人へりしてシーズンの最後を悲しいものにしてゐる。エキスパートのみしか荒された上高地に滯在してゐない。

大正池に遊びに出かけた、ホテルの建築が良く眺められた新らしい木の香がする。燒が細い煙りをゆるくだしてゐるそれはいくつもいくつも岩の間から登つてゐるのであつた。いやな道をたどつて行くとまもなく大正池の全面が見渡される。燒が聳えてゐて、右へ續く西穗の尾根や岳澤の雪渓が視られた。

川端に行く時、兎が一匹道の中の草むらに飛込んださつそく周圍を取卷いて、つかまへてやらうと用心しながら石や木を投げこんだ。しばらくの間出てこなかつたがふいに飛出すととなりの草むらにかくれて、もう解らなかつた。出きる事なら兎汁でもたべてせめて上高地の氣分を味ひたかつた。

水の面には數百の枯木が頭を出してゐた、それをみてゐるとセンチメンタルになる寫眞を撮したりして遊んだ、名の知らない鳥が水邊から枯木へと飛まはつてゐた。きれいな小鳥だつた。また夕立にあつた。誰かの尻が破けてゐたのを一枚撮した。

次の日は一日鰐を取りにあるきまはつた。

竿と毛針を借りて、昨日見た所に居つて、おろしたが中々かゝらなかつた。居ても上にでゝこないで、きやしやな姿を透つた水中に、あざけり顏に泳いでゐた

岳澤に行つても前と同じ樣に何もとれず鰐の姿も見付けられなかつた。そつとしのび足で近づいた所も出る時にはあら〳〵しく出てきた。少なくとも二匹はつゝて、石川ヌー公と二人でうまさうに……と思つて

出たのだが、

第一僕達二人には待つ樣な眞似は出きなかつた。一所に五分もゐて釣れなかつたら、又場所を變へて岳澤より上へ上へと進んだ。明神池に行つて禁斷の鰐をつかまへようとして熊笹を行く中に、あるくのがいやになつた。

天幕のそばで釣らうと歸つてくると、ポツリポツリと夕立がきた。神罰だと思ひながら急ひでかけて、五千尺に飛込んだ。又しることを喰べて夕立を眺めた。

その夜は明朝いよ〳〵上高地を去る事に決定した。誰も彼もあき〳〵した日を送つてきたのだつた。

グリーン色の天幕に集まつて寢た、悲しいやら喜しいやら話しもはずんだがいつのまにか夢をみてゐた。

朝は雨が降つたらしく、木の葉からはしづくがたれてゐた。明神岳、奥穗は雲がかゝつてゐた。周圍のハンノ木や白樺や、若いサウシカンバの細いうでを思ひきりなつかしんでみた。簡單な食事中に雨はふつてきた。

昨日で店をたゝんだ醫專の人達も皆な歸つてしまつた。

雨にふられながら、リュツクにつめて天幕をたゝんで仕度をした。樹木は綠の葉を益々濃くしてゐた。

昨日の釣竿はもう用はなかつた。鰐の一匹も釣れて……。と思つたのも夢となつて釣竿があるのがかへつて憎々しい。

「釣竿はどうする！」と云つた誰かの言葉に、僕は默つて毛針と糸を記念にとつて、竿は白樺にたてかけてあつたのを熊笹に思ひきり投げ入れた。

雨にたゝかれながら、幕營地に別れを告げて、誰も送る者のない德本越えを淋しく胸に描いた。先に送られて歸つた重ちやんと信公の事を思ひながら……。

一九三四・五・三十一

奥白根紀行

山本清一

——親友、T、K二君と共に奥日光へ向つた昨年の夏。これは當時の日記から拔萃した一部分であるが僕の山歩きに最も印象の深い體驗記錄である。

七月廿八日。

中禪寺湖に着いたのは正午頃だ。赤蜻蛉が飛んで湖畔は初秋のやうに涼しい。落葉松の葉尖きから眺める男體は懐かしい山だ。戰場ケ原を拔けて湯の湖を渡つた。美しい白樺林の間に靜かな日光溫泉が見える。湖畔の靑いテントの後ろではキヤツチボールをやつてゐる。長閑なキャンプ風景だ。

明日、僕等が登る奥白根は樹梢に迫つてくる。如何にも峻嶮そのものといつた感じの男性的な山容だ。その右肩から前白根、金精の峯が切れ、左に聯なる錫、笠、宿、堂坊、皇海等何れも逞ましい颯爽とした姿だ。茫然と眺めてゐれば自づと五體が引き締つてくる。

今日の豫定地刈込湖へ向ふ。三ケ岳の裾を迂回して金田峠へ出る路を三十分位歩くが變化の多い氣持よい徑だ。若いエトランゼが口笛を樂しそうに近づいて來たり、ボーイスカートの一團に出遇つたりして意を强ふした。

路の左に當つて木蔭に靑く澱んでゐるのは切込湖だ奥の刈込湖は稍々大きく細い水路を通じて切込に接してゐる。或る詩人が遠い太古を偲ばせると賞吟したこの湖。子供等の聞きたがるお伽噺のやうな傳說を僕は寡聞にして知らないが、濃やかな姉妹の情を象徵した優しい姿だ。そして又見るからに神さびた雰圍氣。何萬年といふ歲月が此處にのみ一度も訪れなかつたのだ

らう。或ひは神樣の秘められたプロムナードであつたかも知れない。

湖畔へ下る路はなかつた。仕方なく腐蝕さへした材木を傳つて飛び下りた。すぐ後ろは截り立つた巖で奥行はないがキャンプには申し分ない地形だ。ほつとしてリュツクを下ろしたのは四時十五分過ぎ。

テントを張つて夕食の仕度にかゝつた。焚火の痕やバットの函等が眼に付いた。魚が頻りに飛び上つた。水音が馬鹿に仰々しく響いた。

——大分、大きな奴がゐるらしいぞ。

釣り好きのK君は釣竿を持つて來なかつたことをつくづく殘念がつた。土地の人の話に鮒と鰻がよく釣れるとのことだ。

飯が美味く焚けた。ソーセージと牛肉の罐詰で皆んな滿腹した。小憩の後、キャンプファイアの準備に掛つた。暮れるに從ひ氣溫の低くなるのは心配だつたが小氣味よく燃え立つ火を圍んでビーナツツを投げながら愉快に騷ひだ。ハーモニカでプロローグを吹くとK君が例の調子で歌ひ出した。

それから後は一本の
煙草も二人で分けて飲み

といふ戰友の一節。僕はこいつが好きだ。小さい頃太鼓を敲いて飴を賣りに來た爺さんを思ひ出す。それから練兵場の隅つこで泣いてゐた兵隊さんが浮んでくる。——兵隊さんがどうして泣くんだらう。なんて親父に聞いた頃が寂しく蘇つてくる。

午後九時就寢時間だ。

今迄焰々と燃えさかつてゐた火を揉み消すといふ仕種は堪らなく淋しいことだ。靜かに天を仰ぐと星が三つ四つ數ふる程に瞬いてゐた。ランタンの灯を一つ殘して毛布にくるまつた。何となしに心もとない思ひが胸を衝いてきて睡れない夜だ。

七月廿九日。

垂布を上げると冷やつとする風が流れ込んだ。冷嚴な朝の訪れを告げるかのやうに小鳥が啼く。空は深く澄んで湖面を映したやうだ。

味噌汁と燒海苔を添へた豪華版の朝餐が濟むと三人拙い顏を並べての記念撮影だ。たゞ南瓜のやうに並んでゐるのでは面白くないッてんで、水面に突き出た丸太に駈け上つてセルフタイマーの動きを凝視めてゐると急にひつそりしたのが可笑しくてどつと笑つてしまふ。ところでシヤツターが切れた。

午前八時出發だ。この湖を神々に心から感謝してアデイウを告げた。途中、旅館の男を伴つたマドモアゼルに遇つた。印象に薄いプロフイールだつたが、その洋裝たるやデパートの飾窓で見るアラモードの素晴らしいものだつた。

蓼の湖に近づけば硫黄の臭氣が鼻へ來る。湯本がすぐ眼下に現れ板屋旅館の青い瓦を目標に路を下るのだ駐在所の前で懸樋の清水を水筒に入れ汗を拭つて出掛けやうとした時、僕の時計が一時間以上も遲れてゐることを知つた。昨夜米をとぐ時に水を入れたのだらうといふ見當はついたが我ながら呑氣なのには呆れた。今日は最も強行する日だといふのに僕等の負擔は更に加重した譯だ然し之れが必ずしも不幸だつたとは斷言し難い事件が其れから約三時間の後に起つた。

丁度、僕等が前白根の頂上に差掛つた時だ全く夢想もしなかつた雷雨が西方の山を荒らして今にも奥白根に飛びつかふとしてゐた。幻覺ではなかつた。この突拍子もない出來事を知る直前、僕等は飯盒の飯を突消ついたが皆んな妙に胸がつまると言つて二三匙で止めた。

玆で、若し僕等が一時間早く出發してゐたとすれば多分僕等は奥白根の頂上あたりで霧に卷かれて進退谷まり自決したであらう。或ひは白根小屋の見當をつけて下つたとも想像されぬことはない 、然しそれには路の跡さへない嶮しい燒石を傳つて大日如來迄二三十分もずる〳〵足を滑らして行かなければならない。

すぐ右手には宛ら地獄の一丁目を思はせるやうな膨大な爆烈火口がぐわッと口を開き、その燒け爛れた巨岩は物凄まじい峭壁をなし絶えず硫氣を吹き上げてゐるその規模の大きいのに加へて色彩のグロな樣を見上げれば氣の小さい娘さんは屹度昏倒してしまふだらう。此處で最惡の場合に遭遇したとしたら、果して僕等は沈着な態度を以て危難を逃れ得たであらうか。

この突如として起つた天の試練、正に晴天の霹靂であつた。文字通り一天俄かにかき曇つて風が暴れ出した今迄低く飛んでゐた赤蜻蛉が空へ吹き上げられ見る〳〵數を增して大群となり何か不吉な前兆を豫感させた。次いで雷鳴が遠く山の脊を震はせて來た。足下が光つた。頭のしんが痛む程强く鳴り始めた。電光がめまぐるしく縱横に裂けて飛んだ。愈々天候は險惡と化した。

緊急動議だ。

——おい！ どうする。

構はねえから頂上目がけてすつ飛ばふ。

こんな場合物事を眞摯に考へたりなどすると所謂老婆心つて奴で氣慨が畏縮してくるものだ。スケジュールの變更なんて恥の上塗りだと許り一同前進に決した

顧れば二時間餘殆ど斷崖に等しい急角度の小徑を木の根岩の根傳ひに這ひ上つて來た僕等だ。息をつく間もなく立ち上つた。

——今度は俺がトップを行くぞ。

默つて頷いて二人は續いた。霧は深くなる許りだ。湯本の方の空も次第に雲に被はれ男體の嶺はいつか沒してしまつた。前白根の頂上は大方岩石で路と思しい兩側には偃松が處々に根を張り霧が流れると公園の池の飛石を歩くやうに足元だけが見えた。

遂に來た。雨の猛襲だ。何糞つと思つたが眼鏡が曇つて歩行は困難となり、忽ちシャツを透して水が氣味惡く脊を流れた。土が一寸二寸と潛つた。十分程下つた時、不覺にも路を失ひ尾根に引返へして、陸測についてゐる路は一本きりないが傾斜が餘りに酷く奥白根へ通ずる路ではないつてことは容易に判斷された。然

し一分もぢつと土に踏み止まつてゐることはできない途のまゝに進むより外ないのだ。

釣瓶のやうにぐん〳〵下つた。血の氣を失つた草の色がどろ〳〵溶けてゐるやうだ。なんといふ凄慘な樹木の搖らぎだらう。熔鑛爐の中で足掻いてゐる僕等！

樹木は絶え間なく彈き返つて疲勞しきつた五體を容すべき一草一木もないのだ。もう一歩も上る氣力はなかつた。豪雨は益々暴威を逞ふし狂人の樣に奮ひ立つた。木の根に躓いて二間も三間も滑つた。倒れては立ち上つて走つた。絶えず呼び合つて互ひに激勵してゐたがいつか風の音に遮られて聞えなくなつてしまつた

其の時!! 足を下ろした岩が急にぐらつき出し岩魂の崩れ落ちる音と同時に全身が硬直して斜めに倒された。途端にリュックが枝に絡み宙に浮いた次の瞬間、跳ね返された身體は下方の斜面へ眞逆樣に轉落した。無事で岩石に齧り附いた時、頭上を掠めて飛んでゆく岩魂の唸りが始めてはつきり耳に殘つた。暫らく岩場を這ひ下りて稍々平坦な砂地に出た頃には雨が濃霧に變つてゐた。

——KE—ku—n!

——TI—ku—n!

當もなく聲を限りに張り上げた。すると意外に近く應酬が聞えた。然し三間も離れると見えない程で呼び交はし呼び交はし次第に近づいた。二つの黑い姿が見えてきた。無中で走りよつて鐵のやうに冷えきつた手を思はず握りしめ顏を見合つた。そして何だか解らないことを口走つた。たゞ嬉しかつたのだ。

岩にぐつたり腰を下ろして氣持を鎭めた。意識が段々はつきりしてくると猛烈に寒氣が身に泌みた。ずぶ濡れのシャツを脱いでリュックから毛布を取し出し身體に卷きつけた。

霧を透してこの平地の全貌が徐々に明瞭になつた。僕等のすぐ前面には鈍く波打つてゐる湖が見え、その左に當つて頂きのつぶれたやうな山が眼にとまつた。

——五色沼だ。確かに。

突然、T君が力强く叫んだ。僕の極度に減入つた頭

に何か曙光が走つた。ポケットを探るちとぐちや〳〵になつた地圖が出てきた。扇を開いたやうなこの沼のどの邊に今居るのか略々判つた。ガラスを拭いて見ると二時五分過ぎだ。

前白根の頂上を發つて一時間餘雨中を死にもの狂ひで彷徨つた恐ろしい光景が走馬燈のやうに蘇つてきた。眼はきつく冴えてゐたが身體は骨を拔かれたやうに疲れ果てゝゐた。其れでも霧の晴れ次第奥白根へ登る意氣を以て雲の切れ間を心待ちに待つた。

——がつちり歩きやアまだ三里や四里位。

口にこそ出して元氣をみせたものゝ殆ど氣勢を張るに過ぎなかつた。然し日沒には未だ三時間もあり

——どんなことしたつて白根小屋迄行かふ。

T君は痛む腹を押へて强硬に言ひ張つた。

一縷の希望を繫いで荒蓼そのものゝ天を凝視する事三十分。遂に一時間經つた。

待機は裏切られすべてを斷念するより外なかつた。然しこの荒廢した雨後の砂地や岩場にテントの張れるやうな個所等見當らず、眼に觸れる草といふ草、木といふ木は水浸しで到底焚火も覺束なかつた。

丁度、其の時。沼の東端にスフインクス樣の岩があるのを發見した。其れは一丈程もある巨岩で下から小さい岩が支へ、その兩側には膝を折れば潛れる位の間隙があり。穴倉のやうに仕組んであつた。奇蹟といふには餘りに勿體ない。これこそ天が僕等に垂れさせ給ふた慈悲の現れであらうと心に深く銘じた。早速小さい岩にテントを冠せその兩端を外氣除けにして內部には新聞紙や油紙を敷き大體の準備工作を終へた。

其の頃。突然、全く思ひも掛けぬ山腹に人の聲を聞いた。それが確かだと知るや交はる〴〵、

——ヤッホー!

を續けた。

軈て聲の聞えた方向からヤッホー! が返された。五六回應酬した。然し其の中に聲は聞えなくなつた。今迄默り勝ちだつた僕等は不思議な聲の訪れに對していろ〳〵聯想を起こした。

夫れは確かに二人連れで、すぐ眼の先の山手を歩いて行つた。この暴風雨の直後の山中を悠々のすなんて木樵か獵師の類ひでなければ出來ない藝當だ。岩燕の如く近づいて何處ともなく立ち去つたあの聲。懐かしい慈母の言葉のやうに身に應へた聲だつた。

五時といふに深夜の如く霧が凝り全身は瀧壺に立つてゐるやうにぞく〳〵震へた。岩の中へいざ入つてみると坐るのがやつとで身體を動かすのさへ苦しかつた。狹い方へT君が這入り、僕とK君は肩と肩を抱き合ひ溫め合つた。

テントは密閉してあるが、何處からともなく這入つてくる風が肌に觸れるとナイフで切られるやうに痛んだ。夜の深むのが恐ろしかつた。

——段々身體の熱を奪はれて凍死してしまふんぢやないだらうか。

——そ、そんなこと！　歌でもうたつてりや朝になるよ。

——夜明けの寒さは酷い。屹度。

——そうなつたら、外へ出てランニングでもやらうぢやないか。

——あーア、俺ア東京へ歸りたいよ。灯ともし頃の銀座が戀しい。無性にあの舗道が歩きたい。どうして

——そうセンチになるなよ。

到々、K君のつむじをまげてしまつた。話が途切れると例のメランコリイが胸を傷めて煙草を喫むのも嫌になつてくる。

——君は、死を覺悟してる

すると屹驚したやうな眼つきで見返して

——死？　山へ來たんだもの。其れが運命なら俺は喜んで死ぬよ。

——異議なしだ。‥‥でも凍え死なんてのは‥‥

緣起でもないと思つて其れつきり口を噤んだ。

うと〳〵と睡りかけると、じーんと脊筋を引つ張られるやうな寒さが襲つてきて目を覺ました。風の音が夜通し身體を震はせた。

——もう、夜が明ける時分だらう。

と、思ひマッチを擦つて幾度時計を見たことだらう。二晝夜も、三晝夜も睡り續けてゐるやうに夜が長かつた。時々、T君の唸る聲が岩を傳つて聞えた。腹痛は治つたと云つてゐたが餘程耐へてゐるやうに思へた。

七月卅日。

午前二時頃。それからは、空腹と渴とそして嚴寒のために一睡も出來なかつた。骨をさいなむやうな風は吹き止まなかつた。

四時を過ぎた頃。低い雲の動きが白く感じられた。岩を這ひ出して焚火の仕度に掛つた。枯枝を一握り集めるのも容易なことではなく、油紙や新聞紙に火をつけてくべると、ぶす〳〵燻ぶるだけでそれが燃えつくには腹這ひになつた吹いたり風を除けたり並大低の苦心ではなかつた。シャツや沓下が半乾きになつた頃は六時僅か前でべた〳〵する食パンを齧つてすぐ出發したが、天候は豫想以上に惡く坐禪山の肩越しに吹き下ろしてくる霧は、空一面を塗りまくつて何時雨に變るかも知れなかつた。

一時間の後、前白根の頂上に取つついた。雫が體に傳つて雨中を歩くやうに濡れた。尾根に出ると足下から霧が湧き立つて遠望を確めることは出來なかつた。

（以下略記悪しからず）

奥白根頂上、青銅造りの白根山神社に無事を祈つて一休みしたのは九時十分前。相變らずの霧に阻まれ僅かに菅沼と、近い白根小屋のトタン屋根を發見したのみで悄然として下つた。

小屋から菅沼へ向ふ杉の密林の中で、食べるものは全く盡き飲むに水無く、リュックの底に殘つてゐた氷砂糖を分け合つた時の嬉しい氣持。丸沼に着いて僅か三十分遲かつたために遂に最終のバスに間に合はず道路工事の土方の住む飯場に泊めて貰つた。其夜更にその翌日、追貝沼田間のバスの中から赤城の雄大な裾野を眺め懐古を新たにする等、悲喜兩端の目まぐるしく輻湊したこの四日間こそは僕の人生の縮圖ではなかつたらうか。

日記の最後に斯く記して回顧の筆を擱いたのだつた。

思ひ出の尾瀬

村松新八郎

山に入つてから三日目、肩の荷の重みにも、大分なれて來た身體で、尾瀬、あこがれの尾瀬に向つて私達は急いでゐた。七月末の燒ける樣な太陽も、今その偉力をそいで、一日の憩ひに山蔭にかくれ樣としてゐる。

尾根を通つて會津に行つてゐる縣道に出たのが、かれこれ四時過きであつた。これからは三平峠の嶮を越えなければならない。それにこの時間である。自重說を稱へるものはこゝで一泊しやうと主張した。然しパアテーの意向として行ける所迄行く事に決つて歩き出した。道は一本道だし沼には小屋がある。遲くなつたら小屋泊り、で私達先發は夜にならうががむしやらに歩いて沼に出で、後の連中を應援に引返さうと心に決めて、早やほの暗く夕やみのたゝよつて來た谷間の道を澤の音に急き立てられる者の樣に足下のみを見つめ遮二無二頑張つた。そうして熊笹に覆はれた峠の頂に出て一休みしてゐると大分離れたと思つてゐた後の連中が、赤い顏に水でも掛けた如く汗をたらし乍らやつて來た思つたよりも早く標高五千八百尺の峠に立つ事が出來たので先づ一安心する事が出來た降りはぶかぶかの半分沼を思はせる樣な所謂モスであつた。

降りをひたすら下つてくる時、木の間を通して鏡の如くぎら〳〵光つた湖面が、もう沼はそこだぞと手を指延べてゐる樣に感じられた。

降り切つて湖畔に出た時、私は重荷も忘れて暫く佇立してゐた。やゝあつて荷を下しその砂邊に身を横へた瞬間、自分が俗界を遊離して仙鄕に溶け込んで行く樣な得も云はれぬ崇高な感じに圍繞せられた。

燧岳を眞正面に、四邊りは斧鉞を知らない太古さながらの原生林、沼は今、今日一日の最後の熱をもやしてゐる。太陽の光を浴びて金色の小波を靜かに〳〵私達に送つてゐる。空は西方に大きな入道雲が太陽を一刻も早く引込めて夜の帳を下さうと努力してゐるかの如く太陽を覆つて居る。その雲のすき間から金の箭を射る光線。金緣の雲、金箭の光線、それは都會、郡がる屋根越に見ても目を引附けられるものなのを、ましてや、邊りに人氣なく、あるものは湖面を渡つてくるそよ風と、鶯の鳴聲の還境に於てをや、人をして現實を忘れしめるに何の不思議の存する事があらうか。

憧れの尾瀬、久戀の沼に接し、我を忘れたのも無理はない。然し餘り落付いてゐるべきではない。我々は今夜の宿を作らなければならないのだ。そして夕飯も！餘力を集めて居た太陽も、もはや山蔭に入つた私達は急に身仕度して走り出した。非常な疲勞と空腹を感じ乍ら。

夜、私達の宿、テントを張り終つて、飯盒の米を火に掛けた頃はもう邊りは、とつぷり暮れて此處彼處でたいてる。キャンプファイヤは童話に出て來る鬼火を思出させる。空き過ぎた位に空いた腹の虫は、目の前にふいてる飯の香をかいでクウ〳〵悲鳴を上げてゐる。やつと皆の努力で思つたより早く出來上つた飯をそれはいつもより長く心には感じられたのだが——かき込んだ時の樂しさ、その瞬間には旨さ等はわからない。たゞ夢中だ、手製の御菜に十二分腹を肥して愛用のパイプに一ぷくした時には、他のキャンプからは、夜の氣分を高らかに味つてか、バスの合唱が初まつてゐた。ラテルネを便りに食器を洗ひに行けば、山の清水の冷たさに思はず手を引込める、ほんとに冷たい水、氷よりもなほ冷たい水が後から〳〵一瞬の、とゞこほりもなく流れてくる。

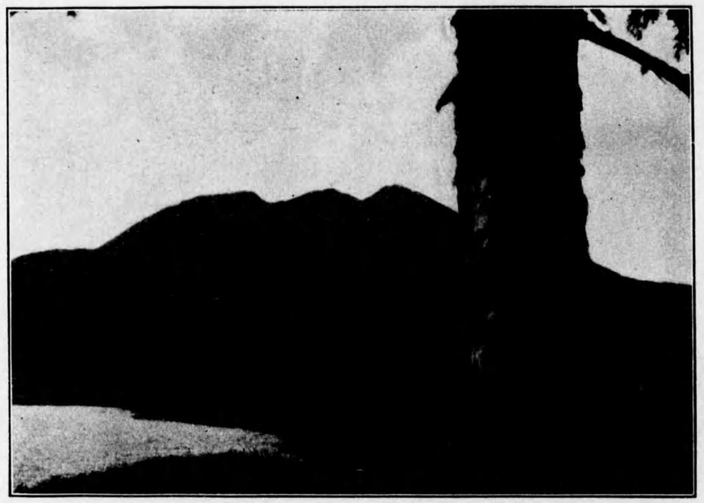
かれこれする中に、鬱蒼と繁つた大木の梢の方から青白い無氣味な光がたゞよつて來た、初めは大して氣にもとめなかつたが、その數が、だん〳〵增へて終には數も數へる事が出來ない位、木の間と云ふ木の間か

らさして來た。月の光!! あの月光がこんなにも神秘的に見えた事は且つてなかつた經驗だ。冷やかな靄の中へ、夢の國を歩むこゝちで湖畔に出ると、銀色に照り映えしてゐる湖面には幻の何物かの樣にもやが一面に低く〳〵たれ込めてゐた。沖に誰やら舟を出したらしく、形はないが只櫓の音のみギイ〳〵としてゐるのも、この神秘を又一しほ神秘的ならしめてゐる。燧を初め對岸の山々はもやに消されて只此方の岸のみが、淺洲に一面葭の穗を持つてひかへてゐる。リズミカルに聞えて來る小川の聲、晝間は小鳥の聲等に妨げられて聞く事も出來ない。小川の聲も夜は、ましてや今夜の樣に月夜には此上もなく、心良く耳を打つてくる。

しばしのそゞろ歩きに、心の底迄冷へ切つてしまつた如く感じられて思はずシヤツの袖を延しつゝ、キヤンプに走り込んだ。樂しかるべきキヤンプファイヤも一日の超勞動に只語るよりも默り込む方が數多くなり終には舟をこぐ者も出て來る。でファイヤもそこ〳〵に各テントに、一日の憩を求めに入つて行つた。狹いテントの中、毛布にくるまつて木の根や石に、いじめられつゝも晝の疲れかいつの間にか皆高いびきである。

朝——寒さで目がさめる。それ程尾瀨の朝の寒氣はひどい。零下十度ださうだ。邊りは未だ眞暗だ、昨夜の月も今はなく、鼻をつまゝれてもわからない程の暗さ、彼方のテントで誰かクシヤミをしてゐる。もう起きたのかなと思つてると、皆起きてしまつた。寒さでガタ〳〵齒の根も合はない。力んで寒さを克復しやうと思つても駄目だ。火が戀しい、早速火を造つた、皆テントから這ひ出して暖を取りに來る。口をついて出る言葉は寒いなあである。

昨夜よりも冷い水で顏を洗つてゐると燧岳の三つの頭に赤みを帶びた日があたつて來た。小鳥のシムホニー、森の朝は今徐々に明けてくる。冷凍な、餘りにも冷凍な、空氣、沼からはもく〳〵と湧き出る如く、もやの大群だ。思はずテントに馳け込んでカメラを持出し、朝の沼と燧岳をレンズにをさめる。



郎八新松村

燈　　嶽

長蔵小屋でかつてゐる鶏のとき、小屋から聞えてくる朝の仕度で、込み合つてゐるらしい人々の聲で、矢張人間の中で生活してゐるのだなと感ぜられる。

一夜の憩ひに、元氣百倍の人々だ山の朝は何んと云つても皆朗らかそのものと云つた顔ばかり。

私達は今日一日はこゝでゆつくりしてゆく筈だ——とのんびりと飯を食ひ、後仕末をしてさて燧岳に向つて歩き出したのはかれこれ九時頃だつた。

邊りの人達も皆それ〴〵プランに従つて大半は歩き出した後だつた。燧岳の麓迄一里半の道は、尾瀬特有の濕原や森林の中をくゞつてて行く道だ。

長蔵山人の墓石のある邊りは一面に黄のニツコウキスゲ、純白なミヅバセウ、その他紫等々の高山植物が日も綾に、その美を競つてゐる。カバ、ミヤマハンノキ、カヘデ等の深緑が派手な装をなし、リンドウつゝじ、ヒメシヤクナゲ、サクラヤナギはその内に美しい模様をなしてゐる。

濕原の所々丸太を渡して足の潛るのを妨いである。尾瀬の主、長蔵さんのゆかしい心根に感謝しつゝ進む

燧岳——二、三ある登山路の中で一般的なのは山の南面にある雪崩窪だ、小屋から行けばそこが最も近い道なので、これから登り出す道と云つても空澤を笹籔を掻き分けて登つて行くのだ、或時は岩を攀ぢ樹にすがつて登る。途中迄は殆ど展望もきかない。空身に氣負つて面白い樣に登つて行く、四合目邊りからぽつ〴〵沼が見え出して來た。途中平坦な箇所を通つて少し行つた所に雪溪が、ほんの僅かではあつたが、遠來の客を樂しませるが如く、靜かに座つてゐた。生れて初めてお目に掛つた雪溪、只もう無性に嬉しくなつてしまつて滑つては上り、又滑つた、そして何分經つただらう。未だ頂上へは十分あるし、と心を取直して偃松、ミヤマハンノキ、シヤクナゲ等の群生してゐる間を頂上迄二百米急登を續けて行つた。

頂上のパノラマ北西の方平ケ岳から、朝日等々の越後邊りの雪を頂いた連峯がほのかに、然し雄大に控え至佛、景鶴、笠の尾瀬を取圍いてる山々は各れも美し

い林相を示し、神秘郷尾瀬を防衛して居るかの如くである。これらの懐に靜り返つてゐる尾瀬ケ原は、こゝ燧岳からはその全貌は見られなかつたが、名にし負ふ大小無數の池沼を以て見る者をしてひきつけずには置かない。視界を南に移せば、沼の彼方三平峠の、上方には日光連山がそびえ、盟主白根は三角な頂を白色に輝かして四方を睥睨してゐた。鬼怒沼林道とおぼゆる邊りは春の海を思はする山波のうねり。一周すれば北の方、指呼の處に會津駒のなだらかな、山項が彈力體かの樣にむつくりともり上つてゐる。

小春日和の日、そよと吹く風はあつてもおいたてはしない。狹いが安全な頂。景色はすばらしい。空は溶け込む青さ。實際降る事を忘れ、この身を恍惚たらしめる。パインアップルの甘味に味覺を樂しましめ、浩然の氣を十二分に吸込んで忽下山にかゝる。

尾瀬ケ原、原とは云ふもの、普通一般の原とはいさゝか趣旨異にし、日本で此處を除いては北海道と其他一個所しかない場所だ。一樣にぢく〳〵足を踏む度に水が靴を包圍してしまふ。所謂濕原である。そして色々な型をした大小樣々な池が無數に轉つてゐる。小は直經五六米、大は二三十米にも及ぼうか。その水面に生々した草を付けた島がある。止つてゐるかと見れば、ほのかに動いてゐる。尾瀬に對する憧れの幾分かを占めてゐた。これがあの待望の浮島なのだ。眼の前にある獲物に飛びかゝる犬の如く、パーティの一人は浮島に飛乘つた。ピッケルの先で一突すると、あやぶげに動搖し乍ら我等浮島號はおもむろに處女航海に上つてゐつた。丁度眞只中迄出て行つた時、將たと推進機が止つてしまつた。船上の一人岸上の我々も等しくはつと……しなかつた、と云ふのはかねてロープで除々に引寄せたから。

水深二米位の底には無格構なイモリが、此處は俺樣の天下だ。とでも云ふ顏で悠々と泳いでゐる。

二三人乘つた後私が乘つたが、岸を離れたかと思ふや否、急激な勢で傾斜し出した。まご〳〵してゐると顚覆しさうだ。あわてゝ反對側に體重を移すと、今度

はそちら側が沈んで行く、此處に於てか絶體絶命最後の聲をしぼり懸命に、命の綱をたぐつてもらつた岸についてやつと人心持付いた時、あの儘だつたら今頃は底にゐるイモリと同居してゐるだらうと考へたりしてぞつとした。

この原因を査問委員會で諮つたらば、差詰め二三回乘つた後だつたので、島に水が自然としみ込んで重くなり、次に乘つた時には今迄は平氣であつたものが一寸の加重で顚覆の災を越したんだらうと思ふ。とか云ふ事に落付く事だらう。私がほう〳〵の態で下りた後で狸さんが又乘つた、いつもの調子で勢良く岸を突き離れた迄はよかつたが、力が入つてゐたので三四米ずゝと沖に出たかと思ふと、忽ちぐゞとかしいだ。さすが慌てたが反對側にさつと力を入れると又そつちが沈んだ何の事はない私のやつた事を沖で反復してゐる樣なものだ、今度の場合は岸からも遠いし、四人の後、五番目なのでその浸水も甚だしかつた。懸命にバランスを取つてゐる狸さんの股邊り迄水中につかつてしまつたので、見て居る方でも氣が氣でなかつた。それでもどうにかこうにかてんぷくせずに岸にもどつたので今度はもう浮島などに戯れないで歩き出した。見上げれば至佛のなめらかな山はだは紺碧の空にくつきりとスカイラインを畫しつゝしとやかにつゝましく立つてゐる。

上田代中田代の境界には、幅四五米の川が水量たつぷりに川藻をなびかせつゝ、相當なスピードで流れてゐた、橋は上手にある事は解つてゐたが近道をしやうとして眞直に歩いてゐたので、　川に直面した私達は矢張上手の橋迄引返さなければならなかつた、橋を渡つて靜かな〳〵原を靴で踏む度のぢゆく〳〵音を聞き乍ら歩いてゐると自分は何處に向つて歩いてゐるのだか心もとなくなる。一里半の濕原がその終りに近づく處に山の鼻小屋がぽつんと一軒丈建つてゐる。小屋の窓を開けば燧岳が窓一杯に入つて壁畫をかけた樣に落付いて見える。

白樺の大木に圍れた小屋、いかにも山の靜寂に調和

してゐる此の小屋、夜は鰐釣の父爺から買つた大きな川魚にいつまでも忘れられない美味を味つた。　終

武尊山の想ひ出

朝賀義男

武尊山

この山を遠く回顧するときそこには樂しかつた山旅を想出し殊に印象深からしめた山としてはつきりと私の胸によみがへる。

今年になつてこの武尊山の事について書くと言ふ樣な事は二年前の山旅ではあるし、又全くあの頃は自分としても夢中にそして山登りと言ふ事についてあまりに一年生だつた僕だつたから今その山について書くときに斷片的の思出はあつても全面的に記錄的な參考が得られないのを殘念とする。

これから書く武尊山は「山と溪谷」九號に「武尊山を中心として」として吹原不二雄氏が詳細なる參考文獻を呈供してゐるから武尊山行きの人は是非よんでおくと良いと思ふ。

同書に「信仰の對象としては可成り古くから各登山道が行者によつて開拓され講中によつて登山されるにも拘らず餘りにも登山家大衆には氣付かれず喧傳されぬ不遇な山である」と著されてある樣に現在に於てもあまりに知られてゐない山である。近時夏山登山の形向がよりよく靜かなところを求めて山岳人がおしよせて行くのを見るとこの、山も尾瀨方面の開拓と共に人の往來のはげしくなるのではなからうかすくなくとも當山岳部諸兄のこの山に志す人々

は自然の破壞されない今の中に行くことを期待する

× × ×

私達は沼田から川場溫泉に向ひ夢の如く全く夢の如くにわづか半日の中に上州の川場にまで來てゐるとはまつたく長い一日だつた樣に思へた。

土地の子供達に歡迎されて僕等が天幕をはつたところは宿屋の近くのお宮のそばだつたと記憶する。

萬事食事や明日の仕度をすまして溫泉につかりに行つた。その宿屋は夏だけの營業で冬は東京の方へ歸るとか宿の若い人が言つてゐた。お湯につかりながら、それとなく武尊山の地理などを聞いてゐたがあまりにもぬるいお湯だつたので我慢出來なくなつてにげだしてしまつた。本當にお湯に入つてゐる方が寒い位だつたから……

それでも旅先で、お湯に入れてもらつたので感謝して家を出たのだつた。ふと見る天には星がいつぱいに出てゐるのだつた。天の川を見て急に鎌倉がこひしくなつたりした。眞暗な道を一足〳〵電燈をともしながらかへつて行つた。宿屋の人から聞いた話によれば土地の獵師が朝未明に起きて山に行くと曉おそくなつてでなくては歸つて來ないとか、熊が出るとかすごい話の一くさりなので我々の心はとみに緊張したのだつた

天幕にかへつて都にのこつた友に第一報を書く、あすにそなへて早くねたつもりだつたが……

翌朝天幕もたたみリュックサックもつけて川場を出したのはあまり早くなかつたと思ふ。

左千貫峠道としるされたところまでは平地も同樣でのんびりした街道だつたとても愉快な歩行だつた、白百合も咲いてゐた、小川のぴち〳〵はねてゐる音もきいた。

夏の旅はここいらでも靜かな身のひきしまる樣な氣がして大きな聲を出してこの靜けさを破壞したのも僕等だつた。

武尊山の全部の姿をはつきりと見る事の出來たときは行小屋を越してやうやく尾根にとりついた時だつ

た。晝には早かつたが晝食をして武尊山をつく〴〵眺め入つた。木々は夏の太陽にてらされて濃いかげを作つてゐた土地から出る蒸氣のいきれがかすかに感じられる。

ここへ來て益々靜寂と孤獨感にうたれて、まつたく身も心も澄みきつてしまつた。

でも歩き出してからは時々大きな聲がその靜けさを破つて出た日陰の少しもない草地この尾根を北にぐん〴〵のぼるまさにこのところ炎天に流汗淋漓と言ふところ

（前武尊）

武尊山の前營前武尊にたつした時にはすでに夕方近くであつた、あまりにも豫定よりおくれた事を悔ながら、しかし無言の中にもかひがひしく天幕を張つてしまつた。丁度前武尊と劍ケ峯の鞍部であるこのところは前武尊の御堂も近くに見える尾根道だつた。目を轉じて遠望すればはるかなる山によする想ひは一入深かつたものだ天幕の中の一片のパンも始めて知る有難い思出となつた。武尊山は水がないので有名だ。白けずりに見える頂の（前武尊）御堂はなにか言ひたげに言ひたい事が一杯ある樣に默してゐた。

（劍ケ峯）

明るく朝露のしたたりまたたく頃前武尊を出發して劍ケ峯にさしかかるはじめて知る土の匂ひ、鼻のくつつきさうになる程な急なのぼり垂直に木の根鐵のくさりにつかまつてよぢのぼれば偃松がたくさんに生えてゐた。そこから見た武尊山はより大きくひろがつて見下ろせば三岩峰がそびへてゐて木の海を思はせる中にぽつかり浮んだ岩山だつた。うしろをふりむけば、前武尊、北をながめると中の岳、イヘノグシ、沖武尊、劍ケ峯山とずうつとつゞいてゐる。ここからの觀望はとみにはりきつた心を益々はりきらせたのだつた。

唯、大日峯の東南に垂直に露出する高さ四五十米もあらふ大岩壁に宮ちやん、敎ちやんの登山姿が白い點となつて見へた。送つた聲が山彦してかへつてくる。

（イヘノグシ）

劍ケ峯を下りきつて又樹林をぬけて登路にかかるその地帶をすぎるとすごい熊笹の密集、頂までそれがつづいてゐる。遠くから望んだところは芝生の樣だつた。白い帽子白づくめの服裝があまりにもよい對象となつてこのましく思はれた。

（住し沼）

イヘノグシを稍下ると徑は中の岳の南側笹の斜面を搖いて行く稍々行く內に一箇所一杯水とも言ふべき僅かに清水のしたたるところがあつた。そこでたまつてゐた水を僕等はどんなによろこんでのんだ事か、山の上へ來てから唯一の水だ、更に徑は下りきつたところに數ケ所の水たまりがある雪解けの水らしいのだ。武尊山の中で一番に氣苦勞をするころこの池に會つてほんとによろこんだ。

とにかくそこで大分やすんだ天日で水はなまぬるかつたがあんなに水のありがたさを感じた事はない。

これをすぎて笹の斜面をのぼりつめると中の岳の一端の高みに出るが其處に二つの銅像がある。この銅像から沖はまつすぐだ。

沖武尊

池から見た沖武尊はゆるやかな丑の樣なものだつたそれをかけ上る樣にして愈々武尊山の最高點のよき見晴臺の上に出る。

ここからの眺めは實に忘れられない。赤城山は紫にかすんでまさに關東平野の北に大きな裾野を引いてゐた。

左に眼をうつすと中の岳の左方に奥白根それから燧岳、至佛山の異樣な姿をもながめられる。さらに上州越後の國境の山々を一眺に見渡す事が出來た。

眼下に上野原がまるで箱庭の樣に見うけられた。

そこでうけた印象がこころよいものだつた。前武尊もイヘノグシも眼下に見えてゐた。それらの山々もなつかしい思出となつたのだつた。

（武尊澤）

藤原道に下りかけると切開きはあるにちがひないが石楠の枝偃松の枝などにかすかにふみあとをとどめる

ばかりで道らしいものはさらにない。それをときには足を突込んだりしてどん〳〵下つて行つた。下りきらないところで岳人に會ふ見るからに氣づよい學生風の人だつた單身これから川場へ下りるのだと言つてゐたその人の登つて來た道をたずねる、おしへられた澤に通ずる道は急な坂だつた。石がころ〳〵と非常な急速な勢で落下して行く一人〳〵歩いて行く事にした。ここで石川さん早足を發揮した面白い程に石がおつこちる、下からはひ上るちりをまともにうける、それをつきすすんで氷澤まで突進だ、下へおり來つて急な坂を見るともうしづかな平和がよみがへつてゐた。

始めてつめたい清らかな水をのむ事が出來てうれしかつた、そこは氷澤の源頭だつたのだ。食事をそこでしたのは大分おそかつた。澤下りは又格別だ一足〳〵の緊張、つめたい水の觸感は、永久なる水の音響は、我々の心をマスターしてしまつた。谷間の日暮れは早い武尊を下りて澤に入つてからの第一の露營だ。

天幕に入つて斜面の急な澤下りや瀧をなす部分や沖武尊であつた學生風の人などの事を思ひ浮べた。

澤は相變らず互にもみ合ひへし合ひさわめきながら走り下つてゐる、しかしその頂はまだ眞黑の中に水の音だけが眞近に聞こへて來ると、ある恐怖に似たものが起つてゐた。

澤のおそい夜あけ、思つたより兩岸の眞近にまでせまつてゐるのを見るととうてい取付けない樣な勾配。

まだ暗い澤の徒渉だ。水かさが增した樣だ、目下がひらけて來た樣な氣がしたと同時に徒渉の最終點である。裏見瀧に來た。この瀧を上から見ると下の方はしぶきとなつてはつきりと見えない。下の方にすひ込まれる樣な無氣味な氣持がわく。いよ〳〵澤とお別れをつけて上野原道をとる。

（上野原）

武尊澤からはカヤノ澤を過ぎ更に實臺樹南下の山腹所謂上野原の草原この原を下りぎみに道は走つてゐる上野原の原頭でふりかへつて武尊山をかへり見たとき沖武尊と劍ケ峯山のみを認めるにすぎなかつた。武尊

澤は蒼々とした暗綠にうめられてゐる。そうした懷しい想出を山の彼方によする時その想出が一杯になつて白雲のただよふ沖のあたりを眺め入るのだつた。

あたり一面は草原でところ〴〵に少さな木が生ひ茂つてゐるのや、微風が吹き渡る度毎にこの草の波が山の方に押よせる。暗い武尊澤を下つて來た我々は一通りの喜こびではなかつた。重疊と起伏する丘陵はひろ〳〵として皆の顏にはつきりと白い齒が浮んだ。

雷りにも會つた。かげろうのもえてゐるのも見かけた。

夏の日中とは思へない位にこころよい涼風が吹いた此の美しい原も、何時しか盡きて樹林に入つた。坂路を急いで下つたところが青木澤の部落だつた。

谷川岳

何んとなくいゝ匂の漂てくる明るい零圍氣に上機嫌な僕青い空に武尊が見える。山を縫ひ幾つかの隧道をくゞつて湯檜曾へ、走去つた汽車の汽笛の餘韻が耳を去らない。

湯檜曾川の流れを見つめてゐると何んだか取殘された樣な氣持、週末列車の割引を買損なつた二人桂ちやんに安さんを待て黃昏の路を土合の山の家へ行く五月蠅程蛙が鳴てゐるこんなに鳴ては俳諧師も歌に讀めない俳諧師等は蛙さへ見れは歌を讀みたがるものだが。一時間の後丁寧なお迎を受けて山の家へ着いたお風呂から上つて靜な室で食べる御飯はおいしいカツにキャベツにお吸物相當なもんだ、九時頃月のない夜道を歩

清水敦

て青い顔をした高橋さんが來た途中で知合のお化に合つた樣な事を云ひ乍らどうも螢とお化を間違へたらしい。

更けてゆく山の夜に話がはづむ十時を過ぎてから明日の爲に寢に付く鋭い警笛を鳴らして汽車がすぎると後は妙に靜まり返つて空氣の重みが不思議な力で瞼を押へ快い眠りに引づつてゆく。

烈しい北風に追まくられた谷の雲が逃げ場を失つて切立た岩壁にぶつかるとそのまゝ上へ上へと昇つてゆく。

北方に湧いた灰色の雲は惡魔の樣に形を變へ乍ら異常な速さで南へ飛んだ風は岩をたゝき砂利を飛して荒れに荒る。頂上に近く不意に起つた嵐に皆降口を探して懸命だつた。自分は何處とも知らず唯駈け下りてゐた、何時の間にかはぐれた友、砂利は容赦なく目を口をかすめて過ぎる。

瞬間山が搖れた山頂が消飛び雲を湧せた谷底がすごい速さで迫つてくる山々が烈しく廻轉した途端に場面が變つてなあんだ夢か。

安さんの朗かな笑聲、馬鹿にしてやがら

朝——雲雀でも鳴かせたい樣ない〻天氣

うまいね飯が、安さん先きから卵を持つたまゝもぢ〳〵してゐる。「何してんの」「うん割れないんだ」「そんな堅い卵があるもんか」千仞の谷底を見下してもびくともしない安さんも鷄の卵を一つ持て餘してゐる可愛い〻ね、六時山の家出發　二三度來た事のある高橋重ちやんが通人ぶつて案内役のつもり。

「この尾根へ取付きやい〻んだ」とおかしな處へ這入り込んでゆく何んだか變だねと磁石を振つてみると益々おかしい下の方で他の登山者の話聲や水の流れる音が聞へる。

「あれだよ西黑澤は」劈頭三十分餘の損をした。

それからは愼重に地圖を見て西黑澤の淸流に沿ひ右岸に左岸に道を變へて進む。

朝の日さしを背に受けて風のない谷間麓はまだ春だつた。强いねばりをみせて調子のい〻足　蛇門の瀧

へきた時突然右岸の繁みをがさつかせて澤を飛越へた奴がある。

茶色の毛波、ちらとこちらを振向て又繁みにかくれた小柄ながら引締つた體苦走つた一癖あり氣な面魂凄い狗だ。

「すごい奴だね」丸木橋を渡つて寫眞をとつてゐる間に狗はみえなくなつた。

足にまかせて進んでゆく內やがて澤から水が消えた消えたと云つてなくなつた譯ではない雪が澤一杯埋めてゐるのだ、雪の道はずーと上迄續いてゐる西黑澤の源迄、さつきの狗が雪溪の上を面白さうに駈けてゆくちつとも草臥ないらしい四足は便利なものだ。

展望が次第に開けて目指す谷川の肩のあたりが現れてきた殘雪が鏡の樣に光てゐる。

西黑澤と別れて右へ折れる。此處からマチガ澤との間の尾根へ出るには道らしい道はない涸澤をつめて唯馬車馬式に登ればい〻のだ一寸至佛の岩場を思せる急傾斜の岩場だが體全體が疲れる頃尾根へ踊出る。

澤から尾根へ途端に視野は開けて限りない山々の莊嚴さに思はず目を見張る。

鋸のやうな岩壁の向には、大源太・七ツ小屋・淸水・笠・朝日の諸山から牛ケ岳大水上山等峻嚴を誇る上越利根水源の山々が遠く近く嶮を競つて聳えてゐるのだその殘雪の山々の間を縫つて南へ走る湯檜曾川の水晶を引延した樣な流れ。

振顧れば利根を隔てゝ想出の山密林と岩場の武尊連山が雄大な山容を落着せて雄然と控へてゐる。武尊と左に走る奥上州の山々は自分には懷しい姿で過ぎた日の張切つた氣分を思ひ起して吳れる至佛のガレの向に燧の麓には、天國の樣な尾瀨が美しい山々に包まれてゐるのだらう。忘れられぬ尾瀨沼の夕映お花畠が目に映る。

擔ぎ直したリュックの重みが快よく肩へ喰込むのを感じ乍らかなり急峻な瘦尾根を登る。

その頃尾根へ取付た時の無理がきて腹の虫が暴れだし、胃の腑は大狼狽だ。頂上を待ち切れず終に辨當を

取出す。包紙を開いてぐいと唾を飲込だ時の氣持何とも云へないね。無理に半分殘して立上る低い熊笹を分けて少し進むと烈しい急斜面の大きな雪溪にぶつかつた。

どうやら道がついてゐるので苦もなく渡れるが馬鹿にし過ぎた安さんがアイゼンを履いたまゝ轉つて辷り出したのは見物だつた。雪はかなり深い一丈位はあるだらう。但し吹溜りを計れば……雪溪を渡れば頂上は近い間もなく萬太郎からの尾根、天神峠からの尾根とぶつかつて頂上へ丁度正午。

足下に淡い雲が湧いた純白なのんびりした奴だ其の直ぐ下に萬太郎谷が透いてみえる。

お天道樣が眞上から直射して風で乾きかけた汗が背のあたりで迷つてゐる。

晴れ渡つた綠の空は幾つかの山波を越へてやがて霞の彼方に日本海に續いてゐる。同じ大空の下に尨大な苗場が目を引く、左手には國境の山、仙之倉萬太郎の峻峰が我々に劣らぬ威容を見せて小氣味よい尾根を連ねてゐる。

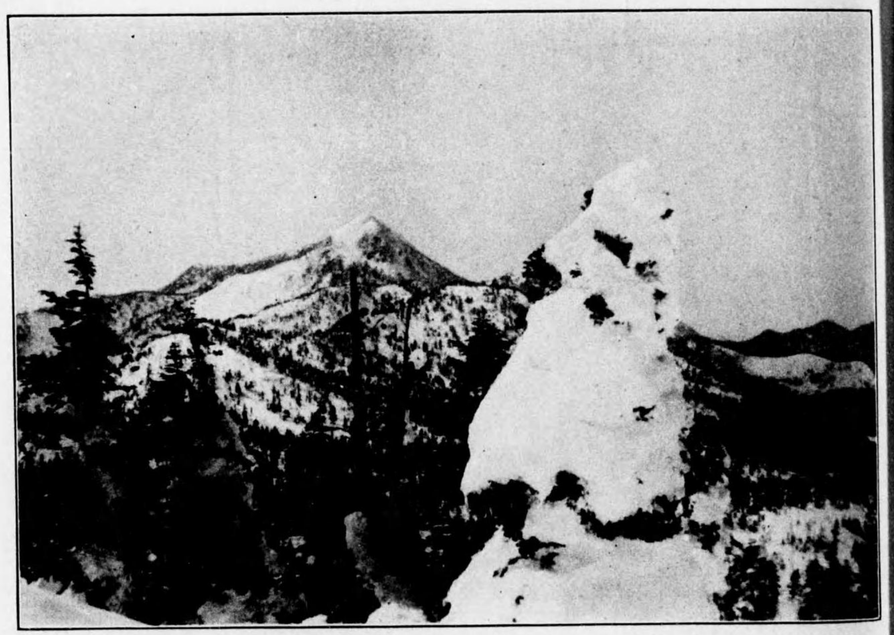
分岐點迄降りて二度目の飯を開く「クン〳〵」おかしな鼻聲に驚いて振向くと忘れてゐたさつきの狗がすぐ後に居てたつた一つの大事な爆烈彈（おむすび）を欲しさうに眺めてゐた。

可愛さうになつて少し分けてやつたならそのまゝおとなしく向へ行つたが直ぐ他の登山者にたかつてゐるなれてやがら：恐らくこの狗は登山者を目宛に晝時を見計つて毎日谷川岳へ登つてくるのだらう。生きてゆくのに手はあるもんだ。

安さんと二人で一ノ倉を覗いて歸つてくると殘つてゐた二人が嬉しさうに轉ずり乍ら體の雪を落してゐたスキーを借りて辷つたのださうだ、默つてゐるがやたら轉がつたらしい。

一時半頂上を出發して歸路を谷川溫泉へとる、天神峠へ下るには先づ急峻な雪溪を越さねばならなかつた。

直滑降の姿勢で勇敢に辷り出した桂ちやんに重ちやんが雪溪の途中で尻餅をついたと見る間に猛烈な勢で



川野蒲一郎

笠ケ岳

轉りだした縁く安さんも御丁寧に二人の眞似をしてこれも途中で尻餅をつくと雪崩の樣に轉つてゆく雪溪が切れて地肌の現れてゐる處も過ぎて熊笹の鍼の繁みの方へ何んのこつた三人が三人共手足をばた〳〵もがかせてゐるのだ。登山家の魂ピツケルをむなしく空に振り乍ら

この雪溪は中半から急に傾斜が烈しくなつてゐるのだ。三人を笑ひ乍らい〻氣持で降り出した時どうした事か體をおいて足だけ先に行つてしまつた。

途端に遠く見えてゐた赤城山が裾をみだして大空に踊上ると同時に自分の體が解けかけた雪の表面にた〻きつけられ冷い水が首筋をくすぐり風が耳元でうなるのを感じた。

氣がついてみるとまだ辷つてゐる止らうたつて止らないんだから仕方がない熊笹の近くでやつと立ち上つた。泥だらけになつた四人顏を見合せて大笑ひだつた

だけどい〻ねこの天然の辷臺は天氣はい〻し實に何んとも云へない氣分だ、負けおしみぢやないよ雪溪の下は雪解けの水が一面に流れて嘲るやうに輝てゐる。

西黑澤から湯檜曾川にそしてやがて太平洋に流れ込むだらう綺麗な水が、

それから下る一方西黑澤とヒツゴ澤との分水嶺を足にまかせて下る。

天神峠からみた谷川岳の斜陽を受けた堂々たる姿は何時迄も印象に殘る事だらう。さつき轉つた雪溪の上を數人の人が下つてゐる　蟻の樣な黑點がそろ〳〵動いてゐる。餘程用心してゐるらしく僕等の期待に背いてとう〳〵轉らずに下へおりてしまつた。

寫眞等撮寫して十五分位休んでから最後の途を下る

道はもろに急になつて岩角や木につかまり乍らぐん〳〵下る下りの道は兎角長いものだ登りの長かつたのを忘れてゐるのと登る時の樣な强いねばりを失つてゐるから。

ゆつくり行かうにも無理に走らされる程の急な道、爪先の痛みをしかめ面し乍ら我慢してゐる皆もさうなんだらう。不機嫌に默り込んで口も聞かない。天神峠

から二時間餘りの苦闘の後やがて木の間に屋根が見えて定例の様に神社の前へ出る。

これで終りかと思うと何だか心殘がする參拜をすませてから疲れた體を谷川の流れ迄引づれば橋を渡つて直ぐ近くに氣持のいゝ溫泉をたゝえた野天風呂が待つてゐる。一日の疲れと汗を流して考へるともなく一日の印象を思起す愉快さ。

山々の東側はかすかに暗く夕の影がかすめてゐる。

我にもなく水邊に鳴く蛙の聲に耳を傾た時のあの氣持、それも已に一年前の想出である。

殘雪の谷川岳や上越一體の山々の限りない魅力は山を知る者を引付けづには置かぬだらう。

最近鐵道省で試みてゐる週末列車の割引を利用すれば費用も辨當菓子代を入れても五圓は出まい。

高度こそそう高くはないが急峻な岩場やあたりの風景は有に高山氣分を味せて呉れる。

初夏の一日の山歩きに好適な谷川を奬めたい。

行かうよ山へ——濃綠の夏山は招く——

（若し諸君谷川岳へ登つたら一飯の義理で
疲れた僕等を水上の驛迄送つて呉れた
小柄な精悍な狗に合うかも知れない
そしたら僕が禮を云つてたと宜敷傳へて
呉れ給へ）

參考記錄

	時間
上野發	午後 一・五五
湯檜曾着	〃 六・三一
山之家着	〃 七・一〇
出發	午前 六・〇〇
マチガ澤ト間ノ尾根	〃 一〇・〇〇
頂上	〇・〇〇
天神峠	午後 三・〇〇
谷川溫泉	〃 五・三〇
水上發	〃 七・〇四
上野着	〃 一〇・四四

費用

上野——湯檜曾　往復
三・三〇　但シ週末溫泉列車

山ノ家宿泊料
一・〇〇　二食辨當付

一ノ倉澤の印象

高橋重吉

一ノ倉澤——奥利根の支流、湯檜曾川水源の一つで大岩壁を有する谷だ。

初めて其の偉容に接したのは、或年の二月の數日をスキー練習の爲土合に過した時だつた。白樺ヒュッテに向ふべく湯檜曾川の右岸をスキーを滑らして行くと紺碧の空に物悽く屹立した大岩壁が現れ初めた。谷川岳東面の岩壁である。幽の澤の奥に屹つ一ノ倉岳の岩峰一ノ倉澤の素晴らしい壁は全く想像も許さなかつた程立派なものであつた。

其年の秋であつたか烈風と猛雨の中を谷川岳から茂倉岳、蓬峠へと縱走した事があつた。越後側に於て石楠花の群落するゆるい斜面をもつオキの耳と一ノ倉岳との間の岩根尾は上州側は恐しい程の絶壁をなして居る一ノ倉澤本谷の源頭なのだ。所謂「ノゾキ」から覗いて見たが霧が深く立ちこめ底をも知れぬ深さを感じさせるのみにいさゝか失望させられた。

其翌年の六月薄黑い雪溪のまだ殘つて居る西黑澤から谷川岳に登り天神峠へと降つた。此時は日本晴の好天氣に惠まれ、一ノ倉岳の巨大な鋸齒狀の岩尾根に飽く事なく眺めいつたものだ。

寶川溯行に成功し笠ケ岳の頂から、湯檜曾川の深い谷をへだてゝ一ノ倉澤の全容を直ぐ目の前に眺めた時

は此澤に對する私の思ひといふものはもう矢も楯も堪らない程であつた。

こうして此一二年は遠くから、或は近くからたゞ憧れの目を以て眺めて居るばかりだつた。

岩に對する未經驗は私をして容易に近づけようとしなかつたのです。

が、幸ひ寶川溯行の翌月の十月、機會を得て東京登歩溪流會の例會「一ノ倉澤生活」に參加する事が出來た。此時は三日間の豫定で土合の山の家を根據地とした。

谷川岳へ登るらしい他の數組のパーテーと共に臨時停車の土合へ降り立つた時はまだ暗く、夜明けまでには大分間があつたので、其間に山の家で味噌汁と持參の握飯で朝飯を濟ます。夜は大分明けて來たがどうも天候が思はしくない。

何度か通ひなれた湯檜曾河畔の小徑は落葉に埋もれ樹々は紅に彩られて懐しげに我々を迎へてくれる。何時だつたか山から降つて來て此の小徑の木蔭から山葡萄の一房を見出し口にした時のうまさは未だに忘れられない。

石のごろ〳〵した一ノ倉澤の出合に着いた時はもう夜はすつかり明けきつてゐたが太陽は其姿を見せやうともしない。

冬ならば其の石の堆積は雪におほはれ、春は水勢綽々として流れて居る此澤も今は水量少く、伏流となつて處々に音もなく其流を見せて居る。

此處から今は廢道となつて居る清水街道附近までは石のごろ〳〵したいやな道だ。此途中でマチガ澤と間違へて入つて來たといふ天幕をかついだ連中と逢ふ。何處かの學生らしい。

一ノ澤を過ぎると間もなく瀧に出逢ふ。此瀧は左にとりつけばよいのだが右手に登つてしまつた爲、一たん瀧の上に降りて右岸に移る。其爲大分時間を空費してしまつた。此からは谷が狹く深くなり右岸の草付きをトラヴアースして行く。滑りやすく手懸りの不確實な草付きは相當緊張させられる。草付きが盡き兩岸の

迫つた處を、右岸の岩にへばり付きやつとの思ひで拔けると眼界は一時に開け素晴らしい岩の殿堂が展開される。

右手には穗高の屏風岩を思はせる樣な烏帽子岩が屹えて居る。一ノ倉岳から東南方へ派出されたバットレスだ。

何かの山の雜誌に「バットレスは彼女の胸板。それに取付く事の出來ない山男に彼女との幸福の感激を味ふ事は出來ない。」といふ文句が書いてあつたのをふと思ひ出して微笑えましい氣持になつた。

左手には末登攀の瀧澤が何者の近附くのをもこばむが如く垂直の壁を見せて居る。(今年此の瀧澤も成溪慈惠兩校の高木兄弟によつて初登攀がなされた。然し完全にではないらしい)

一ノ倉岳から谷川岳に連なる國境線は深い霧のベールに隔てられ致底見る事は許されない。

振りかへり見れば先月登つた笠ケ岳が錦の衣をまとひ美しい姿を見せて居る。

二ノ澤の出合ひで二人の山男がアンザイレンして降りて來るのに逢ふ。見れば去年、乘鞍スキー講習會の時一諸になつた人達だ。世の中なんて廣い樣で狹いものだ。と云つても山男同士が山でめぐり逢ふのならたいして不思議な話でもない。

此邊りへ來ると十月といふに尙殘雪が兩岸の狹まつた岩間に殘つて居る。此先に相當な瀧があるので右岸を高く卷いて瀧の上に出、左岸に移る。深い瀧壺をのぞきながら水量こそ少けれ滑らかなスラブに流れる水を徒渉するのは餘り氣持が良いものではなかつた。

前面は廣いスラブの擴がりだ、ホールドの確實な快適な登りに愉快な一時がつゞく。

ちよいと足を滑らすと胸のザイルがビンと心よい感觸を傳へる。スラブを登りきるとルンゼ入口のテラスに達する。一ノ倉澤本谷は此の上方でクーロアール狀に右曲して居る。ザイルを解きリュックを降してのび〳〵した氣持になり、時計を見ると、もはや二時だ。雨も時々ぽつ〳〵とやつて來る。

これからが一ノ倉澤の眞價が發揮されるのだが、まだ明日明後日もあるのだ。しばしの憩ひの後土合へ引返す事にする。先程からの雨に岩が濡れて登りよりも餘程不安を感じる。岩を落すとごろん〳〵と深い谷から谷に反響して下の釜にドボンと落ちる。コリント・ゲームだなんて興じ乍ら降る。

二ノ澤出合から下流の草付きの惡場をトラヴアースして居た時、手懸りにして居た岩がつツと浮いて、友のちゞめた首をかすめて落ちて行つた。ほんの一瞬の差でアクシデントからまぬかれる事が出來たが、一時はちよつと吃驚させられた。

舊道附近に出た頃黄昏は山や谷を訪れて其幕を下した。森林帶へ入つた時は眞暗になつてしまひ、湯檜曾河畔までは手探り足探りで夢中で降る。土合の小屋の灯が見えた時は思はずホッとした。

其翌る日は雨で、憂鬱な一日を土合で過す。其次の朝も降り續き、風さへ加つて湯檜曾川は濁流と化し、水勢物悽く綽々と流れて居る。すつかりくさつて湯檜曾に降り本家旅館でのびてしまふ。

惠ぐまれなかつた山行に心殘し乍ら車中の人となれば、皮肉にも上越の山々は殘りなく晴れ渡り、谷川岳が魅力ある姿を見せて居た。

（追記）其の後、何回か一ノ倉澤から頂へと志たがいつも天候に惠まれず、コースの變更、或は中止の止むなきに至つた。其の中に日本登高會の中村、宮北兩君が瀧澤の完登を行はんとして、其の若き生命を失はれた。私の山の畏友、山口清秀氏は瀧澤を狙ふと題して次の樣な事を書いて居られる。

「昨秋十月の事、猪武者の弟が雨天にも拘らず一の倉に入り瀧澤正面岩壁を單獨で右手よりアタックした途中に於て二度も轉落、頭、顏、手、足と云はず全身傷だらけとなつて遂に斷念、辛じて本谷右尾根にとりついて國境尾根に出た。その時歸つて一週間餘り床について二度と再び一の倉には入らないと、うわ言の樣に唸つて居たが、傷癒えた昨今はもう一度やるんだと力んで居る。之が未登攀の岩壁に對する弟

の熱情であると思ふ。

否若き生命に燃えるアルピニストの一樣に牽き入れられる魅力なんだ。處女登攀なるが故に生命をかけてアタツクするのだ。この瀧澤完登の榮冠に誘はれて登高會中村宮北兩君は痛しくも忽然と山に逝つたのであらう。その眞摯なる熱情が彼等をして瀧澤に逝かしめたのであらう。私も瀧澤の魅力に魅せられた一人だ、若い山仲間の死を意義あらしめる爲にも此の夏には斷然頑張るぞ。」

瀧澤！　それは現在各山岳會のエキスパートの注目の的となつて居る。其の完登が何人によつてなされるか興味ある問題だ。我々にとつて瀧澤は到底企てられるべくもないが、一ノ倉澤に於ける瀧澤以外の何のルートも、興味あるものである。だが相當な困難は覺悟せねばならない。困難なるが故其の憧れは一入、强く私に迫つて來る。そして私も山に青春の熱情を捧げる一人なのだ。

「あゝ、この青春の熱情と努力とあこがれをこめたる山登りですら、つひに老ひては昨日の遊技のひとつのみであるのだらうか。」

大島亮吉

愛鷹の殘雪ふんで

宮氏保

小金澤へ行く計畫を中止して急に愛鷹山へ行く氣になつた愛鷹山へはかねてから行きたいと思つて居た憧れの山である。秀嶺富士の裾野をからんで長く南へ伸びた素晴しい尾根を見る毎に。——

四月一日いよ〳〵清水敦君と二人で出かける事になつた。雨のふる東京驛を出て御殿場驛からハイヤーで

須山村へのりこんだ。雨はなほしげく二人の心を憂鬱にさせて行く、せめて明日の天氣をと願つて居る二人だつた。その願ひがかなつてだん〳〵と雨は小降りとなり夕方から雨もやみ美しい富士が白雪の肌を見せるとても素晴しいので同行の清水君と二人ですつかり見とれてしまつた。宿屋の主人がこんな事を言つて居た。

『富士山は見る山だに　愛鷹山はのぼつておもしれえ
山だ　ふんとによ。』

夜はまだ明日の天氣を氣にかけながらも早くねてしまつた。

（四月二日）

薄らさむい山の朝。起きて窓を開けると快晴であるので「おゝ惠まれた我々」と心の中で叫んだがしかしこの事はうまく適中しなかつた。なぜならば午後から雪にさへ降られた我々だつたから――。

窓から體をのり出して愛鷹の連山をのぞかうとした時、足をすべらして危ふく宿屋の二階から遭難して仕舞ふ所だつた。身仕度をして出發したのが六時十五分である。富士を見上げながら黒岳と越前岳の鞍部へ入り込む。大澤の道（地圖の十里木道）をつきすゝむ。やがて人家ともはなれて、大澤（地圖に記號あり水なき涸澤）の出會に着いたのが丁度七時である。

これよりこの大澤を道は右に越し左に越して雨上りの凸凹な山道らしい道となる黒岳を右手に見ながら進むと間もなく大澤の頭となる鋸岳の難所としられた三枚齒の尾根が見えはじめた。しばらくすると道は右縱走路越前岳鋸岳、左横斷路鋸岳位牌岳の道標にぶつかる。（大澤との分岐點として我々は右の道に入り込んだ七時十五分）之よりいよ〳〵勾配はぐん〳〵と増して來るすゝきの野道の樣な道ではあるが辛い思ひをしながら足高莊の水場についたのが八時である。この附近より殘雪がしきりと現れて足が滑べるので危險であつた。

谷を越へて向ふ側の痩せ尾根に取りついたのはいゝが、雪がふりつもつて居てその上道が眞直について居るので登るのに骨がおれる事一通りでない。だんだんと登る中、山鳥の足跡か可愛らしい矢印しが我々の進むべき行先を示す如くに道の上に記されてあつた。大野野原をふりかへるとかすか窓の樣な雲の間に黄色く、明るく、ひろびろとして見えるが又時々演習のためか大砲の音が山全體にこだまして聞えて來る。みにくいものすごい肌を現した斷崖の惡澤ガレンについたのが九時十分丁度その頃から霧がだん〳〵と卷き出て天候はだん〳〵と惡くなりかけて來る。鋸岳や位牌岳など濃霧の中から時々思出した樣に凍えついた顏をのぞかして居た。

富士見臺（地圖には記號がないが越前岳から東へ下る黒岳へ伸びる尾根の百米程下つた一千四百米の地點あたり）通過九時三十分僕は相當すでにグロッキーになりかけてしまつたが最後のがんばりと雪をほゝばりながらやつとこ千秋の思ひの越前岳頂上に着いたのが九時五十分であつた。

第一回の朝食をすまして居る頃から雪がつめたい風と一諸に濃霧の中から我々に吹きつけるのだつた。邊りは森閑として氣味惡く二人だけなので幾分かは心細い氣がしたが、「何をッ」と思ひながら元氣よく出發したのが十時ジャスト。道は南へと程よい下りを見せながらどん〳〵續いて行く。下り切つて少しのぼりついた所が呼子岳である。呼子岳のとつつきで又殘雪に足をとられて大難儀をした。（十時四十分）頂上より道はやゝ東へ向つて下るのである。

しばらく下ると鞍部に出るここが屏風岩と言つて右手に、苔蒸した岩壁がそびえ立つて居る。三峠山の屏風岩に比らべると幾分感じが違ふがまあ斷崖とも言はれる程の岩壁である。（十一時）そのすぐ頭といふ所が廣くなつて居て「天狗畑」の標柱が立てられて居る。蓬萊山をすぎるといよ〳〵難所といはれる三枚齒がその痩岩の頭をつき出して居る。殘雪があるので手のつかみ所及足場を探すのに注意をしないと危險だ。迂回路の立札が倒されてあつたがその迂回路が、殘雪のため不明でとりあへず眞直ぐ登ることにする。昨夜宿屋のお内儀さんが言つた。通迂回をすれば女だつて何んでも

ないとの事だけどその道がないのでついに岩登を始めてしまつた。

おそらくその迂回路はずつと谷へ下りて三枚齒をめぐるのだらうと思ふ。

右は熊谷噴火口跡で聞く所によると斷崖實に五百米にも及ぶとの事、今は噴火口の跡もなく谷の底まで草木に覆はれて居るのである。その斷崖もすごいが左側の澤もぐんと急に下ち込んで居てやはり急崖となつて身ぶるいするほどである。大澤の支流とも言ふべき無名澤であるが、かつて靜岡商業の松永敏男君が遭難された個所にして今ではその松永君の靈、安かれと因んでその澤を松永澤と呼ばれて居る。おひかぶさる老木の中を澤は殘雪にうずもれながら霧の中にその急勾配を示して居る。三枚齒から割石峠へ下る最後の岩場で先に下りた清水君が木の根にぶらさがつたまゝ足場がないので困つて居た。その中にだん〳〵と手が太つてくるなんて言ふので思ひきり手を離すと、ずる〳〵と足場にありついたが、背負つて居たリュックの中から紅茶の罐が小氣味よい音をたてながら松永澤の斷崖から轉げて落ちて居つた。二人は顏を見合せて又松永澤を殘念さうにのぞき込んだ。

割石峠でいよ〳〵殘雪が增してくるので二人共カンヂキ(四本爪)をつける。少しでも休むと寒くなり手がすぐにかじかんでしまふ。間もなく親不知といふ難所にぶつかる。(十二時三十分)ここには迂回すべき道がないので何人も越えなければならないのである。疊半疊位の斜めに横はる岩の上を這ふ樣にして行きすぎる霧はいよいよ深く雪は風を交へて吹きつけてくる。幾分二人だけの事故心細くなつてくる。

腹がすいて我慢出來ないので位牌岳まで行かない百米位下の所で第二回の飯にする。卅分費した。

又いよいよ登高である。位牌岳の附近は殘雪一尺はたしかにある。氷菓子の樣に凍えついた雪の道人の足跡はおろか動物の足跡すらない森閑とした頂上附近には、おひ繁る老木の間からまだ雪がふりつける風が吠えて居る。霧は不氣味に邊りに取卷いてくる。

頂上についたのが二時四十分である。

頂上には吹きさらしでまわりの圍ひはないが小屋が殘つて居る。

森林深く眺望は晴れて居る時であつてもきかない事だらう。それだけ山の深さを味ふ事も出來るのかもしれない。雪が降りやまないのでなつかしさをふり切つて最後の愛鷹山へ向つて直ちに出發した。

勿論途中としても眺望すらきかない深い單調な山道である。道は程よい下りを見せながらなが〳〵と續いて居る。いゝ山道だなあと思ひながら二人は別に話す事もなくどん〳〵進んで行く。ガスは以前取卷いて離れてはくれない。しかし殘雪はこの頃からだん〳〵と少くなつて行く事に氣がつく。道は次第と南へ走り海へだん〳〵と近寄つて行く事を明らかにして居る。

水神社への分岐點に到着したのが(三時十五分)

水神社とは何やら僕には分らないが、土地の人達はこの愛鷹山の水神さんと言ふと大低知つて居る。

靜かな山の中で友と二人きりで、心ゆくばかり自然の愛につゝまれて落着いた人生の一面といふものを見出した事はうれしく思つた。「都會人よ山を愛せよ。」と叫びたくなる。淋しい程靜かな山道が永く〳〵續いて居た。卅分もたつた頃道は東へ下るのと南西へ走る道とに別れる。右の道は直接須津村に下る道で、左が我々の進むべき愛鷹山への道である。しばらく進んで行く熊笹のおひ茂る廣場へ出る。これが「馬場の平」である。やゝともすると見逃がしさうなかすかなふみ跡である。濃霧にでも出會つたならば餘程の注意を拂はないと完全に熊笹の中に道を失つて仕舞ふ事だらう。熊笹はだん〳〵と背高くなり、ついには身の丈を越してしまふ程になる。雨にぬれてか道はつる〳〵と滑る。急坂をかける樣にして下りた所が愛鷹山との鞍部である

いよ〳〵これから最後の登高が始る。さほど苦しい程ではなくやはり熊笹の間をジクザクに登る。一汗かくと目の前に巨大なやぐらがそびえたつて居る。

タイムを見ると四時四十分である。立派なそしてなつかしい(本當に山へ登つて三角點のやぐらがそびえ

立つて居るのを見ると心の底からなつかしさが湧出てくるのだ）やぐらを見上ながらいよいよこれで今日の縱走を終えたのかと思ふとうれしい樣な氣拔けした樣な言ひしれない淋しい氣分におそはれてしまふ。

眺望は晴れて居ればいゝ事だらうが運惡く霧に卷かれて全然といつてもいゝ位きかなかつた事は殘念といへば殘念であつた。しかし今日の山旅もたつた二人きりでしかも雪のふる靜かな愛鷹連山を越える事の出來た事は心から愉快であると思つた。あまり寒いのでたき火でもしなければと準備するが幾度火をつけても消えて仕舞ふので、アルコールのコンロで湯を沸し砂糖を入れて呑んだ味は忘れる事の出來ないものだつた。丁度一時間の後に最後の別れを惜しみながら頂上を離れた。道はなだらかにかすかに〳〵に走つて居る。幾筋も道があるから氣をつけないと下へ降つてから損をすることがある。幾分左寄の道をとつて行けば大丈夫であらう。青野村方面へ下りることが出來れば絶好であらう。

至佛の頂上から尾瀨ケ原へ下るあの廣大さをこゝで又味ふ事が出來る。相模灘がかすんで見える。

まだ半分も下りない頃雨はぽつり〳〵とやつて來たみぞれの樣なやつが、その頃ふもとの村町には點々と灯がともされ山も段々と日暮れて行つた。

思ひたつた樣にふと後をふりむくとすでに山は黑くかすかにしか見えなくなつて居るのだつた。この地方の大きな都會である沼津の灯は赤いネオンサインが取り交つて不夜城とも言はうか、すばらしい美しい有樣であつた。

愛鷹山よではさよならさよならと心の中で叫びながらかけ下りて又ふりむく僕等だつた。勿論眞暗な空には山の姿すら見えないがそれに應じてくれる山の聲がする樣な氣がする。名殘惜しい愛鷹よ、僕は又きつとくるよ——細い懐中電燈の光をあてにとぼ〳〵と二人が山麓の青野村の民家へ宿めて貰ふべくたどりついたのが八時丁度だつた。

〔一九三四・五・十五稿〕

伊 驛 桂 三 郎

黄 岳

陣馬行

堀貞一

景信、陣馬山行きを思ひたつたのは八月末のある土曜日暑さも盛りの去年のことである。同僚高橋君と汽車を上野原驛にすてた。

○

その昔、甲州街道が東西をつなぐ重要な役割を持つてゐた頃の名におふ宿場町上野原は驛から三町ほど離れた高原にあつた。それは全く高原の上に立つ廢驛で、人家もどことなく色あせ町を貫く本通りといつても閑靜なもので人影もなく二三丁彼方まで見透せるといつた調子。活動常設館が一軒あつても興業中とはみられぬさびれ方で、たゞ旗幟が二三旒立てられてあるのでそれと知られる位である。

和田の部落で今夜は泊る豫定なのだが夏のことゝて日沒にも間があるので、とある丘陵を越へて澤井へ出ることにきめてリュックを背負ひ直した。

行くほどに路はいつしか山にかゝり、上野原の町も丘の彼方に沒して桂川を挾んだ盆地の遙か彼方には御坂丹澤の山脈が蒼然とした姿を薄靄につゝんで横たわつてゐるのである。間もなく丘陵の頂に達し、これから一氣に澤井までの道をかけ降りた。

溪流に沿つて散在する澤井の部落は柿の木の多いところであつた。まだ綠の青葉をつけた柿の木は農家の庭にも道傍にも繁つてゐて、その間を清い河床をもつた溪流がそう〳〵と流れて行く。

澤井から和田までの道も山に圍まれた好ましい道であつて、處々岩清水も湧き人家もその間に點在する。

○津久井郡佐野川村(和田)

上野原を去つて二里。道はいよ〳〵高きに登りきこ

えてゐた溪流の音も足下遠くに離れて黄昏時特有の藍色の靄がいつか山峡から湧いて遠近を胡粉色に塗りつぶして行く頃、どうやら和田部落のはづれまで來たらしい。

路の邊に佇む二人の村娘を見出したが暫く行くとまた三人、いづれも派手な浴衣に黄色の帶といつた山村にはめづらしい娘達の風俗であるのを多少いぶかしく思ひ乍ら行くうちに間もなく山あひにひゞく太鼓を耳にしたので、なる程とうなづき、村祭の日に來たなどとは我々も中々惠まれてゐるなどと同行高橋君と語つたのだつた。

○

村人に教えられた清水といふ宿屋を訪ねてみると住人ももとのまゝで二年前までは、成程宿屋もしてゐたが今ではやめてゐるといふし、今宵一夜だけと頼んでみても御覽の通り子供が多いのでどうも……といふ挨拶にすつかり弱り切つてしまつた我々だつた。丁度そこに居合はせた此家の主人の姪なる女が、それではお構ひは出來ませんがお泊り位ならば……と清水の分家の方へ案内してくれることになつた。

子供を背負つて先に立つて歩むその女は、今日から三日間がこの村の祭りですと説明してくれた。成る程部落のそこ〻に縁臺を持ち出して多くの若者が集つてをり、なまじリュックなど負つてゐる我々の姿を好奇の眼で見るのでこれには尠からずてれたのである。

○

清水家は農家としてもかなり大きな家であつた。疊をとり除けば養蠶場となるものだけにかなり廣く間取つてある。風呂がないからといふので表の流れで身體を拭いて歸つて來ると田舍饅頭が皿にもられてある。こゝではあまり砂糖を使はないからお口には合ひますまいとの主婦の言葉通り粗末なものだつたがなによりも田園の夜がうれしかつた。耳をすませば清水のせゝらく音もきこえてくるし緣に出れば山氣をおびた冷風が惜し氣もなく吹いてくる。

先程この家へ案内してくれたひとがまもなく運んで

くれた膳部をみると芋だとか干瓢などの煮物ばかりだつたそれでも今夜のお客様への精一杯の御馳走なのであらう。粗食をしながらも健康である農人達のことを考え、大地を踏む生活の如何に重要であるかについて語り合つたのだつた。

○

この家の主人夫婦は五十代で五人の子持。長女は良人に死別し、四つになる子供を連れて實家へ歸つてきてゐるのだがそれが先程我々をこゝまで案内してくれた人である。その下は我々と同年輩の息子二人。次が十七位の娘、「これが一番末つ子であります」と主婦は十歳位の惡戯つ兒らしい男の子の頭を抑えて言つた。

それから暫く四方山の話が續いた。以下農人の言葉を談話體〻口語文に直してみる。

○主人の話

「農閑期には銃をたづさえて山へ行き一週間も十日も歸らぬことがありますが、本業としては養蠶でありまして自家用の野菜位は畠で作ります。

「これがもう暫く前ですと養蠶の方が忙しくてとてもお泊めすることなど出來ませんでした。この家ばかりではなく、その時期には全村が忙しいのですから山上へでも泊るより仕方ないでせう。……

「貴方達が先程お出でになりました清水の本家はもと宿屋をして居りましたが病人の旅行者が來ても氣味わるい客がありましても商賣ならば斷る事もならず、それに一人しかお泊めしない時でも客のある毎に翌朝は必ず上野原の警察まで屆け出ねばならず、それやこれやの面倒から二年程前にやめてしまつたのであります。なんといつてもこのあたりは不便な地で、まあ上野原まで行けば活動もあり料理屋もありますので、若い者は何かにつけ上野原へ行きますが町までは何をいつても二里の道。それにこの邊は蝮がゐますのでうつかり夜歩きも出來ません。ついせんだつても隣家の娘さんが町からの歸り途、蝮に足を嚙まれ大騒ぎをしましたが貴方達もようお氣をつけて下さい。

「お祭りは今日から三日間であります。あすが本祭り

なので、あすの晩には遠國へ働きに出てゐる者も皆歸つてくる筈であります。この村からはずゐ分多ぜい他國へ出てをり東京へ行つてゐる者も少くはありませんが、村祭りには皆歸つてくる習慣になつて居りまして祭がすむとまた散らばらに出て行くのであります。娘達は大概は八王子の製絲工場へ出てをりますが、やはり町の方がいゝとみえて年に一度の祭りにも歸つて來ない者が近年は追々とふえて行くやうであります」

かうした農人の物語は、勿論とぎれ〳〵に鈍重にそして多分の方言をまぢえて語られたのであつた。傍に座り込んだ主婦は孫を膝に抱いて、話にきゝ入りながら時々相槌をうち、側の娘を顧みながらいまの者と自分達の若い頃の考え方の變つて來たことを喞つのである。

○主婦の話

「それは田舍はにぎやかではありませんし、大した金儲けも出來ぬのはほんとうです。併し乍らそれでも食べる位のものはうちの畠でもとれるし養蠶からの收入もありますので、うちに居ればものに不自由するといふ事だけはありませんのにこの節の若い者はみんな東京へ出たがつて困ります。どこどこのひとが東京へ行つたなどときくとこの娘など二三日といふものそれはもう行きたがりましてしまひには父親に怒鳴られるといふ仕末なのであります。わたくしもうへの娘のお產のとき二月ほど東京へ行つてをりましたが、外へ出るとたゞもうせわしいばかりなので家にばかり居りました。働き口もたくさんにはなく、あんなに氣せわしい都へどうしてそんなにまで出たいものであるのか、ほんとうに分り兼ねますけれどそれが今の人達のほんとうののぞみなのでありませう。」

間もなく息子達も祭りの夜のことなのでみんな出掛けてしまつたあと、この家の主婦だけが後に殘り私達をもてなしてくれた。

○その主婦の話の續き

「子供達の前であゝいふ風に言つては居りますが、どうぞ惡くお思ひにならないで下さい。前申しました通

な若者を容れるにはこの村の空氣は餘りにも靜かであるやうにみられる。

「御感想は如何でありませうか」

と息子にうながされたので、私共都會に住んでゐる者にとりましてはこうした一部の雜誌にも鄕土色のあふれてゐるのが大變うれしくありますと一片のお世辭を言つたのである。

家の者は中々眠る樣子がないのでお先へ御免を蒙つて床へ入つた我々だつたが眞夜中にふと眼を覺ますとだだ廣い部屋のそこゝに蚊帳が釣られてあつた。その中では善良な農人達がやすらかな寢息をもらしながら眠つて居る。八月とは云へ山家だけに戸を閉め切つてゐても冷氣はしん〳〵としみ込んでくる眞夜中であつた。

○陣馬から景信へ

陣馬の山頂は十間四方位の小高い丘になつてゐて茶屋が四五軒出て居る。いづれも近在の村のおかみさん達の經營で、夜は村へ下りてしまふが頼めばこゝで泊めてくれると云ふ話。

こゝは樹木もなく遙に眺望に惠まれてゐて見るかぎりどちらを向いても平野と山と靑空ばかり。夏だつたため薄靄が一面にかゝつて居り分明にはみえなかつたがよく見れば丹澤の雄姿もかすかに浮んで居る。秋などは江の島も見えるとのことだし中秋には終夜月見が出來るといふお婆さんの言葉もさこそと思はれたのである。暑さはまだきびしい八月ではあつても、薄の穗はのび草に鳴く虫の音もきこえて秋の橫顏はそこゝにちらほら見えてゐる。

「秋になつたらまた來ますよ」

茶屋の婆さんにといふよりも寧ろ自身にこう言ひきかせて景信への道を降り初める。

陣馬から景信までの道は武藏野を往くにも似た踏み心地よい道であつた。雜木と雜草の外には大した樹もなく眺望はよくきく。いつまで行つてもふり返りさえすれば先程離れて降つてきた陣馬の山頂がはつきりと見えて、山頂の茶屋の旗のぼりがこの古戰場にふさわ

しく大空にへんぽんと翻つて居るのがなつかしまれる

○

景信山も大した山ではない。眺望に惠まれた高臺とでもいふべきで茶店といふよりもむしろ小屋が一軒あつて湯茶位は出してくれる。

「秋などは日に四百人から見えることがあります」

とそこの若者にきかされどうしても信じられない氣持であつたが、さうだとすれば茶代だけでも大したものだし働きざかりの若者がこんな茶店についてゐるのもその收入に比すれば當り前のことかもしれないとも思へた。

私達はそれから小佛峠を經て高尾山へ出て淺川から歸京した。日歸りでも充分なコースなのに和田へ泊つてゐたので時間はあり餘り、東京へついても夏の陽はまだ街に明るかつた。

○

今にしてこの行を思へば上野原から陣馬までの多少山道らしい所を加へてみたところで景信陣馬行は山へ登つたといふ程の感じは持てないかもしれないが、徒行(ギング)といふことに重點ををいてみるとき眺望もよくきくし青空はつねに頭上高く在るし寔に快いコースであると考えられる。陣馬から高尾への長途がくだりになつて居るから、上野原から這入つた方が氣持よく歩けるであらう。

陣馬を懐ふとき私は景信方面から見た長城にも似た尾根路と小さく見える頂の小屋との遠望を思ひ出す。

そして更に山の彼方の谷間の部落にみた小さい人生を思ひ出す。

○

小生等陣馬山訪問の節は色々と御世話様に相成り厚く御禮申上候、晴天に惠まれやゝ暑氣にまゐる程に候ひしが山上よりの眺めも美しく至極愉快なる山歩きなりしを喜び居り候、澤井野、佐野川村などの部落風景も中々に忘れ難く一度は御地の秋を訪れたしと存居候　先づは取り敢えず一筆御禮まで。

○

り妾共の様に年をとりますとどこへ出るのも臆怯になりまして、たゞもう住んでる處が一番よろしいのであります。そんな妾どもにしましても矢張り都は何かにつけ便利な所だと思ひます。ほしいものは直ぐ手に入ります。親戚へ何か知らせたくともすぐに電話があります。それに何よりもよろしいと思ひますのは、都ではこゝらのやうに周圍の人達からうるさく言はれないで濟むといふ事であります。私達五十年も住み馴れた者にさえさう思はれますのに白粉つけるにもかれこれやかましく言はれるのでは若いものとして町方へ出たがるのも當り前でありませう。それをああいふ風に申してをるのは娘を遠くへやりたくないからなので御座居ます。子供は多ぜいありましても女としては二人だけでありまして、上の方は何時また遠くへかたづかねばならぬやもしれず、せめて下の娘だけでも村の者へやつて手近かにをきたいと思つて居るのであります：

「貴方達をこの家へ御連れしましたのは長女であります。緣あつて東京の役所に勤めてゐる方の所へ嫁ぎ五年程あちらに居りましたが、不幸にも良人に死なれたので今は歸つて來てをります。そのとき生れた男の子が只今こうして抱いてゐる子でありまして玆年四つになります。あの娘は御覽の通りまだ若い身でありますのでいづれは再婚せねばならず今までもそんな話はかけられましたが、あの娘にはどうしてもこの子の傍が離れられないらしいのであります。孫のひとり位はいつまででも引取つて育てるつもりは私にもありますが當人の娘がどうしても子供から離れられないといふのではどうでも無理にときつく言ふこともならず、不憐さが先に立つてついずる〳〵になつてをります。

それにこの子はまだ四つでありまするがあれの良人に似まして非常に悧巧な兒でして小さい時からあまり泣くといふこともせず、氣のつよい所も少しはありまするがひとの言ふ事だけはよく判つてくれますので、そんなことが娘としては中々手離したくないのではあるまいかと思へます。」

「それにしましても、一人の子供への未練ゆえにあた

ら若い身をだいなしにするのは妾としましても不憐でありますのでよくそれを言つてきかせますし父親にも言ふやうに仕向けて居るのでありますが、何を云ひましても父親は男のことゆえ心では思つてゐても餘り口には出してくれず、妾ひとりが氣をもんでゐる始末であります。

娘が東京へ嫁ぎましたときなど離れたところは何かにつけて不自由でお產の手傳ひに出掛けてゐるときなどもつと近くであればいゝのにと愚痴も言ひましたがあれの良人さえ生きてゐてくれますならば娘にしても孫にしましても今の苦勞は見なくてすみましたでせうし、また東京へ出たがつてゐる下の子を安心して預けてやることも出來ましたのでありましようが、ほんとうに何が不幸になるのか人の世のことは分らぬもので御座居ます……」

○

そこへ噂されてゐた御當人が奥から出てきて眠り込んでしまつた子供を母親の手から受け取るのであつた

「まあお前も少しお話でもして行けえ」と母親に言はれて、

「東京もさぞかし暑いことでありませう。田舍に居るとほんとうに暑さといふものが分りません。この家の前を水が流れて居るせいでありませうか……」

と何の屈托もなく話を氣候の方へ持つて行くのであつた。

○

間もなく裏庭の樹の繁みに人聲がきこえて息子達がどや〳〵と歸つて來た。

村の青年達の間で月に一回出す謄寫刷りの雜誌が出來たから見てくれと差し出された。田園を歌つた詩風のものがかなりに多く、都會人への反感もそこゝに滲ませられてあるがそれはそのまゝに受けとるよりもむしろ農村に飽いた氣持を無理に自然を謳ふことにまぎらはせたものとみるのが本當であらう。中には養蠶技術の改良や販賣組合などについて眞面目に考えて書いてあるのもあつたが、それにしてもそうした活動的

一夜の宿をたのんだ清水家へ出さうとして切手まで貼つてあつた手紙を最近ふと寫眞帖の間から見付け出した。出し忘れた禮狀は今更出す氣にもならなかつたが、あのときの山間の部落での一夜がふと思ひ出されその時の記念にもとこの陣馬行を書いたのである。

（五月廿日）

三國、生藤より陣場へ

和田正三郎

正月も明けやらぬ六日、私達五名は生藤附近の國境山脈の縱走を試みた。

空模樣の未だはつきりわからない六時二十分新宿發の列車に身を託しひたすら上野原驛へ急いだ。

長野地方は降雪があつたのか屋根やステツプの上に黑くなつたコチ〳〵の雪を止めてゐる。淺川を過ぎ小佛峠近くに來ればもう低山ながら鬱然たる高雄・景信等の諸山が走る。

七時五十四分上野原を下車。

幸に上天氣で雲一つなく山歩には恰好だ。急な石段を登つて畑道へ出る。兩側がずうと桑畑で右側の畑の彼方に一きわ目立つて權現山が雄姿を現はしてゐる顧り見れば驛は眞下にあり桂川は蜿蜒と長蛇してゐる。

左折して町へ入る。確に細長い町だ。幅三間程の廣い道が眞直にずうと通つてゐる。早く人に道を聞けばよかつたが何時の間にか地圖の郵便局を通り過ぎて町はづれに出てしまつた。渡邊君が困つて町の人に下岩への道を訊く。

教へられた學校の松の木を目當にだら〳〵坂を登つて行く。學校の裏の溜池はコチ〳〵に凍つてピツケル

で叩いても水面迄は穴があきそうもない。

いよ〳〵山道にかかる。黑い程濃い綠の杉の林をぬつて行く。天氣の好い事を示すやうに二尺程もある人の腕のやうなツララが小さな木橋の手前にぶら下つてゐる間もなく小山を半周して下岩へ出る。其處等邊の部落の風景は丁度「東京附近の山々」の口繪にあるやうな長閑な風景だ。こんな處へ消え入つたらと思ふ。深澤君や大村君が元陣場へ來た時すぐ下の街道を通つたと云つて懷しそうに語る。

下岩から御靈への二メートルばかりの道は今盛に開墾してゐる。御靈で水筒に水を入れたり道を訊たりしてから一寸氣の付かないやうな一メートルたらずの小道を辿る。

日はもう大分南へ廻つて霜どけがして中々困難だ。これからは登る一方で小さな山の頭を廻るとすぐ三國山の頂上の笠松が見える。

十一時四十五分三國山々頂に着く。

甲相武の三國境をなす三國山の背面は赤い山火事注意の札をぶら下げてゐる權木で一ぱいだ、枯色の茅の上に雪が所々殘つてゐるのは何となくうれしい。早速景色のよい北側のくぼみに陣取つて晝飯を食べる。渡邊君がコツフエルに火をつけやうとしたがつかない。マッチをアルコールの中へ入れてもつかない。水が割つてあつたのかもしれない。とう〳〵瓶ごと前の熊倉山目がけて投げてしまつた。しかたがないので枯枝や茅を集めて焚火を作る。僕は辨當を空にしたがたりないので柴山君ののり卷を御馳走になる。焚火に掛けた紅茶は實にうまかつた。上野原で時間を潰したのでそろ〳〵腰を上げる。今まで相對してゐた熊倉山が片面坊主にされたはだを輝かしてゐたのは今でも容易に忘れられない景だ。

大村君に代つてリュックを背負つていよ〳〵生藤に登る急峻な道を敬遠して鞍部を廻る。急なスロープの眞中に唯一つ一尺ばかりの道があるばかりだが、その道と云つても北側だ。コチ〳〵に固まつた雪道で滑つて滑つて中々危い。

だがやつと頂上に着いた。九九〇メートルの頂上にしては眞にせまくて貧弱だ。富士の右手に見える大菩薩や雲取の諸山を敎へて貰ふ。

時間の關係ですぐ出發、和かな茅戸の尾根をゆつくり進む。和田川を距てた陣場山は赤い旗をちよつぴり見せて高聳してゐる。

茅丸と連行との境のあたりは石や木の根でごろ〳〵して其の上急なのでとても危險だ。尾根が和田峠あたり迄灣曲してゐるので下り切つた所で直線に横切ることにする。

一尺ばかりの炭燒が通るらしい細い道を辿る。急がば廻れと云ふ言のとほりとう〳〵朽ちた籠の所で道がなくなつたゐた。まゝよとばかり所謂血氣の勇で道なき所を押進む。茅原と見たのは高さ三尺ばかりの藪である。連行から和田峠への尾根を目掛けて登る。三尺ばかりの藪は段々高くなつて遂に行く先が見えなくなつた。先頭の渡邊君が夢中で泳ぐ。リュックサックにひつかゝつて二度程ころんだ。

やつと尾根に辿り着く。

和田峠から見た富士は所謂「紅富士」を呈して非常に美しかつた。和田峠から陣場山の頂上迄は六分と云ふ記錄で馳け登る。

頂上で今來た所や今の藪を眺めたり密柑を食べたりして少し休む。陣場からの眺は雄大で實にすばらしい。もう一回朝早く來て見たいと思ふ位だ。

そろ〳〵寒くなつて來たので下山

幅一間程のたいして登りも下りもしない閑かな道を一團になつて進む。あたりに夕暗がただよふ。

案下峠が五時。

そこから細い道を下る。小山を廻るともう暗い杉の林だ。中程迄下りた時は完全に暗くなつた。唯聞えるのは、谷川の水の音だけだ。皆元氣を出す爲に自然、歌を歌ひ出す。

時折自動車のヘッドライトが暗を貫く。鐵道線路を越えれば一時に杉の屋根がなくなつて生き返つたやうになる。道端の家で道を尋ねる。

興瀬驛のプラットホームで見た滿天の星は實に印象的だつた。

新宿	六、二〇	上野原驛	七、五四	和田峠	三、五五
上野原町	八、四〇	尾根	一〇、三〇	案下峠	五、〇〇
三國山頂	一一、四五	山頂發	一、〇五	興瀬驛	五、三五
				新宿	八、三〇

陣馬山 四、〇五
下山 五、二五
同驛發 七、一三

以上

大岳澤——五日市

若林嘉子

大岳の三角點から、道の無い所を立樹や岩につかまつて、下らうとすると、そゝり立つやうな崖の上で輕い雪がずる〳〵と滑つた。自分がこんなに弱蟲で有ることは餘り判然と知り度くはなかつたけど、いくら下つても道がなく、本當にあの時は心細くて、心の臟が凍りさうだつた。それから三角點迄逆もどりして澤を下つた。一度恐れを知つた足はどうしてもこわがつて、切つて貰つた杖につかまるのに、落葉の散り敷いた上を恐れゝば恐れる程滑つた。

Dさんはどん〳〵下つて行つて見えなくなつてしまつた。隣りで石川さんが氣の毒相に笑つてる。さう思ふけどたゞ夢中だつた。それでもどうやら瀬音の聞える迄下つた。大きな岩を見上げて少し進むと大瀧に出た。うす暗く茂つた樹の中で兩側の凍つた瀧が眞中丈けに水を落して居た。

山や樹々のおほひかぶさつた小徑の消え殘つた雪の

上には、細い蹄跡が續いて居る。村人の一人にも行き逢はない溪沿ひの小徑は、何處までも盡きなかつた。

日照り續きに小瀧は、僅かに岩角の羊齒に水を滴らせて居ただけだつた。木材運搬レールが夕靄の中に白く靜まりかへつて居た。やがて溪幅が廣まり、人家が見え出した。山懷の村里はうす闇につゝまれて、ひくい瀬音と共に、暮れて行かうとして居た。流れの其處此處に、小さな水車を仕かけて、お芋を洗つて居た可愛いゝゴロ〳〵と言ふ音は、あの靜かな村里と共に忘れ得ぬものとなつた。

溪に別れて峠を登る。歩くに連れて暗くなり、樹々の茂みの中に、遂ひに暮れてしまつた。變な形の石に驚いたり、消え殘りの雪にハツ!! と胸をつかれたりして、歩いて居る間に、眞黑な森の上に月が昇つて來た。見知らぬ處で日は暮れ、それもこれから歸る道がどこ迄續くのかもわからない時だつたから、雲にかくれ勝ちのあの月も、隨分嬉しかつた。凡そ峠と言ふものは、眞直ぐに登ればもう下りになるものと信じ切つて居たのに、いくら登つても下りにならない。燈一つ見えぬ峠道、時々梟が飛立つて驚かせる。

やつとの思ひで頂に着くと、遙かに人家の灯が見えた。あの時の嬉しさ、それは比ぶべき何物も無い。

そして殆ど走る位ひにして下つた。闇の中から人が來る「五日市迄どれ位ひでせう?」「そうですね、三十分位ひでせう」

町に出るのは厭ひながらも、一刻も早くと足は驛に急いだ。

棒之嶺走破記

柴山金三郎

朝の日光が未だほのかに輝いてゐる時分青梅街道をてくてく足取も何となく樂しそうに歩いてゆく三人のグループがあつた。云はづと知れた我等一行、早川君川口君に僕の一隊である。將來の大登山家を志望して今迄少くとも二つ三つの山なら登つた事があると云ふ甚ださびしい登山家の卵の連中である。どんな無理をしてもきつと成功させて見せると云ふ自信を持つて棒之嶺へと向つた。川井より右へ曲り大丹波川に沿つて元氣に歩む、途中道を間違へる事二三回僕は自分の頭のはかなさをなげき苦笑せざるを禁ずる事を得づと云ふやうな次第であります。失敗は成功の基、元氣を出せとばかりお互に元氣をつけながら少しづつピッチを上げて歩いた、ナンセンスなのは大丹波と云ふ村へ來て大丹波はまだなかなかですかと聞いたら大丹波は此所だよと云ふので三人共ダアーとなつちやつたです。長居は無用とばかりに逃げ出した、後で三人顔を合せて笑ひ出した、實際は此んな事を書くと早川君や川口君にのされちやうから秘密なんですがね、伊澤の桂公が手を合せて實際の話を書いてくれと云ふから、交際上書いてやらないとかはいそうだからね、横道にそれましたか失禮、それからまあ何うやらこうやら權次入澤の分岐點へと到着した。

そして之れから飯にしやうと云つた時は何とも云へぬ喜びを感じた、川口君は一年に一回位の腕前を振つて飯を焚いたが實際美味しかつた、僕は思ふに飯が美味しく出來たのではなく皆腹がへつていたので美味しく感じたのだと、紅茶を沸かして飲んだ實に美味しかつた、紅茶は安いのを使つたが僕が腕によりをかけて

沸かした所の紅茶は何んとも云へない味がした、休息すること約二時間此の間寫眞を撮つたりして勞を慰めた。然して一行三人元氣恢復して同地點を出發すところが餘りにも皆が飯を食べすぎたので（一人當り二合五勺位しか食べなかつたが、誰も朝賀の義ちやんの二代目は出來なかつた。僕達は四合飯とは譯が違ひますからね）皆動けなくなつてしまつた、腹の方が落ち着いてしまつて足を前へ運ぶのが面倒くさい程歩くのがいやになつてしまつた、此れからが大變であつた、何となく道が間違つてゐるらしく氣になつて仕方がなかつた道が上りになつてゐてそれを眞直行くと道標が立つて道が二つに分れてゐた、右の方へ行くと名もなき橋を渡つて行くと又二つに分れてゐた、それを左の道へ進んで行くと上りになつてゐてしばらくすると突當つて道が無くなつてしまつた。さあ弱つてしまつた、そこでバックして他の道を行けば良かつたが、先づ最初に川口君が折角此所まで來たのだからバックするのはつまらないと云ひ出した。早川君も川口君の案に贊成した。僕はバックした方が良いだらうと思つた。僕は此の前安さんと生藤山へ行つた時變な道に入つてしまつた、その時に藪潜をやつた、山に志し日尚淺くして此の様な經驗を得た事は實に嬉しかつた、今又此の如き立場になつたので一時僕は贊成しなかつたが三人の內、二人迄は此の荒地を突き拔けやうと云つたので、反對していや〳〵乍ら上るのはつまらないと思つたので、兎に角荒地を突き切る事にした。

そして頂上がさして遠くもなさそうだつたので元氣にまかせてぢやん〳〵上り出した中腹程迄來ると徐々に急になり石はごろ〳〵落ちるし、そして早川君の眼鏡等は石が落ちて來て當りさうになつたりした、我々は非常に困却した。やつと頂上だと思つた所へ來て見ると又其の上に山があつて頂上だと思つた所より上は杉並木であつた晝尙暗き深山何となく寒氣がして來た無我夢中と云ひたいが眞劍に上へ上へと急いだ。丁度杉並木を出た所がずつと道になつてゐたので此れが棒之嶺行路であると直感した。ひと休して此度は日當り

良き山道をてく〳〵歩き乍ら今登つた傾斜を顧見乍ら「危ふかつたなあ」「しかし良い經驗だよ」「たまには良いぜ」「よせやい俺は此れで二度目ぢやないか」棒之嶺を遙かに見やり何だか陣馬山の樣な氣がした、芦の生へてゐる山は僕は大好きである何となく山らしい感じが出る。JUST三時に棒之嶺に着いた、そこで寫眞を撮つたりしていたが、も早西日が沈みかけていたので急ぎ下山しやうと足を速めた。そして名も知らない山を幾つも越して行けども〳〵山又山實際さびしかつたその內日は全く暮れかけて今や暮色蒼然とも云ふべき折であつた。その內に道が上下に分れて居た此う云ふ場合は早く下つた方が良策だと思つたので下つて行くと突き當りに於て道は消へて居た、此度はすぐ引返して尙行くこと數丁又も道が二つに分れて居た、又下つて行くと赤土の傾斜にずつと順良く足場が出來て居た。下の方には炭燒小舍が見へた。小舍を目當に行くと足場が無くなつて居た。日が沈むあゝ絶望、云ひ知れぬ寂しさから三人顏を合せて不氣味に笑つた。しかし最後の望誰れか云ふ「最後迄希望を持て」と僕は一行の先頭に居た僕は一妻の望を以てこらへきれぬ寂しさより涙聲で叫んだ、よし僕があの炭燒小舍へ行きもしも炭燒さんが居たら道を聞くからと云つた。そして二人を見た次の瞬間、僕は急傾斜の赤土を滑り下つて居た。途中で石につまづき轉がつた。起き上つた僕の顏は無念無想の泣きそうな顏であつたと、後で早川君川口君が話した、そして彼等も同じ想ひで顏を合はせたそうだ。足が炭燒小舍の近くにつくが早いか、小舍目懸て眞しぐらに飛び込んだ。「小父さん〳〵」「おう」居た〳〵「大丹波へ行くには」「此の炭燒小舍よりの炭燒が通る道を下つて行くと大丹波へ出るだよ」「占た」斯う云ふ場合は炭燒さんがまるで佛樣の樣に感じるものだ、禮を云つて振返り「下りて來いよ」と大聲で叫んだ。二人はいちもくさんに下つて來た共に禮を云つて云はれた通りの道を下つていつた。しばらく後には大丹波川に沿つてつい今しがた味はつた經驗を回想して三人共にぷつと吹出した、大丹波川の清水

今田敏男

百尋の瀧

に喉をうるほして夕暮の山道を足音高く御岳驛へ〳〵へと一歩〳〵足を速めて我等銀嶺會の健脚ぶりを示した日は全く暮れてしまつた、不氣味にこんもり茂つた森山を見てぞつとした、御岳驛へ着いた時はほつとしてがつかりしてしまつた後新宿に着いて解散した。

昭和九年三月八日

川苔山

早川謹司

左に多摩の奔流が岩をかみ白泡をたてゝ走り流れる右は猫の額程の土地が開かれ、蔬菜類がひよろ〳〵と榮養不良の黄ろい葉を出してゐる。この間に一線をひくもの、それは僕等が今歩いてゐるこの青梅街道である。

うね〳〵として盡きないこの街道を氷川行バスもしくは、流しのボロ圓タクが砂けむりを僕等にあびせて追ひすぎる。鳥渡くさらせる圖だ。

約一時間して大正橋にいたる。之より右折して青梅街道に御別れする。今までとはちがつて自動車も通らず、多摩もいよ〳〵細くなり、藥研鉢のやうに深く穿たれてくる。對岸の山肌には杉林がすく〳〵と伸びて恐しいまでにおひ茂つてゐる。

茶をつむ女、鍬ふる男を都會人特有の物珍し氣に見ながら進みに進む。途中で鳥渡思ひ出したことがあつた——今年の一月S、K、兩君と棒の嶺へ行つた時であつた。大丹波がどこいらであるか見當がつかずまご〳〵した。そうした時附近の一家から髭面の親父がのぞいてゐたので「大丹波は何處へ行くんですか」と聞いた所、親父が目をぎよろりとさせて「大丹波は此處

だがね」こういはれて逃げだした――たしか此處いらだがと少し行くと右手の少し高くなつた所に障子はしまつてゐて親父は首を出してゐないが正しくその家。何だか恐ろしいやうな慕しいような氣特でそつと其處を通りすぎる。

餘り暑いのでリュックをおろして上着をぬぐと冷しい山風が身にしみる。その時大勢の年寄連ががヤ〳〵話し合ひながら通りすぎる。ちよつとしやくにさはり僕等は亦すぐにリュックを背に歩きはじめる。少し休んだせいか足が大分輕くなつて忽ちさつきの年寄連をまたたく間に追ひ越してしまひ、先行く人々に追ひついて行く。

やがて十時頃權次入澤に着く。

見れは此の前來た時とは大分あたりの樣子が變つてゐる。大丹波川の清流、岩の有樣こそ變らないがまはりの木々は大方かり取られ、樹皮をはがされてごろごろころがつてゐて、殺風景な場面を展開してゐる。ふと見ると岩の影に黑く、この前來た時の炊事したあとがあり〳〵と殘つてゐて、なんとなく、前の木々の深くおひ茂つた澤が戀しくなりまぶたが熱くなる。パインアップルの罐を開けたあとでそばの大岩に登つてみる。苦がすべ〳〵してゐるのでちよつとあぶないが興がある。

元氣百倍約三十分して此處を出發する。今度はピッチをあげやうとの意氣込みぐん〳〵のしてゆく。

丸岩の下で寫眞を取つたのはよいが、皆未だ寫眞をとられた事はあるが取つた事のないものばかりであれやこれやで二十分以上かゝつてしまふ。

此處を過ぎると少しく爪先のぼりになつて來、足もだん〳〵重くなつてくる。氣がついて見ると大丹波川の溪流がいつの間にか左側になつてゐて、清水を球と散らして、馳け下つて行く。

登りは次第にけはしくなつてきて、あれほど、この街道に近く沿つて來た。大丹波川は、はるか下の方に一本の白金の網のやうに見えるやうになり、木々の淺綠をうかべて走つてゐる。

向ひの山を見ると、二條の瀧が中腹に相連つて落ちてゐる。上の方のは綠の中からほとばしり、綠の中に隱れ、それより約一丁下に初夏の太陽をあびて、白銀に光る瀧が又かゝつてゐる。その美しさその清かさ。それは山好の人々にのみあたへられた一大特權ではなからうか。

曲り谷を左に見て、なほ行けば山路はいやが上にも急になり、熱い息が胸をついて、出て、自分の足が自分のものでないやうな氣がしてくる。汗は全顏ににじみ出て、目にしみいりともすれば足がふらつく。

もう一息とふんばれば目上に五六人の人達がうつるもう獅子口だ！　二足、三足遂に獅子口へ到着。

山小屋の御神さんがまあ〳〵と薄い番茶と、こゝの名產わさび漬を　片皿にきつてくる。

獅子口岩は僕が前から想つてゐたより、あまりにも小さいのにおどろかされた。しかしその割目からこん〳〵とわき出る水量は豫想外だつたわいても〳〵盡きないこの清水、あの六鄕の洋々たる水量を作り出るのも當然のやうにおもはれる。だが、この清水に樋を渡し炊事場にしてあるのは少しどうかと思はれ、これさへなければといふ感が起らないでもない。

小屋の親父に火を借りて清水さんがハンゴウに飯を炊き鍋に味噌汁を作る。なんともいへないうまさうな飯のにほひ、すつと鼻先をかすめる味噌の香、生薪の甘い觸感等に、之等が一緒になつて腹の虫をよびおこしグーグーと泣かせる。

ハンゴウの蓋を茶碗代りに飯を山と盛り小屋の親父の心盡しの茶碗に大きなかぶらの浮いた味噌汁をつぎこむ。その味、そのうまさ、それは筆には盡されないが上等の西洋料理、支那料理よりうまいことはたしかである。

飯々終へて、食器を洗ひ、水筒にあふれるほどの清水をつぎ込む。約一時頃、小屋の夫婦の禮を後に最後の目的地、川苔に向ふ。

今度の登りはすこし急だと言はれて來たがそれほどでもないだらうと思つて登り口に來て見て驚いた。約

六十度の傾斜ですつと登りになつてゐる。

勇をこして、一足三足登りだす。しかしもう心臟の鼓動がはげしくなり、玉の汗がぽた〳〵帽子をぬつて流れ出す程になる。なんだこの位の登り、男らしくないぞと自分で自分をはげましておりながらもつい足が進まず、そこいらに倒れてしまひ、ねながらもごろ〳〵ところがつて多摩の渓流を浴びたいやうな氣持になる。動かぬ足を無理に動かせて、森間をつきぬけ遂に川苔への尾根に出る。さつと明るい光が通りすぎて、眼界が一時に開ける。とりわけ目前に谷をへだてゝそびへる川苔は大空ににこやかに微笑をなげかけそのドームの頂は僕等を指しまねいてゐる。

十分間の休息に元氣をとりもどし山腹に沿つて僕等一行は進む。

すが〳〵しい初春の山の大氣、否山の精氣が僕等の口鼻眼より入つて、體から發散し都會によつて受けたあらゆるものを取りさり、完全に綠の世界にとりこになる。

やがて平たんな山腹路のつきる所、川苔頂上への道がはつきり見える。

之を十分ばかり登つて遂に最後ののぼりへ來る。即ちこれをのぼれば川苔三角點である。上の方にちらちらと二三人の影が見える。

大氣を腹一ぱい吸ひ込んで登り出す。少し急であるが何の手がかりもない。と、するとすべりさうになるのをはふやうにして足場をきめつゝ登りに登る。

頂上だ！　遂に奥多摩に君臨する女王、千三百餘米を算する川苔を征服したんだ。我ながら何かさけびたくなる。空は少し曇つて來たがその眺望のきくこと。

正面に蕎麥粒仙元の山々、ウナ澤の頭等がそびえその左右に大嶽三頭山等が、まぎれぬ色を見せており、はるか彼方に秩父連山が美しいスカイラインをひいて儼然として連りそびえてゐる。その他名ある山も、又名なき小山も一つとして大自然の偉力を示さぬものはなく、そのほとばしる靈氣が僕等人間の心にひた〳〵とおしよせ、氣が自然にしまつてくる。

パインを食ひ、山頂の空氣を滿喫し、ゆつくり休んでから下山に向ふ。今まで來た道を右に折れ棚澤におりることにする。

すく〳〵のびたつた杉林をふみわけ、長い〳〵段を下りて、約二時間後棚澤に着く。

扇山より權現へ

山の虫が腹の中であばれ出したのは土曜日の午後からだ夜が近ずくに從つて其の鋒先は益々猛烈になり出した。

支度もそこ〳〵に八王子の兄の家に出掛けた時は夜もかなり遲かつた生憎く兄は處用の爲め山行を共にする事が出來ず、一人で行く事になつた、行くと決定したものの何處に行くと言ふ當もなく次の朝八王子驛に立つたのである。陣場にしやうか三國越しか、それとも鞍岳山か、仲々決心がつかぬ。汽車の時間は刻々とせまる。一先づ鳥澤まで切符を求め車中の人となる。

のんびりと煙草をくゆらしながら車窓より移りゆく景色をあかずに眺める。遠くに霞む大岳の山脈、杉の森、人家、畑打つ百姓、麥はもう六七寸延びて土堤の餅草、つくしは暖かさうに朝の陽を一ぱいに浴びてゐる。汽車は幾つかのトンネルを潜り渓流を渡りいつしか上野原を過ぎて四方津に向つて走る。眼の前にぱつと現

又、この街道をぽつ〳〵御嶽に歸りがゝり、あぶれ自動車に乘つて吳れと言はれ大枚五十錢にて御嶽に一直線。午後七時頃、僕等は青梅線車中の人となり、赤い灯青い灯の新宿につきすゝみつゝあるのである。

石川勝正

はれた新雪の尾根なだらかに東方に延びてゐる。何處の尾根だらうと思はず地圖を取上れば權現の尾根だ、僕はとつさに決心した「權現に行かふ」そしてあの新雪を思ふ存分蹴散らしてやらうと一人微笑んだ。

鳥澤に車をすてて驛前の甲州街道を横切り人家の後に出れば扇山と百藏山が直ぐ目の前に並んで居る。どちらが扇か百藏か解らない。左の方が扇型してゐるから扇山だらう。地圖はリュックの奥で見るも面倒なので土地の人に聞たら右が扇山ださうだ。可成急さうだ雪も大分有るらしく頂上附近の林は可成白くなつてゐる。道は桑畑の中を通りぬける別れ道に來る度に古い道標が立つてゐるので安心して歩を進める。左手に菩薩、小金澤の連嶺が頭だけ雲にかくれ殘雪もの凄く見える。富士は相變らず美しい姿を見せて呉れるのも嬉しい、路端にはぼけの花が羞しさうに咲いて鶯はしきりに鳴き交してゐる。岡の下には二三人の學童が溫んだ水を盛んにかい掘りしてゐる「何匹とれたかい」と呶鳴ると「未だ三匹だあい」と元氣の良い返事が澄んだ空氣に響き來る。陽は遠慮なしにかん〳〵照すたちまち汗だくだ。

美はしい杉の森をぬけた。笹原も通り過ぎた。路の隅に薪が澤山積んで有る。薪の一つに腰を落ろし汗を拭ひ今來た道を見返す幾つかの杉森松林の向ふに炭燒の煙が昇る。白く光つてゐる田圃はさつきの小供の居た附近だらう。鳥澤の尾根が白く光る、山は深閑として何に一つ聞えない。此んな時いつも九州の幼き頃を追想する。追想すると言ふよりか、自然と涌いて來ると言つた方が適當かも知れない、學校の歸り路に五町も六町も續く竹藪のしじま、社の森、或は堤に登つて端山に沈む夕日に向つて石を投げし事、筑後川のピクニック等々色々と想出は盡きない。鳥の叫び聲に夢は破られ御腰を上げる。松林に入つた。明るい松林だ、ぷうんと良い香が鼻を突く。所處に新雪を見せる。雪を掻いて盛んに食べる、乾いた喉には何よりの御馳走だ。上の方で犬が盛んに吠えてゐる。少し行く獵に來た人だらう。小さなリュックを傍に置いて休んでゐる。同じ列車

で來た連中も休んで水を仕入れに澤に降りたらしくリュックが五つ程路端に並んでゐた。「御先へ」と一言を殘して尙も登行を續ける。雪が非常に增して來た、杉の枝からは陽に溶けた雪がぽたん〳〵背に落ちて來て氣持が惡い事おびたゞしい。犬が盛んに走り廻つてゐる。上に馳け上つたり藪を馳け下りたりとても忙しいピーと口笛吹けば急いでやつて來る。そして亦馳け登る可愛い奴だ。今度は茅の斜面に出た。灰色と白の配合もちと面白い。枯枝の先には雪が氷付いてぶら〳〵してゐる下方の杉林は綿を小切にして投付けた樣だ。話聲が聞えて來たので少しピッチを速める。亦いつの間にか松林に入つて居るもう扇の肩も近いらしく道も緩かになつて來た。と思ふ間もなく肩に出た。肩と言ふより峠だらう。山の背は四間程の幅に開けて扇山より百藏山へと續く平な道だ。峠に出て先づ目に付くのは權現の雄大なる姿であらう。扇は此處を右に三四十米登れば良いのである。眞白に敷きつめられた處女雪を一番乘とばかりに元氣良く一氣に扇の頂上へと馳け上つた。

先づ眺望とリュックを置いてむさぼる樣に目を順次に回轉させる。權現眞白に雪に包まれちよこんと尖つてゐる。その左右になだらかな一直線の尾根を引いてゐる。山の頂上から前方へぐつと下つてゐるのは之から登る枝尾根だ。權現の右隣りに三國生藤が霞み陣場と續く陣場は相變らず立派な山頂をみせ、小屋もかすか一點となり見出される。

東方の丹澤山塊は雲にかくれ、大野貯水池が足下に大きく浮出てゐる。四方津の町遠くに上野原も見つける事が出來た。鞍岳の頂上には低雲が彷徨ひその前に鳥澤の町が箱庭の樣に一塊になつてゐる。

少し早いが晝飯にしやうと枯枝を折つて焚火する火が燃え付く頃先程休んで居た連中が登つて來た。各自見晴しが濟むとてんでに枯木を集めて來てはくべ。今日のコースを話し合ふ。十一時頂上に別れをつげる。上で知合になつた。鐵道省の御夫婦と同行する事になつた、頂上から近道が有ると聞いたので探したが見當らず、元來た道を峠まで引返し細い道の尾根を淺川峠

へと辿る。若葉には未だ早い茅の林は未だ冬だ、陽だけはさすが春らしくぽか〳〵してゐる。百藏の形が前と少し變つて見える。小金澤菩薩の連嶺は依然と雲の中だ。鐵道省の御方は大分鍛くぐりが好きだと見えて盛んに道をはずれては、林の中を馳け降るさうしては「早くお出なさい」と叫鳴るので仕方なしに僕も馳け降りる。お蔭で手を擦剝てしまつた。三四十分も下つた頃淺川峠に達した淺川の部落が眼下に十軒程群つてゐる。道を左に行けば淺川を過ぎて猿橋を右に取れば四方津上野原に出る愛らしき峠だ。四方津の道から二人大きな荷を背負つて登つて來る。たぶん峠を越し淺川へ行く人だらう。炭燒の煙が二條權現の中腹に登る。鐵道の奥さんが「去年來た時あの村で草履を買ひましたね」と感慨深さうに淺川村を見入つてゐる。振返れば扇が馬鹿に落着いて見え、今降りて來た道が判然りと指さす事が事が出來た。

權現の登りにかゝる道は非常に樂だゆつくり休まずに登高を續ける。奥さんは大變足が强い。親父は盛んに鍛くぐり？　をやらかす「山は良いですなー君も澤山友達を誘ひ山に來給へ山は第一體に良いし忍耐力を養ふに良い所だ」と益んにお話して下さるので愼んで靜聽しながら登る。其の中道をどう間違ひたか變な方を歩いてゐるのに氣付いたどうも本道は尾根の向側に有るらしい。此の道を眞直ぐ行つても行けぬ事もなさそうだ。念の爲地圖を見ればお親父さんは大丈夫だ大丈夫だ。僕は此處は三度目だ僕に委し給へと一人でぐん〳〵登る、木につかまつたり。或は雪溶けで泥々した所を何度も〳〵も滑りながら一汗かひてやつと權現の鞍部に取付く事が出來た。親父は大分疲勞したと見え「君僕は二回登つたから今日は登らないから君一人で頂上に登つて來給へ」と氷砂糖を三つ四つ呉れた。僕はお親父さんを卷き度いと思つてゐたから「先へ行つて下さいませんか、僕は上でゆつくりしますから」と言へば「何に待つて上げますよ」悠々と飯を食ひ始めた。爪先上りを五分も續けると頂上だ十人も人が立つたら一杯に成りさうな狹い場所だ。眞中の三角點に標高一

二一二・九米と有る先着の五人が休んでゐた。今日は雲が多い。先程まで陰れて居た菩薩、小金澤七つ石は其の全貌を表はし三國峠丹澤もその雄姿を見る事が出來た。三頭の雄大なる山姿は直前に聳立し淺間の枯尾根が一線を引いてゐる。大岳は親みの有る乳房の樣な山頂を見せてゐる。大岳集中の時神戸から取付いた尾根が可成急傾斜に見えるのも懐しい。頂上より少し降ると權現の社が有る一寸頭を下げて肩に歸れば親父は寢ころんで煙草を吸つてゐる。

時計を見れば一時少し前だ上野原四時の汽車に間に合ひさうなので頑張る事にする。

ゆるい勾配幅廣き尾根は一寸登りとなり小さな突起を起して下る。道は下る一方だ登りは樂に支度もない。大岳を左に見ながら足はぐん〳〵と延びる小さな原を或は松林を、その内に大きな杉が見えた二本杉だ、古杉が一本聳立してゐる相當年代がたつてゐやう。その横にもう一本の杉が名殘の切株を止めてゐる杉の間からは上野原が細長くあれまで二時間で行けるかしらと思はれる程遠くに見える。それから用竹まで急勾配の降りだ馳ける樣にぐん〳〵と飛ぶ、附近には大分炭燒の人が入つてゐて其處此處に鉈の音が聞える。藁葺屋根の家が見えるぽつり〳〵と、一軒又一軒人家の前に出た。庭では三人の若者が懸命に薪を割つて居り、鶏は餌を漁つてゐる。猫は緣に寢てゐた。道端では小供が板に車を付けて坂の上からどろ〳〵滑つて興じてゐる白壁の家の前を通り過ぎて用竹の部落を出て小さな峠を越す頃馬が幾頭となく續いてやつて來る。背には醬油、うどん等色々の日用品を積んで鼻唄を歌ひながら村に歸つて來る道を左によけると「どうも濟ません」と會釋して通つてゆく。坂を越して平な道に出に右に鶴川の溪が靜かに流れてゐる地圖で想像する程凄い溪谷でも無い相當見答への有る溪だ、亦、馬が五六頭やつて來る。小學生が大きな荷を背負つて清水の涌く場所で休んでゐる丹澤は霞がとれてその全雄姿を表し大室も加入道も谷に相當の雪を殘してゐる。今日丹澤に向つた大村君達は豫定のコースを踏めたかしら、姫次の附

近の道も埋つてさぞ困つてゐるだらうと考へながら歩む。その内に上野原町に入つた。僕の上野原の第一印象は非常に悪い、二度目に行つた時もやつぱり陰氣な町だと思つたがこちらから來た時はそんな陰氣の氣など少しも起らず明るい町だとの好印象を與へて呉れた事は嬉しかつた。

振返れば扇が黒く裾を引いてゐる二本杉の尾根も見出せる。僕はそれをぢいいつと凝視めて今日の愉快な旅の終つた事を何物かに感謝したい氣持をいだひて上野原驛に向つた。

顔振峠の失敗

勃々たる心を壓へ兼ねた同志三人、前に讀んだ本の朧ろげな記憶を呼覺して、丁度手頃とばかりに、後では地圖も見なれない、又調べもしてない事がどんなに迷ふか等てんで考へなしに「どうにかなるだらう」と無鐵砲に飛び出し豫定より一時間遲れて吾野に下車する。最初から「どの邊に見へるのが峠になります?」等吾野町は今のスピード時代に拘らず依然として獨り殘され遲々として歩を運んで行くゆつたりと抱きかゝへて來れる母の樣な町だつた。

町の小供連は輕い親みで送迎してくれる。踊る心を抱いて美しい吾野溪谷にかゝる吾野橋を渡り、御祭でも有るのかお社の前に小供の群ているのを横目に見て長澤の部落より澤に着て石のごろ〳〵した爪先上りの道を一歩一歩踏しめて行く。山氣はほてつた身體を快よく冷してくれるが、其れも暫くの間、相當の坂を喘ぎ登る内に暑くなつて來た。荷物が少ないからと不精

肥沼月江

して三人で一ツのハイサックを持つて來たのが崇つて脱でも入れる所が無く持つて歩くのに骨が折れる。

道を相變らず聞いて歩く、親切な里の人は出て來て「左に左に行くと學校に出ます庭を通つて行きなさい」と丁寧に敎へて下さるので恐縮して先を急ぐ。

「この水車五圓也」賣札が掛つている。小さな澤の傍に小ぢんまりと靜まつて木の陰から日の影は射し込んで來る落付いた好もしい水車だつた。

學校の裏手を廻つて表に出ると、處女會でもあつたのか道を聞くと女先生の後から女の人達の首が幾つも並んで笑つている。いゝ氣になつてワンダリング等云つて居るが物好に西洋乞食のまねをして居るとでも見られたらしい。「登り切つて左手です」有難うと手を振つて振返ると未だ未だ見送つている。學校を越して、すぐ前に名栗の尾根がうね〳〵と踞り前程まで見へていた富士の麗姿は見へなくなつたが前衞の山波は薄紫にスカイラインを限つて蜿蜒とつらなる眺望に足を止める。

左手に行くとすぐ下りになる。かすかながら一軒のお茶屋があると書いてあつた樣だが、一軒ある事は有るが、田舍家であまりむさ苦しい。違ふのよとばかり引返して明るい尾根道を行く右手にも雪を戴いた山の姿が見へて私達を嬉ばせる。

杉並木の道をどん〳〵行くが磁石と地圖を見るもあまり八德の町に迄すぎてゐる? 丁度落葉拾ひの大きな籠を脊にした小供に行き會つて聞くと「こつちヂヤーないよおらが案内して上げよう」と後に付て行くと遲いので途中で失禮駈け出して元來た道を取つて返す指導標の導く儘に越生の方に下る。今度は下り過るどうも變だ拔採しているのを聞きつけて入つて聞けば峠は此の上、何の事一番最初に來た所だつたのだ、地圖もよく見ない爲だとがつかりする。何だか名から受る感がもつと明るい開けた樣な氣がしていたが、案外な所で隨分と時間を取つて「三ベン廻つて煙草にしよ」に敬意を表して一休みと腰を下す。

目の下に日に輝やいた平和な風影の町が靜かに横た

はり山々は穏やかに眠つているかの様だつた。

お晝までに高山、出來れば飯盛峠まで行きたい豫定を持ちながら半分も行かれない八德の手前にてお晝切り開かれた草の斜面は暖かく殊に靜かだつた、こゝより八德はすぐ、山道を取つて心細い思ひをしたり、カヤトの光る美しい斜面になぐさめられつゝ高山のお不動様をお參りして下つて來る。

道を間違へて却つて吾野溪谷の印象は深く刻み込れた楽しい思出は高山の名と共に私達の貴重なハイキングの經驗第一課になつたのだつた。

身體は焔と燃る
植林の陰
チロ〳〵と岩間を流れる
　美くしき澤水の
一すくいの水
口中をうるほせば

焼けた身體も
山の肌の冷たさにとけ込み
快よく汗ばむ我が肌に
山の息吹は
　ひし〳〵と迫る
山間の憩ひ

山間の憩ひ
輕き疲れ　息くるしく

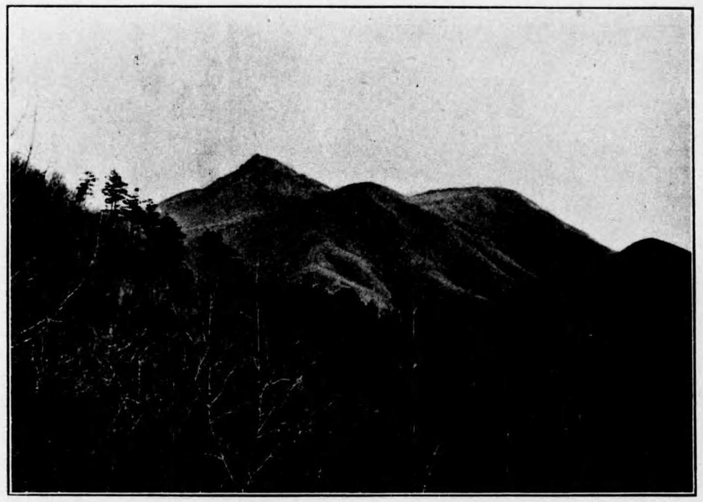
乾德山登行記

大仲啓子

あれだけひどかつた雨も、何時の間にか止み、清められた空には朧月が淡い光を地上に、投げかけてゐた山にゆくのだと思ふと、たゞ無性に嬉しく、私達は車中の人となつた明日を思つて眠りについたが、しばし微睡んだ頃、早や汽車は鹽山へ着いてゐた。午前四時十八分暗紫色の山頂に曉明星をあほぎながら、自動車を馳つて堀の内へと向つた、シーンと身に泌み入る様な寒さである。何といふ清澄な空氣であらうか。胸は一人でに高鳴つて來る。夜は全く明けきれず早起きの村人達もまだ夢最中であらう。清流にかけられたいくつかの水車、吉野櫻であらうか、ほの白くつゝましやかに咲き匂つてゐる、生垣をすぎ私達は無言で歩き續けた「みんな富士山でも拜んでゆこうよ」石川さんの聲に一同がふりかへつた時、今迄白く押繪の様に眺められてゐた富士は、何時の間に上り初めたのであらうか太陽の光りに反面を淡紅色に染めて、あの雄大な姿を神々しい迄にくつきりと畫き出してゐた。私達はしばしその容姿に眺め入つた。進むにしたがつて人家はまばらに、道はだん〳〵急になつて來た。石ころの多い落葉樹の間を縫つて、二時間ばかり登りつめると、一面芝生の大久保峠についた鶯がしきりに鳴きかはしてゐる。ひやり上氣した頰を朝風がかすめて、過ぎていつた靜かなる曉の峠しつとりと、露を含んだ芝生の上に私達はしばらく腰を下した。あゝなんといふなどやかな心持であらうか。毎日を遂はれる様に生活してゐる私達は、本當の山の心に觸れる事は困難かも知れない。しかし山はこんなにも人間の心をなごましてくれるのである。ふとあほぐと太陽は彼方の山頂近く迄上つてゐた。私達も又歩みをつゞけていつた。今度は下りである。足は一人でに前に進みどん〳〵下つていつた約四十分位で德和の部落についた。山に圍まれ溪流を友に、日々を送るこの部落の人々は、本當に親切である。たゞ朝の挨拶をかはした、だけでも何となく清められる様な心持がした。堅い御飯わかめのお味噌汁に、舌鼓を打つて、足ごしらへをすまし午前九時いよ〳〵目指す乾德山へ向つた。少し登つた頃、體の調子

が悪く、皆に遅れていつたが春を迎へて、すく〳〵と延びゆく道端の雜草、足音に驚いて飛立つ雉の群、ゴーッとかすかに聞えてくる谷間の流れ、誰といつて會ふ人もなく、私はすべてを忘れて登つていつた。ふりかへつてみれば、富士は白雪を頂いて、いよ〳〵清らかである。周圍の山並は淡紫色に霞み、誰かこの自然の素晴らしさに、恍惚たらざる者があらうか。後もう少しで頂上である。杖捨岩、水割岩等、まるでお猿の樣に岩から岩へ、木の間をくゞつて苦しくなれば空をあほぎ、のどが乾いてくれば雪を頬張り、たゞ夢中で登つていつた。

頂上についたのが十二時四十五分、お腹がすつかりすいてしまつた。太陽は暑く感じる迄にかゞやき、眼下に開けられた眺望は、又筆や言葉には盡せぬ風情である。あの清く晴れ渡つた青い空遠く雪をいたゞいた連峯、じつと耳をすましてゐると、何かしら山の囁きが聞へてくる樣な氣がする。あゝ來てよかつた。私はしみ〴〵山に來た喜びを味つた。歸りは藪くゞりで、どん〳〵下つてしまつた。德和へついたのが四時三分であつた今日限り、再びこの地へは訪れる事もないであらうと思ふと、名殘惜しく「さよなら」口の中で呟いたが、急に目の中が熱くなつてしまつた。成澤大澤の部落を經て、堀の內へ着いた頃は、暮色すでに迫り宵闇はすべての物を、黑色の淵へ沈め樣としてゐた。笹子をすぎた頃から疲れてぐつすり眠つてしまつたが新宿へついたのが十時十分頃であつた。お互ひに明日を約して別れたが忘れる事の出來ぬ愉快な一日であつた。



石川勝正

乾德山

早春の藏王

高橋重吉

「藏王へ行くんだ、どうだ一諸に行かないか」

話に聞き、文に憧れて居た藏王！

私は躊躇なしに藏王行にプラン變更です。

誰しもスキーを始めて、直滑降が轉びなりにも出來るやうになると夏山とは亦別趣な、感激に滿ちた雪の山に登りたいといふ希望に燃えるものです。

深いラツセルにあえぎあえぎ登り、頂に立つて純白の雪に裝はれた山々の立並ぶ大觀に歡喜し、タンネの森の中の處女雪に雪煙あげて、ボーゲンを畫き乍ら降る壯快さは、スキーの面白味を解したアルピニストのみに許された王者のそれに比すべき悦樂でせう。

山形へ

汽車は星のない濃い闇夜を北へ北へと走つて居ます山へ行く時の夜汽車はいつもさうですが充分眠れた例

私の藏王へ訪づれるやうになつたのは偶然な事からでした。驛には積雪だよりにかはつて、さくらだよりがはられてゐるといふ四月の初め、まだスキーの面白さを忘れる事が出來ないで、吾妻山群の山懐深く抱かれた青木小屋に數日を送る爲、これも五色に行くといふ石川さんと一諸に上野驛に乘込みました。さすがに若葉あをやぐ此頃ではシーズン中のやうにスキーの林立は見られませんが、それでもちらほらと私達のやうに今年度最後のスキーを樂しもうといふ人達でせう。スキー服姿が現はれて來ます。

其の中に混ぢつて、巨體をノツシ〳〵と運ばせてくるのはこの正月青木小屋に一夜を共にした、山友達のTさんではありませんか。

「どちらへ行らつしやるんですか」

がありません。眠られぬ儘に五萬分一の「山形」と「上ノ山」の地圖をつなぎ合はせて見入つて居ると、頭の中はもう雪の藏王のことで一杯です。

しばらくうと〳〵して眼を覺ますと福島を過ぎて窓越しには雪さへ見え始めて居ます。

やがて板谷驛です。石川さんはまだ暗いプラツト・フオームへ降りて行きました。板谷峠を越へて米澤盆地に出るあたりで夜は明けました。一めんの雪原にまぶしい位です。初めて來た土地への興味からシゲ〳〵と窓の景色を眺めて居ると、「とうげ」驛から乘つた此の地方のインテリらしい人が色々と說明してくれました。話は自然と藏王の事に移つてゆきました。或る年の秋、山形にある中學校の學生達が先生に引率されて藏王に登り、期節はづれの吹雪に逢つて四十何人遭難したさうです。

「先生は年を老つて居たから、先やられたのでせう。それを生徒達がかばふやうにまわりを圍んで凍えて死んで居ました。とても見て居るのに忍びませんでした」

その人は今もなほ其の有樣が目の前に見えるかのやうにしみ〴〵と話しました。今年の正月は東京市役所のエキスパートが三人やはり吹雪でやられて居ます。未だにあの深い雪の中に埋もれて居る事でせう。いくたの搜索隊も空しく引上げ、雪融けを待つて再び搜索するとの事です。今更乍ら藏王の吹雪の恐ろしさを感じさせられました。

山形へ着いたのは七時でした。米澤の町には雪が堆高く積み上げられて居ましたが、さすがに此處には雪は見られません。驛前の廣い通りは山形市の銀座通りでせう。其處に女の人のモンペ姿が見られるのです。遠く東京を離れると旅の變つた風俗が目を樂しませてくれます。

最上高湯へ

山形でバスを待つて半鄕といふ村までゆられます。冬の雪のある時ならば此處から馬橇があるのですが今では歩いて行かねばなりません。此村では空腹を滿してゐるとちら〳〵小雪が降り初めました。村の女の

人は、お婆さんも女の子も、毛布や布呂敷をすツぽりと頭からぶつて居ます。此時の朝食は二人で二十錢でした。物の安い處です。私達はスキーを擔いで高湯へと歩き出しました。幸雪はたいした降りにはなりません。Tさんは肥つて居るので上りは苦しいらしい、四五丁位歩いては息をついて居ます。山神の部落が見えるあたりから、雪を踏むやうになりました。あまりのんびり歩いて居るので幾組かゞ追越して行きます。途中に甘酒茶屋といふ憩み處がありました。此處で食べたしるこのうまさ之が五錢です。あまり値段の事を云ふやうですが實際物價の安い處です。

もう高湯も眞近かでせう。途中藏王の遠望と立札が立てゝありましたが雪はまだ降り止まず、たゞ灰色の空が見えるばかりです。下界は風が少しもありませんが、藏王は遭難者の嗚咽とも思はれる唸り聲をたて乍ら吹雪いて居る事でせう。やがて高湯の溫泉町が見え出しました。高湯といつても奥州の山の中の溫泉だ。どうせ信州の熊の湯みたいなものだらうと想像して居たのでしたが、豫想とは大分違つて居ました。狹くはあるが立派な溫泉町です。町の入口には、此頃スキーの宣傳をやり出した爲でせう。雪で門を作り觀迎と書いてあります。

私達は友人のN氏から紹介された高見屋といふ宿に晝食をとりに入りました。高見屋といふ名は町の一番高い處に建てられてあつて見晴らしのいゝところからきたのでせう。ストーブの周りを五六人のスキーヤーが圍んで居ました。其の中の一人に見覺えがあると思つたら、何時ぞや朝日講堂の山の會に挨拶に出た東鐵の旅客掛長なにがしです。此の土地のスキー選手の案內で明日は峨々に越えるとのことです。

コーボルト・ヒユツテ

腹が出來るとスキーにシールをつけて、新たな元氣で七曲りの坂を登り出しました。番號を書いた丸い指導標に從つて行くとやがて見晴坂です。汗をかき〳〵坂の上に出ましたがガスの爲見晴しなぞは少しもきゝません。しばらくだら〳〵登りの高原狀の平地を行く

と三寶荒神の山腹にあるコーボルト・ヒュッテに出ます。

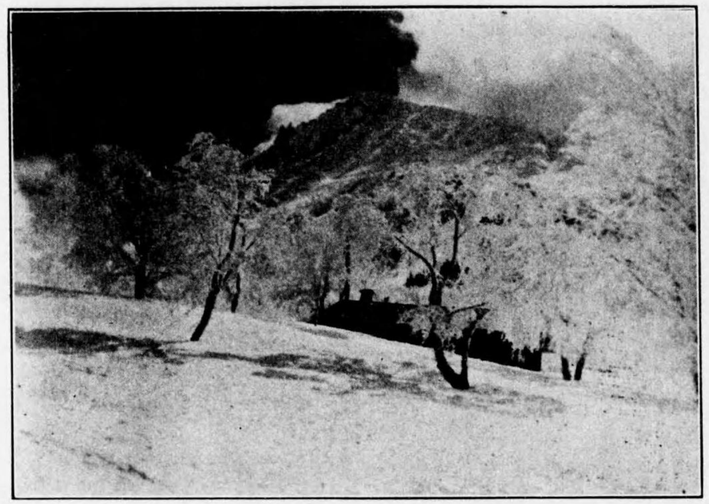
コーボルト・ヒュッテといふのは山形高校の山小屋で窓の大きな感じのいゝ小屋です。Kobold とは山靈といふ意味でゲエテの詩にも出てゐるさうです。

此の小屋に泊るには高湯小學校に申込むか、高湯の宿屋から關接に頼んで貰へばよいのです。使用料は一泊五十錢。雪の階段を降りて小屋にもぐりこむと健康そのものゝやうな、眞黒に雪燒けした學生が四人お茶を飲みながら話をして居ました。一夜を共にするのです宜敷くと挨拶をかわします。

これから山男同士の氣持ちのよい小屋生活が始まるのです。やがて夕餉の支度が始まりました。此山小屋までは「人間萬事金の世の中」といふ言葉は通用しません。ですから必然的に「働かざる者食ふべからず」です。薪を取つて來て切る者、米をといで炊く者、おさいを作つたり用意したりする者、外へ水を汲みに行く者……

小屋の外は、今朝から降つたりやんだりしてゐた雪が俄然風を加へて猛烈な吹雪になつたらしく、ゴーゴーとすさまじい音を立てゝゐます。其の中を一丁程下の水場迄、水を汲みに行く事はどんなにか辛い事でせう。けれども、山男の一人は敢然とバケツをぶらさげ外へ飛び出して行きます。やがて水の一杯滿されたバケツを重さうにして眞白になつた姿を現はすと「御苦勞」とか「有難う」とか簡單ではあるが誠意のこもつた言葉が各自の口から異口同音に發せられます。山小屋の生活は、自我を忘れさせ、そして人間本來の協同的精神にたちかへらせてくれます。どんな事でも「他の人の爲」といふ意識のもとに、否、無意識のもとに行はれます。これが山男の仁義であり、山の道德なのです。

やがてまづしくはあるが樂しい晩餐が終り、よごれ物を片附けて一先づ落付くと、紅茶が沸かされ茶菓に舌鼓をうちながら山、スキー・遭難の話に花が咲きます。煤けた天井からぶらさげたランプは、テーブルを圍んで向ひ會つて居る眞黒な顏にほのかな陰影を作つ



高橋重吉

ヒエツテ

て其の會話に神秘さを添へて居ます。小屋の中の和やかさをよそに、外はたけり狂ふ吹雪の怒號です。コーボルト・ヒュッテの一夜、それは私にとつて實に印象的なものでした。

其の夜は睡眠不足と幾分の疲勞から、翌る朝迄何も知らずぐッすりと寢込んでしまひました。朝になつて聞いたんですが、他の人は寒くて眠られないで夜中に代る〳〵起きて薪をたいたんだそうです。私はすッかり恐縮してしまひました。

夜明け雪はどうやらやんだやうですが風は相變らず吹いて居ます。寒さを我慢して外へ出て見ると、どうですまるでフェアリイ・テールの國です。木々は白銀の花が一夜にして滿開です。何といふ美しさでせう。何とも形容の言葉がありません　藏王の樹氷の美しさは有名な事ですが、これほど〻は想像して居ませんでした。針葉樹が一本一本獨立してそれ〴〵紡錘形にこんもり雪を被つて並び立つて居ます。仔細に見るとどんな小枝の光にも、キラ〳〵光る霧氷が美しく凍りついて居ます。溫度も大分下つたのでせう、雪は良質の粉雪になつて居ます。雲の切間から時々太陽が顏をのぞかせると今だとばかり寫眞器を持出してパチ〳〵やります。それほど藏王は一日の中でも太陽を見られる事が稀なのです。三寶荒神の頂きは上州の荒船に似た姿を見せて居りますが、地藏岳の頭はガスの中です。

昨日の登りに仰ぎ見た鳥兜山は此の小屋と同じ等高線位の處に其の頂きが見られます。

地藏岳

テルモスに熱い紅茶をつめリュックサックを整へると、愈々頂きへと向ひます。小屋の背後を暫く行くとザンゲ坂といふかなりの急坂があります。歸りにこゝをどう降らうかなど〻樂しい空想をしながらジグザグに登つて行きます。樹氷は上に行けば行くほど、風あたりが激しければ激しいほど、益々見事になります。美しいものほど困難な所に置きたがるのは自然の理法なのでせう。

ウインド・クラストにスキーの横滑りを踏みこらへ

踏みこらへ登ると、やがて眼界が開け地藏岳の全容が現はれます。地藏岳の山腹は一面にグロテスクな雪坊主の亂立です。

その雪坊主の間を縫つて漸く三寶荒神と地藏岳との石地藏のある鞍部に達した時は既に天候が怪しくなり出しました。風はうなりを生じ、立つて居ると横におし流されてしまひます。高度にしてみれば二千米突にも足りない山ですが冬の藏王ほど紛れ易い難しい山はないとのこと、其爲殆んど毎年のやうに、犠牲者が出る頂上がだゞッ廣くて、一度吹雪やガスに卷かれると見當がつかなくなるさうだ。尾根一つ間違へても大變な事になる、冬山の恐しいのは其處だ、とかね〴〵おどかされ、亦來る汽車の中でも聞かされて居たところです。

地藏岳頂き近くの風蔭の窪みに、しばしの憩ひをして居る間も何か危險が迫つてくるやうな氣がします。

「そんな思ひをしてまで、何故危險な山へ行くのか」

こう第三者から尋ねられた時私は何と答へていゝか言葉に苦しみます。單なる眺望の良さとかスキーの快味とかのみではありません。其の底に潜む不可思儀な魅力が、戀にも似た激しい熱情を湧き起させ、そしてそれは一部の者にとつて時には死の恐怖さへも忘却させてしまふのです。とにかく此の氣持は山の魅力のとりことなつた者のみに解せられる境地でせう。……

ガスは風に吹き捲くられ乍ら刻々に舞ひ下つてきます。一時の憩ひの後ガスに追ひやられるやうにして降る事にしました。シュカブラの上を兩杖を片手に制動をかけ乍ら横滑りです。雪坊主の間を縫つて行くと昨日高湯で會つた鐵道省の連中が登つて來ました。峨々へ越えると云つて居ましたが、此の天氣では途中から引き返へして來る事でせう。樹の繁つて居る風蔭に入ると素晴らしい粉雪です。ほんの僅かな勾配でも猛烈にスピードが出て、止まらうと制動をかけると、もろにおッぽり出されバットあがる雪煙の中に埋まつてしまひます。練習場では一かどの事が出來さうでも山へ來るとまだ〴〵駄目です。それも廣いスロープを滑降

するならまだしも、かういふやゝこしい地勢になると練習場での自信もどこかへいつてしまひます。しかしやはりスキーの面白さは山に限ります。登山の樂しみを差し措いても、緩急變化のある地勢を滑り降る愉快さを思へば練習場などでボヤ〴〵暇を潰してゐるのは勿體ない位です。全くこの滑降の愉快さを知らぬ人は人生において最大の樂しみを逃してゐるといつてもいゝでせう。ヒュッテに戻つてみると今朝ちやんと掃除して整頓されて居た小屋がひどく散らかつて居ます。「さつきの鐵道省の連中のしごとだ」と學生さん達は憤慨してゐました。晝飯の後、先夜の同居者とシーハイルをかわし、小屋を後にします。振りかへつて地藏岳を見上げると中腹あたりに豆粒程の人間が滑べつたり轉んだりして降つて來ます。案の定、鐵道省の連中が引きかへして來たのです。

私達は往路とは別な林の中の滑走路を通つて溫泉のお宮の裏へ降りて來ました、途中でTさんは轉んだ拍子に肥つた横腹を幹木にぶッつけてのびてしまひました。

宿に着くと、早速どてらに着かへ、少し皮膚にヒリ〴〵するやうな硫黄泉に、昨日からの汗を流しのびのびとした氣持になりました。此の溫泉は子供の皮膚病に良く効き夏は此の溫泉町も相當繁昌するさうですが、今は私達以外には、やはり東京のスキー客が一人と、例の鐵道省の連中が泊つて居るだけです。

五色へ

汽車は晝の一時過ぎなので翌朝はのんびりと寢坊してしまひます。名殘り惜しいが高湯とも、もうお別れです。

色の黑い宿の主人が雪でこしらへた歡迎門まで見送りに來てくれました。同じ道を戻る氣安さに無駄話をし乍ら暢氣な氣持で滑りました。然し乍ら一滑り毎に遠ざかつてゆく三寶荒神、地藏岳の姿に、それは旅するものゝみ味ふところの心惜しさを殘して。徒歩ではあんなに遠く思つた道もスキーで滑り降るには短か過ぎました。來る時は山神部落の下まで雪があつたのに

今は甘酒茶屋を過ぎるとスキーを擔がねばなりません。路傍の草のめばえが春のおとづれをものがたり顏です。遙か遙か向ふの雪の上に霞み乍ら眞白な雪の峰が穗を並べ立てゝゐるのが二つ見えます。その左は飯豐山塊、右は朝日連峯と指摘されました。

山形の町で、知人の家に寄るといふTさんと別れ私は一人來た線を、マッチ箱のやうな汽車に搖られ乍ら引き返へします。一人になると今迄感じられなかつた旅愁が、甘い感傷をもつて迫つてきます。

奥日光スキーツアー

鐵道省のスキー講習會に申込み參加の心算で居た所前の日になつてT君から奥日光にスキーに行かないかと誘れ講習會に行つても一人ではとも思つたので「行かないか」「行かう」で早速話がまとまり（三月十日土曜日）東武電車で淺草を立つたのが午後一時五十分車中には町田立穗氏等の姿も見え乘客はリュックとスキーの人ばかりだ、車窓から男體、赤薙、女峯、白根の白銀に覆れた山々が見えるのも二人の氣持をせき立て

今田敏男

約三時間の後私は線路沿ひの雪融け道を五色溫泉へと歩いて居ました。正月來た時は板谷驛からスキーで滑れたのだが……。谷川にかゝつた釣橋を渡ると向ひ側の山腹は一めんのデブリで、一間幅のヂグザグの道は何處へいつたのやら埋まつてしまつて、たゞ廣々としたスロープになつてます。私は一直線に一歩々々ステップを作り、石川さんの居る宗川旅館へと汗をかき〳〵登り始めました。ぬるいが良く溫まるあの溫泉を心に畫きながら。

くれゝる。

日光驛に着いたのが四時一寸過ぎ、連絡の自動車で冬の靜かな町を馬返し迄向ふ。町には殆んど雪はなく消え殘りが軒下に薄黑く殘つて居るのみ、馬返しに着いたら一寸程あつたが凍り付いて時々滑るので危險だ

以前日光に來た時は馬返しから中禪寺湖迄急坂を歩いた樣だつたが此の頃はすつかり便利になりケーブルカーで中禪寺迄で行き、其處からバスで少しも歩く事もなく湯本迄ひどい風雪でも無い限りは運んでくれる樣な便利さだ。ケーブルカーも案內嬢が居て「ケーブルカーの沿線について御說明申上ます。右の方に白く聳え立つて居りますのは」と關東の靈山男體山から斜面の角度から全線何メーター有ります迄說明してくれる中々のモダン振りで旅人の氣持に興を添へてくれるが、自然迄が文明化されて行くのが淋しく思はれる。さすがに上迄來ると雪もかなりあり、寒さもひどくスキーとリュックを滿載した三臺の自動車はチェンを結び付けてともすると動搖の激しいために天井に頭を打ち付ける程だ。惡道を雪煙を上げて進んで行く、其の度毎に車中は大騷ひだ。動搖にも明日を思ふと輕い興奮をおぼえ嬉しく感じられるものだ。結氷して居る樣に見える靜かな湖を半周して菖蒲ヶ濱の所から自動車が右に折れ急坂をキックターンしながら白樺の點々とした優美な林の中を四五尺もある雪道をあへぎ乍ら戰場ヶ原に向ふ坂を上り切つた所の左の方には新興龍頭スキー場とアーチ型に組んだ案內等も見える。先程から先の二臺の車も途中でもどうかと思れたが原に掛る早々とう〳〵中の車が運轉不能となつてしまつた。見ると車體は雪の上に腹をくつ付けて車輪だけ空轉して居る。いくらエンヂンをかけても唯だ雪がはね飛ばされ車は體をゆす振つて居るのみだ。しまいには皆が降りてスコップで雪を掘り返すやら後押しをやる等幾度かやつてもびくともせず流石の自動車も自然の暴威には敵わず漸く少しは動いても又同じ事を繰返す等太陽も沈かけた荒凉たる雪原の中に初めは面白くやつて居ても寒風の凍りつく樣な、寒い吹きさらしの原の中に

何時らちのあく事やらもわからず運轉手も途方にくれる仕末で自動車の光に凍えた手に吹き掛ける人々の息のみ白く横顔を照して居る。三臺の中先頭のみ事もなげに爆進して行き去つた事等を思ひ出し、今更麓の方で前の車に追ひ拔れた事を悔しがる人もある。運轉手は「直ぐですから辛棒して下さい、此の間等は此の原の中で一夜を明かした事を思ひ出せば何でもないですよ」等と言ふが二度繰り返してされたらたまらずまだ一里もあると言ふのに湯本迄スキーをはいて行くかと言ひ出す人もあつて二時間も掛り動き出した頃はすつかり暗くなり茫漠たる原の向ふには雪灯りに邊りの山々が黑く聳え立つて我々に挑戰して居るかの樣に見える。

そんな工合で豫定よりも二時間も延着し七時に着く筈の所を湯本に着いたのが九時近く「餘りおそいので出て來て見ました大變だつたですネおつかれでせう」と提灯に照されながら宿の人とストーブに迎へられるのも一しほ懐しく思れる。先着の人は溫か相にドテラにくるまつて少しおくれてバタ〳〵と足の雪を振ひ乍ら入つて來た同僚らしい人達を賑やかに迎へて居る「日光はとても寒いですから」と炬燵に火を入れに來た女中さんがどてらを二枚も重ねて着せてくれる。

直ぐ食事の仕度をしてまいりますからと言ふのを斷はりおそくなつたついでに食事前に早速風呂に入る。風の爲めに天井から顏や肩に吹き込んで來る雪に「オーつめたい」と思はず天井を見上るのも靜かな山の湯宿の感じがして嬉しいものだ。

日光の寒さの激しさは前から聞いて居たが風呂から上り着物を着て居る中に今使つたばかりの手拭がすつかり凍り付いて板の樣になつて居るし、窓ガラスが湯氣が凍つて模樣ガラスの樣になつて居るのを見てもいかに寒いかがうなづかれる。

食後炬燵に入つて居るとスキーの手入もいやになるが地圖を擴げ明日のコースを思ふと寒いのも忘れてスキーを手入をする。宿の人の話では昨日迄は大變な吹雪だつた相で「お蔭で明日は好天氣になるでせう」

と言れて見れば尙ほはげみも出るものです。乾燥室は皆ワックスをのばしながら賑やかに明日の仕度をして居る。スキーの宿は眞赤に熱けたストーブのそばで宿の人を圍み皆んな一諸に語り合ふ時先程の苦勞も忘れて一つの樂しみになる物です。

其の時思ひ出したのだが淺草驛から一諸だつた七八人の人達は何處かで見覺えのある人だと思つたら第一銀行の人達だつた。過ぎた日の思ひ出でに話もはずみ夜はふけて行く。

明朝早く起してもらふ事を番頭さんにたのみ寢に付いたのが十一時過ぎて居た。

今朝起してもらふ筈の番頭さんより早く目を覺す。よい天氣らしく厚い板戸のすき間から朝日が線を引いて部屋に差し込んで居る。食事前に裏の狹い第一ゲレンデにて練習をやる。成る程今朝は麗しく晴れて雲一つなく雪質も粉雪で滿點だが起きがけの爲め體の方が思ふ樣に成らないので早く切り上げて宿に歸り朝食をすます。

今日は日曜だけに二百人とかが來るとの話だ同宿の第一銀行の人達は最早出掛ける所だ金精峠の方へ行くとか案內人を付けて宿の側を滑つて行つた。

山王峠の方へは何時も餘り行く人は少いとの事で、「今日も峠越えをする人は無いだらう」と言ふ。「今日は天氣もよいので大丈夫でせう」とはげましてくれるが色々と地理の事を注意してくれるのも旅心にしみて嬉しく感じられる。出掛ける時になつて靴の紐を切つて了つたが其の時もしやと思つたが別にそんな迷信を何とも思はなかつたが後であんな不格をするとは思わず宿の人に別れを告げ勇躍宿を出かけたのが八時三十五分。

今日のコースは三岳を一周する四里半ののんびりとした行程だ。金精峠の頭を正面に見ながら溫泉の裏手から直ぐ上りに掛り雪質もよいのでラツセルの心配等少しもなく前に上つて行つたらしい亂れたシュプールをたよりに二十分程進む。

上の方で人の聲がするので近づいて見ると一休みして居る數人の一行と一緒になる。此の人々も同じコースを取るとか人數も多いのでおくれがちなのを先に失禮して針葉樹の老ひ茂つた密林の中を縫ふて進む。朝日はキラ〳〵にもれ光つて雪面を照す靜寂な林の中を地元で付けてくれた赤い布切の道しるべを目當に處女雪にシュプールを殘して暫らく進む。靜かな林の中に唯だシュウ〳〵と滑る音とストックを突く毎に雪のきしむ音だけが心よく響いて來るのみだ。

蓼ノ湖の北方一七〇七米の鞍部からは林の中を深く木の雪に覆われた谷に添ふて林間を斜滑降で雪原になつてしまつた刈込湖、切込湖に降る。兩湖共夏にでも來て見ると水中に大木が倒れ老木が覆ひかぶさり黑く靜まり返つて居るので何となく幽邃な物凄い氣持がする相だが冬は眞白く雪で覆れて居るし結氷して居るので一直線に渡る事が出來て涸沼との鞍部に着いたのが十一時半頃だつた。

少し早いが晝食を取る事にしてコッフェルで紅茶を沸し食事の仕度をする。持つて來たアルコールが燃え付かず苦勞する。メタが有つたのでたすかる。

其の間にT君の得意のジャンプターンを寫眞にとつたが後で見ると技手の下手さから到底ジャンプと言ふ格好ではなかつたが念入にもピンボケと來て居るのでT君に迷惑を掛けずに濟んだ事は幸だつたが此處まで來て寫らなかつた事は殘念だつた。

此處に着いた時に場所が少し降つた廣い窪地になつて居るのですつかり其處を涸沼と間違ひてしまつてもう少しで北の方に延びて居る尾根に迷ひ込む所だつたが地圖をよく見ると何んと未だ涸沼にも行つて居ない事がわかり二人で今更のんびりも出來ずあわたゞしく食事をすまし出掛けたのが十二時十五分過ぎ。涸沼に通ずるブッシュの多い谷をくぐり尙ほ少し上ると十五分位で涸沼への降りに出る事が出來た。其の下りは百米位の隱かなスロープだが其處を斜滑降で降り頭からもんどり打つて倒れたがあの時よくスキーを折らなかつたとは後の苦笑談だ。

宿の方で朝出掛ける時に逆川の橋には四時迄に着く樣にと言はれたので此處にて少し滑りたかつたが時間もないので少憩して十二時三十分に立つ事にする。

ゲレンデの北側は風あたりもよいと見えて昨日迄の吹雪にも雪の積るいとまもなかつたと見えて岩が薄黑く露出して居て蔭には雪は波形に吹きだめになつて殘つて居る。

沼の東端は樹木少なく明るく開けて居るので其の方によく迷ひ込む人が多いとの話だが其處は瀧があつて降るには不可能との事だ。わざ〳〵其處迄行き引返す人もあるらしい。山王峠の上りは地圖の一七三〇米とある頭より眞直ぐに上ると一時間程にて峠の頂上に出る事が出來るが樹木が多く粉雪のため足場が惡く崩れてしまひえらひ苦勞をしてしまひわずかの所だが幾回のキックターンを繰返しながら峠にたつした時は體中すつかり汗でびつしよりになつて居る。頂上で裸になつて冷めたい風にあたりながら眺める景色はすばらしく目前に男體山の雄姿をひかへ近く太郎、山王帽子岳溫泉岳から白根の銀嶺が一望の元に眺められ中禪寺湖もはるかに白く光つて見られた。

眞晝の太陽はするどく雪に反射するので目は差す樣に痛い顏も大分やけたと見えてヒリ〳〵と痛む。此處には三十分程四圍の山々をあかず眺め光德牧場迄一氣に降れるのでリュックを成るだけ輕くしやうと食物を皆處分してしまひ身輕になつて出發したのが二時近くであつた。

山王峠の下りは南斜面になつて居るがもうクラストして居るのですばらしくスピードが出る。頂上で眺めた山々を背にして一氣に風を切る音のみを耳に聞きながら麓まで飛ばす快味はけだしスキーヤーのみの味はへる境地だ。波狀形にクラストして居るので深いホッケにがく〳〵と體の衝動が激しくやゝもすると體がほうり出され樣とする所を踏みこたえ乍ら滑つて來たがもう一息と言ふ所で後から追かけて來るT君に「すばらしいぞ」とふりかへつたとたんに猛烈にほうり出されてしまつた。

見れば左の方が無殘に先一尺の所から直角に折れて居る。朝出かけに靴の紐の切れた事を思ひ出し今更迷信を或る程度迄信じたくなる。もしもの場合にと思ひ用意して來たシュビツツェも早速役にたつてしまふしT君は此を山に三度持つて行き三度共役にたつたと言ふが餘り有難くない物だ。其の邊から美しい白樺の中の林間滑走となるのだが、左のスキーにはどうした物か雪が付いておまけにチンバなので右の方だけが滑り出したり獨りでに半制動の形になりあらぬ方向に滑り出すので其の毎に倒れ其の苦勞と言つたら一方ならずT君のあざやかな滑降をうらめしく方々の體で牧場の小屋に轉げ込んだのが三時だ。三十分位で來る筈の所を一時間もかゝつて居る。おばあさんの一人留守居をして居る所に早速「スキーを直してもらへまいか」と聞いたら道具がないので駄目だと言ふ。上る途中でスキーを折らなかつたのがせめての氣休だ。ゲレンデで練習するのならいたる所に修繕してくれる所も有るので心配もないが、山に行きスキーを折る程みじめな事は無いと思ふ。船のカジをなくした樣な物だし、遭難した場合の一條件になるのだ。そうした遭難した話を雜誌等で見聞きして居るので空想したくなる。

牧場は戰場ヶ原に續く廣々とした廣原地だ。牧場だけに新しいミルクの歡待してくれるのは嬉れしかつた時には泊めてもくれるとの事だ。

少憩して教へられた牧場の裏を靜かに流れる逆川に添ふて右岸に渡りゆるい斜面を下る。冬中埋められた川も今は所々とけ落ちて兩岸から覆ひかぶさつて來て居る雪にガラスの樣に散りめぐらした氷の下をゆるやかに冷々と水晶の樣に夕陽に光つて流れて居る。

約一時間もかゝり逆川の橋に着いたのが四時過ぎ。冬山の太陽は落ちるのが早く赤い陽が滑つて來た山々に赤く反影して居る。

行程

湯本—刈込湖—切込湖—涸沼—山王峠—光德牧場—逆川—戰場ヶ原—中禪寺

尾瀨の秋

（或る青年の旅の日記帳から）

蘆田金之助

（一）旅程

第一日——昭和八年九月廿日　曇

前夜午後十一時半上野驛發——午前三時廿五分、沼田驛着、六時半沼田發バス——鎌田着、八時半——徒歩、古仲を經て戸倉十一時半——大清水、午後二時、小憩——三平峠四時半——長藏小屋着五時十分、小屋一泊、

第二日——九月廿一日　曇時々雨

午前八時長藏小屋出發——舟にて尾瀨沼を渡り、九時より燧岳へ登る——十二時頂上小憩——午後一時半下山、それより長藏小屋へ戻り一泊、

第三日——九月廿二日　快晴

午前八時小屋出發——十一時檜枝岐小屋着——三條ノ瀧往復二時間餘——一時過ぎ尾瀨ヶ原へ——三時半山ノ鼻小屋着、同所にて一泊

第四日——九月廿三日　晴

午前七時小屋出發——至佛山上下——十一時同小屋出發十二時半鳩待峠——十二平、古仲を過ぎ午後五時土出着同所にて一泊

第五日——九月廿四日　晴

午前九時半土出出發——鎌田着十時半——バスにて沼田へ——午後二時の汽車にて午後六時上野着

（二）三平峠にて

到頭來た。尾瀨に、憧憬の尾瀨に。汗ばんだ肌に霧こめる峠の風は冷々と涼しい。今朝からの七里の山歩

きはこゝで一日の行程を終えた譯だ。振返れば峠下から遙か向ふは唯深い谷と尾根とそれを包む森林が夕暮の霧の中にぢつと憩つているばかりだ。行手の沼は全く霧の中に隱れていて見えない。秋の夕暮の峠は永く休むには凉し過ぎる。さあもう一息、小屋までだ。K君と僕は又リュックサックを擔ひ上げた。

（三）長藏小屋の夜

數人の泊り客、然も秋の山を本當に靜かに味はひ歩かうとこんな山奥までに來る人々、小屋の若い主人も主婦も、その母なる人も舊知の樣な氣がする。疲れを休める山の湯、山の湖でとれる魚の料理、都會では知られぬ樣な物の味の深さ、甘さ、そしてランプの下で目論む明日の計畫……。爐端での山の人々の朗らかな談笑が睡りゆく僕の心から段々消え去つて行つた。

（四）尾瀨沼、燧岳、アザミ濕原

沼のさゝやき、靜かに明けゆく尾瀨の朝、をしどりは浮び、鶴は舞ふ。正面の燧岳は綠の着衣を朝日に照り輝しつ悠然と坐してゐる。そしてその燧の頂に立てば沼は鏡の如く靜かに横はり、山の波々はたゞ遠くへと消えて行く。霧迫る山頂は我々の視界を時折かき消してしまふ。又もし我々が這松の斜面の舞臺に迷込めば手を取られ、足を取られ果はクロイツベルグならぬ近代的高原舞踊をこの尾瀨の神の前に熱心に演出すべく運命づけられる。

アザミ濕原はこの山の南東、沼に沿つて延びてゐる小さな濕原だ。白かんばの林の立竝ぶ小丘に取圍れその間には一面に綠の敷物が敷かれ、初春の樣な爽やかな微風が頰を撫ぜる。暖さと冷たさの調和、ロバートブラウニングのあの單純であるけれども樂しい詩を思ひ出す。

時は春
日は朝
朝の七時
片岡に露みちて
雲雀とぶ
垣の上には　蝸牛

神は天に在しまして
凡て世には事もなし

全く尾瀨は明朗、優し味のある快活な愛すべき土地柄だ。暗さの一つも無いといつた樣な。

（五）三條ノ瀧

瀧は人間を文句なしに威壓する。凡ての物を破壞してしまふぞと無言に脅かす。どう〳〵と三條の瀧はその幅廣い面に水を漲らして直下何十丈かの淵に注ぎ込んでゐる。此の華嚴瀧よりも大きい姿には全く呑まれてしまひそうだ。勇氣を出せ。そして瀧とにらめくらする事數分してやつとこの恐怖に打勝つ。

（六）赤い犬

疲れたる脚を引づり來て見れば
赤き小犬のたはむり來る

檜枝岐小屋は尾瀨ケ原の東端にあつて沼から數町歩かねばならない。人の姿を見る事少なく、まして雪の一丈もつもる冬では全く番人の外人氣はない。K君と僕とはこゝで赤い小犬の觀迎をうけた。小犬は我々の來るのを知つてゐた樣にじやれて菓子をねだる。こんな所では動物でもなつかしいものだ。右の歌は多分富士見峠越をしてやつと尾瀨に入つた學生が作つたのであらうが此の間の氣持を現はしていて印象に深く刻まれてゐる。尙これはその小屋から二里の尾瀨ケ原を越して向ふにある山ノ鼻小屋にゐた山男の敎へてくれたものである。

（七）尾瀨ケ原の色と至佛山の景觀

尾瀨ケ原のあの廣い濕原を歩いてから僕は色彩に對して一段と深い觀察をし得る樣になつた氣がする色彩に對して無頓着な者でもこの原の複雜な色には驚くに相違あるまい。同時にこの色彩をカンバスの上に或は筆を以て又は音樂の中に表現しえたならばどんなに幸福だらうかと考へる。原を中斷して流るゝ數本の清い流れ、正面には臥牛の如く至佛がぢつと横はつてゐる。その頂へよぢ登れば半面は草で蔽はれてゐるが向側は斷崖だ。上越の山々は雲の中に半身を隱してゐるが附近の山々は下に起伏して谷と尾根は雲の蔭をうつし

てゐる。原が箱庭の様に延びる先に燈は毅然として立つてゐる。行手の鳩待峠の鞍部から向ふは深い谷と森林の連續だ。これが尾瀬と町を切離してゐるのである。

（八）山ノ鼻小屋の焚火

たゞ單に雨露を凌ぐに過ぎない小屋も山ではこの上なく快よい住居だ。小屋の眞中に仕切つた爐からは元氣よくぱち〳〵音さして焰が上る。焚火の上には眞黑くなつたブリキ藥罐が二つ。焰がぱつと上る毎に圍る五人の男の頰に赤味が加はる。その中の二人は都會人らしい旅の青年だ。外は風さへない靜かな闇、星は全天に散りばめられ明日の天氣を約束する。尾瀬ケ原の秋の夜は寒い。

焚火は燃える。この原始的な火は此の上ないよい馳走だ。山に入れば火こそ唯一の夜の友なのである。この火に手をかざし、足をあぶり、燒けるまでに頰を近づけつゝ焰を凝視しつゝ語る山の物語の何と身にしみる事か。默然と聞き入りつゝこの焰の中に自分を集中してしまへば自分は全くうつとりと自然の兒に還えしてしまふ。そして焰の中に原始の幸を見出すのである

三人の山男はしきりと東京の話をし始めた。旅の青年は此處で又現實を取戻した。二人の山男は東京へ行つた經驗ある者らしく文明に對する事々の驚きを口を極めて表現し他の一人に語つた。他の一人は全く都會を知らなかつた。「電車つてどんなものだらう」獨りつぶやくその男の一言に凡ての事が判つた。その男は五十を越しそして未だ電車を知らなかつたのだ。「一度東京へ行つて見たい」男は淋しくつけ加へた様だつた。

「東京といふ所は長く田舍に住んで居る人には住むに快よい處ではありません。見物に一寸行く位ならば面白い處でせうが、此の景色、此の空氣の尾瀬に住む事の出來る人はどんなに幸か知れはしない。生れ乍らの山の男として……」

傍の都會の青年はかう誰とはなしにつぶやいたのだつた。

「明日は鳩待峠を越えて此の美しい尾瀬におさらばだけれど又近い中にきつと來ますよ」

焚火は又パチ〳〵と燃え上つてこの青年の心を理解してくれた様だつた。

終り

積雪期の白馬岳

淺田信次郎

汽車が梁場を過ぎると、急に雪が多いので驚いた。四月一日なのに雪が降つてゐたので車窓の展望は皆無でしたがたゞ漫然と眺めてゐますと、雪の針葉樹林や埋れた糸魚川街道が幻影の様に表はれては限りない灰色のヴェールの中に吸込まれてゐました。そして調律的な輕い車輪のひゞきが二本のレールを傳つて絶え間なく空に溶けこんでゐました。

一番列車に乘つたので、車內は朝湯の様に靜かなそして廣々したもので乘客としては僕等たゞ二人のベルグシュタイガーと、も一人四谷で下りたポーターらしい人だけでした。

汽車が松川橋を渡れば間もなく森上につきました。ガイドの宮田豊美氏が出迎へてくれました。

雪にあけ、雪にくるゝ山の街森上は重苦しい灰色の空氣に閉され、未だ冬籠をつゞけてゐました。驛の前に裝を凝した數臺の馬橇が埋れて顧られないのも、なんだか言ひ知れぬ寂しい氣がしたし異常の降雪を如實に物語つてゐるものでありました。

モンペ姿の娘等が屋根までとゞいてゐる雪を鋸を以て除雪に努めてゐるのも東京では絶對に見られない光景でした。

宮田氏の宅で約二時間休んでゐる間も眞暗な厨でしきりに冬籠りの苦痛を告げてゐました。さうでせうこんな陰氣な重壓に忍んで數ケ月を過すと云ふ事は僕と